
慇懃無礼な過激派探偵

豊武進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慇懃無礼な過激派探偵

【Nコード】

N6428W

【作者名】

豊武進

【あらすじ】

飯田浩輔15歳。職業は私立探偵。大胆不敵で慇懃無礼。どんな事件も過激な手段を用いて解決していく、ハードボイルドな少年の活躍劇。ストーリー重視です。

章の更新に三カ月ほどかかりますので、気長に待っててください。辛口の批評、コメント、評価お待ちしております。

第一章「風が吹く」警察官連続殺人事件発生。解決の要請を受けた探偵同盟は飯田浩輔と探偵同盟第12位プリンスに事件解決を委ねた。

第二章「風といっしょに」連続爆弾魔が次々と学校を襲ってくる。
飯田は休暇で日本にやってきたプリンセスとともに事件の解決にあ
たった。

1-1 呼び出しは何時も唐突に

住んでいる地域を北半球と仮定した場合、九月の朝は八月ほどはないが、げんなりとするほど暑い。高温多湿というこの日本独特の氣候が多いに作用しているであろうことは言うまでもない。

飯田浩輔は自宅代わりに借りている宿舎で新聞を読みながら、額を流れる汗を絹のハンカチで拭っていた。純白のハンカチは汗と垢とであつという間に薄汚れた。飯田は汚物を触るような手つきでハンカチの端を掴むと、慎重にポケットに納めた。新聞の一面にはやや演出過剰気味と思える見出しがでかでかと書かれている。

『警察官連続殺人鬼、今年こそ逮捕なるか？』

飯田は見出しをちらりと見ると、鼻で笑った。その下には、細かい文字でくだらだと、警察の捜査能力がどうだ、こうだと言う専門家の意見つきだった。

「随分と安っぽい文句が並んでいるものです。しかも、警察を馬鹿にした書き方ですねえ。『こそ』を使って強調しているところを見ると、まるで捕まってほしくないみたいですよ」

『捕まらない方が嬉しいに決まってるだろ。マスコミもこの四年間、ずっと大々的に取り上げてきた特ダネなんだから』

ややおかしなイントネーションの日本語が、スピーカーを通して部屋に響いた。

声の主は飯田が開発したAIのウェイター。画期的な人工知能だ。インターネット上から必要な情報を自分で選択し、飯田に提供することもあれば、自分の考えを披露することもある。世界中のパソコンをハッキングし、様々な情報を引き出すことも可能だ。

勿論、ロボット三原則に基づいて行動している。口調はぶっきらぼうで、時折平然と罵りの言葉を呟いたりする。そのように設定した覚えはなく、それが飯田の頭痛の種だった。

飯田は書斎のレザー張りの椅子の上で頬づえをついた。後ろに設

置してある移動式本棚から、何冊か本を抜きだすと、テーブルの上に投げ出す。ハードボイルド小説ばかりだ。飯田はそこから一冊抜き出してぱらぱらとめくり、本の塔の一番上に戻した。退屈そうに欠伸を漏らす。

「それにしても、暑いですねえ……」

思い出したように飯田が言う。飯田の部屋には勿論冷暖房もついているのだが、彼は空調が嫌いなので全く使用していなかった。そのため、室内の温度は外気とほとんど変わらない。都内の気温は三十二度だった。

さらに彼の服装は、イギリスのブランドの茶の背広に、真紅のネクタイ、金属製の蒼いネクタイピン、ワインザーカラーの白一色のワイシャツを着込んでいて、礼装用の手袋まではめている。暑いと感じるのも当然のことだ。常人ならぶっ倒れているだろう。

ウェイターは夏になる度、飯田にそんな服装が暑さの原因だと言ってきたが、飯田が聞き入れたことは一度も無かった。そのため、彼に言うのはもう諦めている。

『そんなことよりも、早いところ仕事にとりかかったらどうだ。ここ一カ月、お前がまともに仕事をしているところを見たことが無いんだが。私はオーバーヒート寸前まで働かされているのに、不公平だ』

「そうは言いますがねえ。あまりにも平和すぎて、仕事の一つも転がっていないんですよ。私は仕事をしたくてたまらないのに。世の中が悪いんです。いや、治安はいいんでしょうけどね」

飯田はそう言って新聞を投げ出した。机の上を滑った新聞は、そのままゴミ箱に放り込まれた。ウェイターはそれを見て、新聞は廃品回収に出せと言おうとしたが、飯田が面倒くさそうにゴミ箱から取り出したのを見て、何も言わなかった。

飯田の年齢は十五歳。ようやく義務教育が終わった年頃の、彼の仕事とは何だろうか？

答えは私立探偵だった。飯田は八歳の時にイギリスで起きた事件

を解決して以来、この職に就いている。世界最高の探偵の一人だが、彼がインターネットに掲載しているメールアドレスに事件の依頼が飛び込んできたことは無い。

それでも、彼は食べていけないどころか一生遊んでいても暮らせるほどの収入を手に入れているのだ。それはひとえに、飯田の所属している団体のお陰だった。

『何を言っているんだ、飯田。お前の目は節穴か？ お前の放り出した新聞にでかかど書かれているじゃねえか』

飯田は歳不相応の、鋭すぎる目を細め新聞を一瞥すると、わざとらしく大欠伸をした。不揃いに積まれた本が小刻みに揺れる。

「わかってますよ。警察官連続殺人鬼についてでしょう？ これは捜査するまでもなく『探偵同盟』から直々に命令が下りますよ。だから私が貴方に情報を集めさせているんでしょうが」

ウェイターは返答しなかった。代わりに、デパートや学校でよくあるようなチャイム音が響き、女性の声が流れてきた。

『探偵同盟の招集がかかりました。飯田浩輔さん、会議室までおいで下さい』

飯田はため息をつく、鳶色の髪を掻き上げた。同色の瞳に憂いを浮かべ、立ち上がった。ドアを後ろ手で閉める。レザー張りの椅子は主を失い、くるくると回転した。

「来ましたよ」

飯田は髪を掻き上げながら、目の前に並ぶスクリーンに呼び掛けた。三十人は入れるであろう会議室に、彼の声は虚しく響いた。心の中でため息をつく。

なんだって無人の会議室で大声を張り上げなきゃなんのですかね。

会議室はカーテンが閉められている上、電気もつけられておらず、光源はスクリーンのみなので部屋全体が青白い。長時間この部屋に

いたら視力が低下しそうだ。

そう言えば、探偵になってから健康診断を受けたこと、ありましたっけ？ 飯田は聡明な頭を回転させたが、全く記憶に無かった。

『遅かったな、バトラー』

彼を非難する声がスピーカーから漏れる。何も罵声を送信するためだけにこんな高級なスピーカーを使う必要はないでしょうに、と飯田は毎度ながらそう思う。

バトラー、とは彼が所属する団体である、『探偵同盟』における彼の称号である。ナイト、レディ、プレイヤー、放浪人など適当に作っているとは思えない。大したネーミングセンスだ。一体この誰が考え出すのだろうか。

「ふむ、今度入ってきた新入りの称号はどうするべきかな？」

「聞くところによると、そいつは博打が好きらしい。だから、『ギャンブラー』なんてどうだろう？」

「おお、それはいい。完璧だ」

「異議なし」

渋顔のむさ苦しい男達（そのように飯田が想像している）が、額を寄せてそんな馬鹿な会議をしているところを想像すればするほど、飯田は嘔き出しそうになる。

「熱中症で部屋で倒れていたもので」

『馬鹿なことを言っていないで、さっさと座りたまえ。我々が多忙であるのを君もわかっているだろう』

議長である探偵同盟第一位ナイトがぴしゃりと言った。飯田は緩慢な動作で指定の席である入り口の手前、右側にある席に腰を下ろした。プレジデントズ・チェアと名づけられた大層ご立派な椅子に座ると、飯田の身体はずぶずぶと沈みこんだ。長時間座っても腰や尻が痛くならないよう、工夫されているらしい。どこにどのような工夫が施されているかは知らないが、心地よいのは確かだ。

部屋の中央に一つだけ存在するテーブルは楕円形で、飯田の席は丁度ナイトの真向かいにある。そして、ナイトの左側に偶数、右側

に奇数の位の人間が座っているのだった。

位はそれぞれ、探偵同盟に加入した順なので、飯田の能力が他の探偵に比べ著しく劣っているというわけではない。

さらに、座っていると言う言葉は正確ではない。椅子こそあるものの、実際はスクリーンの場所である。この場所に存在しているのは飯田だけだ。新入りは顔を見せる必要がある。だから、唯一飯田の席だけが置かれている。きっと、他の同盟員は何百マイルだかキロだかの遠く彼方で参加していることだろう。

照明も点いていない部屋で、このように座っている姿は素晴らしい馬鹿に見えますねえ。飯田は小声で呟いた。改名するならば、円卓の探偵団とでもすべきでしょう。

『さて、御存じの通り、現在バトラーが滞在している日本国では、警察官連続殺人鬼なる者が十五年間で計五名の警官を殺害し逃走中である。奴が毎年九月中旬から十月中旬にかけて警官殺しを実行しているのは、皆様方もご承知のとおりだろう。』

今回日本警察からの要請もあり、我々探偵同盟が本件に介入することになる。よって、探偵同盟最高位、ナイトの名において、探偵同盟第十三位バトラー及び探偵同盟第十二位プリンセス両名に、この事件を解決することを命ずる。他の皆様方には、各々の国から彼らの支援をお願いしたい』

「ちょっと待って下さい。何故私一人では駄目なんです？」

飯田が口を挟んだ。途中までは予測していたことであつたが、その先は寝耳に水のことだった。何故独りで事件の捜査ができないのか。かの探偵同盟の誇り高き一員が、独りではたった一つの事件も解決できない。それは末端だから、などと思われているのなら、最大級の侮辱だ。

『お前独りでやらせれば暴走するからな。正直に言って、『放浪人』から提出してもらったお前の事件解決方法は目に余る点がある。毒を以て毒を制す、暴力には暴力を、などともんでもない。職権を乱用しているのではないか？』

飯田は放浪人のスクリーンを睨むなどという幼稚な真似はせず、唇をきゅっと引き締め、おどけた仕草で自分の両手を肩の高さまで掲げた。

世界最高峰の探偵達の集まり、探偵同盟に所属しているといえども、いつも解決すべき事件がある訳ではない。加えて、捜査権の有無は国によって異なるが、日本では事件が発生したとしても、探偵同盟が正式に介入するまで、探偵には捜査権を与えてもらえない。そんな彼にできる事はと言えば、指名手配犯の搜索か文字通り暴力団の壊滅だった。

どの同盟員にも特別な権限が与えられる。彼は暴力団を武力によって排除した後、それで自分の暴力行為を帳消しにしていたのである。職権を乱用している、と言われても仕方のないことだ。

だが、勿論飯田は自分の楽しみのためだけで暴力団を壊滅させていたわけではないし、相手が仕掛けてこない限り、自分で手を出したことは無かった。彼は彼の信念に基づいて実行していたのである。その証に、一般市民を抗争に巻き込んだことはない。飯田が一方的に事務所に乗り込み、映画のような大立ち回りを繰り広げるからだ。そうすることで被害を最小に抑えており、死者を出したことも無い。そのおかげか、都内の暴力団の活動は沈静化する傾向にある。だが、探偵同盟はそれを是認してくれないらしい。探偵同盟第八位、放浪人が彼を見張っていたのだから。

彼は国境を気にせず世界各国を旅する探偵で、隠密な行動を得意とする。そのため、探偵同盟の査定を行ったりすることもあれば、査問委員会にも名を連ねている。目をつけられては危険だ、と警戒は怠っていないかったのだが、後の祭りのようだ。

『語弊を招く言い方かもしれないが、プリンスス一人でもお前の暴走を止められるか不安だ。だが、お前のために貴重な人材を浪費するわけにはいかん。異議は無いな？』

「……ありません」

それは質問という形を取っていたが、実際はほとんど脅迫に近い

ものであった。それ以上言えば、今回の事件の担当から解任されることは明らかだった。飯田は渋々、彼の意に沿うことにした。

『私も異論はありません』

プリンセスが凜とした声で言う。久しぶりに彼女の声を聞いた。位が飯田の一つ上だからと、ナイト達に謙遜していたのだろうか。彼女の使う英語はクイーンズ・イングリッシュで、声には温室育ちの響きが混じっていた。面倒なことになりそうですね、と飯田はため息をついた。

『それでは会議は以上で終了する。皆様、御苦労だった』

同盟員を皆様と言いながら、敬語を使わないナイトはさっさと会議を終了させた。途端に周囲のスクリーンの電源が切れ、数秒後ブラックアウトする。飯田は独り、闇の中に取り残された。彼はため息をついて椅子から立ち上がった。なんだか頭痛がしていた。ついでに、胃も痛い。

「ナイトは我儘、放浪人は密告好き。困ったものですねぇ……」
そしてゆっくりと、約五歩分離れたプリンセスの席に向かって歩き出した。

これと言って理由は無かった。恐らく、探偵同盟入団以来初の共同作戦で、プリンセスはどんな人物か気になったからだろう。無論、机に近づいてわかるものではないのだが、ちょっとした気まぐれというやつだった。

プリンセスの机にそっと手をつき、そこに置いてあった椅子に座ろうとした、その時だった。

ひゅん、という風を切る音がした。闇の中で何かが煌めく。それは一筋の放物線を描いた。咄嗟のことに飯田は顎を上げてその攻撃をかわした。危うく喉を掻き切られるところだった。椅子が勢いよくひっくり返る。椅子の金属部が床にぶつかり、派手な音を立てた。今のは一体？ 考える暇も無く左に転がる。振り下ろされた何かが床に当たり、鋭い音が飯田の鼓膜を刺激する。再び、暗闇でその何かが光った。それは何かの金属が、ドアの外の僅かな光を反射し

たようだった。

横に伸びた光の軌道を、身体を捻ってかわす。鋭い痛みが頬を襲った。頬に一筋傷ができたようで、触ると黒ずんだ血が手袋一杯に広がり、繊維の隙間に吸収されていた。剣でやられたのは明らかだ。かなりの切れ味らしい。

だから服が細切れになりかけているわけですか。

飯田は突き出された剣を避け、後ろに飛ぶと、自分の服をそっと撫でた。今のところ、何処も切れていない。よかった。この服は高いんですよ。

だが、血のついた手袋は捨てなければならぬだろう。飯田はどうでもいい事を考える自分に苦笑した後、思考を切り替えた。目前にいる、見えない敵についてだ。

この宿舎に敵が入り込むなどまず考えにくい。となると内部の者。しかし、内部の人間で飯田の実力を知らぬ者はいない。それを知っていれば、最初から彼の腕前を試すようなことをしないだろう。

ならば、相手はここをパスできる上、飯田のことをあまり知らない者や、初めて飯田と接する者となる。しかもそれだけではない。香水のようなにおいがする。このきつい香りは、バニラエッセンスだ。ということは、相手は女性だろう。そして、これは推理とは言えないが、攻撃してきた場所。それはプリンセスの席近くだ。

飯田は勘を頼りに、もう一度攻撃を避けると、革靴で思い切り剣を蹴り飛ばした。最初は外れたらしく、すぐさま足を掬おうと、剣が伸びた。飯田はそれを跳んで避けた。暗闇の中もう一度狙いを定めると、思い切り足を振り上げた。

手ごたえが少なかったのは、剣自体が小さかったからだろう。しかし、弾き飛ばすことには成功したらしい。予想以上に乾いた、そして澄んだ音が部屋に響く。飯田は相手が反応する前に素早く、左肩から吊ったホルスターに納めていた銃、コルト・ディテクティブ・スペシャルを抜き出すと、相手に突きつけた。相手が息を呑むのがわかる。撃鉄を親指で起こしながら言う。

「随分手荒な挨拶ですね。プリンセス。それがイギリス流ですか？」

「いいえ。ただの腕試しよ」

落ち着いた、イギリス訛りの英語が響いた。

発光ダイオードの照明が一斉に点灯する。突然の明るさに飯田は思わず目を細める。プリンセスは飯田の前に姿を現した。

艶やかな黒髪の、腰まで届きそうな長さのツインテール。中世風の露出度が少ないデザインで、ダークブルーを基調とした、何重にもフリルがついた豪華なドレス。そこらの、所謂ゴスロリ服とは根本から違う。

飯田よりも三十センチほど身長が低く、前髪はダッチボブカットになっており、眉毛や睫毛は少しカールし、細くて長い。目はやや垂れ目で、鼻は丸く、小さかった。引き締まった薄いピンク色の唇の周りには飯田そっくりの、不敵な笑みが浮かんでいる。

洗練された美しさを誇っており、西洋人形のような印象を与える。全体的に見て、温厚そうには見えた。最も、周囲を威圧するような圧倒的な存在感がそれを阻害しているが、それでも純粹無垢で繊細に見える少女の一举手一動からは、品性や気高さというものが感じられる。確かに探偵同盟の一員なのだろう。

彼女は落ちていたフェンシングの剣を軽々と取り上げると、バトンのようにくるくると回転させ、やや乱暴に会議室の机の上に乗せた。会議室は何処も傷ついていない。そこからも、彼女の技量の高さが窺えた。

彼女は剣の代わりに置いてあった黒の日傘を取ると、それをそっと畳み、ドレスの端を摘むと華麗に一礼する。それから、その場できると回って見せた。丈の長いドレスが風になびく。

「探偵同盟第十二位、プリンセスよ。飯田浩輔。生身で会うのは初めてね。少し早めに来日させて貰ったわ。会議にもここから出席したのよ」

飯田は拳銃をゆっくり下ろすと、左腋のホルスターに収めた。気障なピエロがやるように、胸に手を当て、深々と腰を折って一礼す

る。

「ええ。わかっています。貴方の美声がいつもより近くから聞こえてきましたから」

プリンセスは人を小馬鹿にしたような表情でくすくすと笑った。

「お世辞を言っても何も出ないわよ」

「お世辞とはとんでもない。フェンシングがお得意のようですね」

プリンセスはああ、あれ？ と呟き、少し怒った表情になった。

「いくらなんでも、人の席に座ろうとする方が悪いんじゃないかしら？」

「そうですね。すみません」

飯田は素直に謝った。プリンセスの表情が和らぐのを待って、彼は一つ気になっていたことを訊いた。

「女性に歳を聞くのは失礼であると思いますが、おいくつです？」

この少女が自分より年上というのはまずあり得ない。もしかすると、探偵同盟は位が上がるほど、年齢が若くなっていくのではなかろうか。仮にそうだとすれば、同盟の運営には保育園で充分だろう。だが、少女はくすくすと笑うばかりだ。

「あら、失礼とわかっているのなら訊くべきではないでしょう？ それに、大したことではないわ。世の中にはもっと重要なことがあるはずよ」

「そうですね。もっと重要なことはいくらでもあります。とりあえずは、警察官連続殺人鬼のことについて考えるのでしょうか」

飯田はプリンセスの手を恭しく取ると、ゆっくりとした歩調で歩きだした。

1-2 探偵物語

馬鹿みたいにでかい会議室を抜ける。先ほどの照明に目が慣れていたため、部屋を出ても目が眩むことはなかった。盗聴される恐れがないよう、会議室のクリーム色の壁やドアは防火扉のように分厚い。

何の絵画も飾られていない白い壁紙の廊下に出ると、スマイレの花の匂いが鼻を突いた。二百メートルはあろうかと思われる赤い絨毯の終わりまで歩くと、そこにナンバーが割り振ってある扉が三つある。二と書かれた番号の部屋が、飯田の借りている部屋なのだった。何故飯田が金も払わず、借り物であるこの部屋を我が物顔で使用しているのか。

それは、探偵同盟を支援している、もっと言えば創設した男が、この施設を提供しているためである。

男の名はエドワード・ライラック。彼は探偵ではないのだが、ウォール財団という世界各国に市場を展開する巨大財閥の創設者であり、探偵同盟第一位ナイトがこの世で唯一信頼する男とも言われる。そもそも探偵同盟とは、世界最高峰の探偵を集め、その探偵達に国境を越えて難事件を解決させることが目的である。巨額の富を得たライラックが、自分の子供を誘拐、惨殺された後ナイトに申し出て、二度とそのようなことがないようにと設立したのが始まりである。世界で起こっている難事件の捜査の、六割には必ず同盟員が関わっていると言われる。

だが、社会的にはあまり認知されていない。同盟員がマスコミの前に顔を出したがないためだ。

そして、捜査権が与えられること。別にこれは自体、何のおかしなところはない。アメリカの探偵は、CIAや州警察に協力し、事件を解決に導いていることは周知の事実だ。

現状はと言えば、結局皆、馬鹿な意地の張り合いで自国の事件に

熱中し、中々他国の事件解決を行わない（行わせない）のだが、それでも十三人もいれば、難事件は片端から片づくものだ。特権が与えられていれば、なおさらのことである。

そして、その探偵同盟に所属しているため、飯田が、厳密に言えば探偵同盟の同盟員がウォール財団の施設を住居代わりにできるのだ。プリンセスがこの研究所をパスできるのも、彼女が同盟員だからに他ならない。

探偵同盟に所属しているという証明書は小型のカードで、顔写真の代わりに本人の指紋が掲載されている。その指紋とカードの所有者の指紋を照らし合わせ、本人であると確認するのだ。

「私の部屋は三番目よ。まあそれはともかく、早速会議に入るとしましょうか。貴方の部屋でいいかしら？」

プリンセスもまた仕事熱心な女性らしい。飯田は頷くと、カードキーをスライドさせた。指紋認証をパスし、ドアを開く。プリンセスはまだ自分の部屋を見ていないらしく、きよろきよろと彼の部屋を見渡した。今は火の点いていない暖炉を見て、少しほっとしたような表情を浮かべたのは、もしかすれば彼女の自宅にも暖炉があったからかもしれない。

飯田が住まいとして使用している部屋は広く、ホテルの部屋で例えるなら大統領の間といったクラスに近い。仕切りこそないが、居間、書斎、和室、寝室、応接室に洗面所、簡易キッチンにバスルームまでついている。デザインはイギリス風になっており、暖炉は備え付きだった。家具などは全て飯田が自分で買い込んだ。

「ああ、そこで靴を脱いで下さい。一応ここだけは日本式なので」
プリンセスは硝子のように透き通る色のハイヒールを脱ぐと、丁寧に並べた。

飯田はウェイターを呼び出すと早急に資料を整理させた。スクリーンに投影したデスクトップ画面を、プリンセスからも見やすいように調整すると、飯田は机の引き出しから伊達眼鏡を取り出し、それを掛けた。ふちのない、楕円形の眼鏡だった。蔓の色は黒い。

この眼鏡は望遠鏡は勿論、赤外線ゴーグル、暗視ゴーグル代わりにもなる優れもので、さらに、眼鏡のレンズに映る物を録画することもできるので、飯田は事件の度にこれを使用している。思い出すより、報告書を書くのが楽だからだ。唯一の問題は、ずれやすく、外れやすいことだった。

「さて。始めることとしましょう。ウェイター。この警察官連続殺人鬼事件について貴方の知っている情報を読み上げて下さい。あと、私が作成したファイルがデスクトップにあるはずですから、それも使用して下さい」

プリンセスが、一人で話し始める飯田に猜疑の目を向ける。彼が自作のAIについて説明すると、納得したらしく、ソファからディスプレイを見上げた。彼女はソファの上で寝転がるような真似はせず、手を膝にしっかりとつけていた。深窓の令嬢よろしく座っている姿は、まさに探偵同盟第十二位『プリンセス』の名に恥じない。

『言っておくが飯田。お前の資料は資料と呼べない。お前の言う報告書は夏休みの絵日記だし、始末書は読書感想文とほとんど変わらない。書いたのは実質私だ』

そう日本語で前置きしてから、ウェイターはCPUをフル稼働させた。何の訛りも無い英語がスピーカーから紡ぎ出される。プリンセスは日本語がわからないので、自動で切り替えたらしい。しかも、敬語を使用している。やればできるじゃありませんか、と飯田は思った。

『警察官連続殺人鬼は十五年前から登場した、現在日本における最も凶悪な犯人の一人と言っても過言ではありません。今まで殺害した人間は五人。まず死刑でしょう。』

十五年前に殺害された最初の警官の名は木島俊朗。警視庁のマル暴担当の警部補で、以前勤務していた派出所付近の公園のトイレにて、唾内を撃ち抜かれて死んでいるのが同僚によって発見されました。全身に、特に頭部には頭蓋骨が陥没するほどの傷があったため、遺書が出てきたものの、警察は殺人事件と断定し捜査していました

が、今なお犯人は不明です。

彼を殺害したのが警察官連続殺人鬼であると思われる理由は、木島警部補を射殺した拳銃から発射された弾の線条痕が、五人目まで共通していたためです。

そして四年前。二人目の被害者が出ます。それ以来毎年一年のペースで警察官が殺害されている、というのが現状です。二人目の被害者は腹部、三人目の被害者は肺、四人目の被害者は首、五人目は心臓をそれぞれ撃たれていましたが、犯人は、必ず最後は口の中に銃を突っ込み発砲するという手段をとっています』

「……まず第一の謎は、どうして木島警部補が勤務時間中そこへ出向いたか、ということですね。自分で呼び出した可能性もあります。が、警察の場合、飲み屋や喫茶店と言った場所で落ち合うのが普通でしょう」

「事件関係者だったか、知人だったか……捜査情報を与えるとかわれ、出向いた可能性も十分考えられるわ。つまり、前もって彼が呼び出したのではなく、呼び出されたというわけよ」

プリンススは形のいい顎を人差し指を押さえながら考え込む。飯田は口元を手で覆うようにしながら考えていた。飯田が椅子に座り直すと、椅子がギシギシと音を立てた。飯田は長い脚を組み、机の下でぶらぶらと動かしていた。

「そうですね。次に、後頭部を始めとする全身に残った傷。遺書があったと言うことは自殺に見せかけたかった、ということでしょうが、傷のせいで全て台無しになっています。しかも、この傷は生活反応のあるものでした。となると、今はともかく殺人鬼は素人だったのでしょう。」

さらに、この時点では、殺人鬼は銃器を所持していなかったと思われる。手にしたのは恐らく、木島警部補を昏倒させた直後。彼はマル暴の刑事だったですから、普段から銃を所持していたのかもしれない。それを奪い取って木島警部補を射殺。その後姿を眩ました、そんなところですかねえ」

飯田は目を瞑って想像した。狭く、不潔な公衆トイレで取っ組み合う二人の男。一人は木島警部補で、もう一人は犯人だ。犯人と木島警部補は互いの身体を掴み合いながら、壁や個室の仕切りに身体をぶつけて暴れまわる。現場にあった鏡は蜘蛛の巣状のひびが入っていた。恐らく、どちらかが相手の頭を掴み、鏡に叩きつけたのだろう。

そして、その取っ組み合いはやがて終焉を迎えた。劣勢になった木島警部補は、遂に倒れてしまったのだ。チャンスとみた犯人は木島警部補の内ポケットを探り、拳銃を奪い取った。そして、彼を個室に押し込むと、口の中に拳銃を突っ込み、発砲した。当初の目的を果たした殺人鬼は、遺書を彼のポケットに入れ、立ち去った。

遺書を用意していた時点で、殺そうとしていたことは明白だ。だが、取っ組み合いをしたということは、初めから拳銃を所持していたのではなく、木島警部補から奪って入手したということになる。

「……そして、何の恨みか、罪も無い警察官たちを次々と射殺、つてどこかしら？」

プリンセスの声で飯田は我に返った。身体を起こし、椅子に座り直す。再び椅子が軋んだ。

「ええ。次に、二つ目の謎は、何故啞内で発砲するか、ということです。四人目と五人目の被害者は首と心臓部にそれぞれ被弾しているんです。つまり、啞内を撃って殺害する必要は何処にも無いんです。どのみち急所に当たっているのですから、そのままにしておけば大量出血で死に至ります」

そこで、飯田は一度言葉を切った。

「……まあ、手口を統一させることで同一犯だと教えたかったのかもしませんが、それにしてお粗末ですね」

飯田はウェ이터に、デスクトップに配置したファイルを開かせた。ファイルの中には二人目から五人目の現場の写真が入っており、それらが様々な角度から写されている。

「ウェ이터。それぞれの写真を合成して下さい」

飯田が言うが早いのか、ウェイターは一瞬で写真を合成し、立体画像にしてディスプレイに表示した。写真を基に造られたCGが現れる。ウェイターはそれを二人目から順番に表示していった。それらは様々な角度から投影され、飯田の想像力を補っていた。

「二人目の現場に残された弾痕は四つ。なお、被害者の所持していた銃弾は全て盗まれています。三人目、四人目も同じで、五人目の現場に残された弾痕は五つでした。弾痕の位置は様々ですが、被害者の身体の周りが一番多いです。」

ですが、五人目だけは例外で、天井やら机の上の電話機やらを撃っています。また、被害者に生活反応のある傷が大量に発見されたことから、揉み合いになったものと思われます。五人目の警官は屈強な体つきの人間でしたから」

飯田が何か口にするごとに、ウェイターはすぐさまそれをCGへと変えていった。だが流石に、射殺された警官のCGを作るほど無神経なAIではなかった。

「……銃に慣れているようで、扱いが得意では無いわね」

プリンセスが写真を見ながら、ぼつりと呟いた。プロの犯行ならば、何発も無駄な弾を使わず、一発で仕留めるはずだ。

「ええ。ここからも素人臭さが目立ちます。無論、銃器を多少は扱いたれていなければ、標的の近くに当てることすら叶わないでしょうが……」

飯田はそう言いながら、ショートカットキーを使って、ファイルを閉じた。青一色のデスクトップ画面が再びスクリーンに現れる。

「何故被疑者は何時も同じ時期に犯行を重ねるのか？ 何故被疑者は警察官ばかりを殺害するのか？ 私が謎だと思うのはそのくらいですが、プリンセスはどう思われます？」

飯田はネクタイを締め直した。真夏に紅いネクタイは暑苦しく見えるのだが、飯田は何も感じていないようだ。見る側の気持ちにもなっってほしいわね。プリンセスは心の中で呟いた。

「そうね、私も大体そんな所よ」

「果たして犯人は、愉快犯なんでしょうかね？　この国のマスコミはそのように騒いでいます」

飯田の口調は、愉快犯のはずがない、と言った調子だ。プリンセスはそこに引っ掛かりを覚えた。無差別殺人と言うものを引き起こすのは、大抵愉快犯が多いのではないだろうか。

「さあ、どうかしら。愉快犯であると考えれば、きっと理解することはできないわね」

「まあ、理解する必要はないでしょう。推理とは矛盾点を洗い出し、それを論理的に説明するだけのものです。論理的でないのなら、説明する必要はありません」

「まあ、そうかもしれないわね」

「それから……」飯田が言い淀む。

「それから？」

「我々探偵同盟を敵に回したが最後です」

その言葉は何の感動も生み出さなかった。ウェイターがぽつりと呟く。

『それが決め台詞のつもりか？』

沈黙が部屋を支配した。プリンセスは呆れたように鼻を鳴らすと、お邪魔しましたと冷たい声で告げ、足音高く部屋を出て行った。飯田は演奏を終え、アンコールを期待する指揮者のように両手を広げていたが、やがて手を下げざるをえなかった。

「私って間抜けに見えます？」

『ああ。とても』

ウェイターは即答した。飯田は仏頂面になってぶっきらぼうに言った。

「……苛立つ答えをありがとうございます」

プリンセスは自分の部屋に入ると、ハイヒールを脱ぎかけ、苦笑した。踵まで脱いだハイヒールを履き直し、部屋の中に入る。いっそのこと脱いだ方が楽なのだが、さすがにそれは躊躇われた。

プリンセスの部屋の間取りも、飯田のものと大体同じだ。早速彼

女は寝室に運び込まれていたトランクからモバイルPCを取り出すと、電源ボタンを入れた。パスワードを入れ、起動するまで数秒待つ。デスクトップの上にあるアプリケーションソフトを起動すると、途端にディスプレイがブラックアウトし、赤い不気味な英語が画面に浮かび上がる。

『探偵同盟第十二位 プリンセス』

つまるところ、このプログラムを起動すると、探偵同盟の会議に出席することができるのだ。さらに、特定の一人と通話することも可能だ。プリンセスは早速、ナイトに連絡を入れた。

『少しお待ちください』

という英語が浮かびあがり、きっかり三十秒後、ナイトは応答した。

『プリンセスか。バトラーには会えたか？』

「ええ。中々の名探偵ぶりを発揮してくれたわ」

お世辞ではなく、本心から彼女はそう言った。

「ところで、バトラーはアームチェア・ディテクティブではないのよね？」

『そうだ。彼奴は現場で身体を張って犯人を追う男だからな。そこそこ優秀な頭脳を持っておるというのに、勘ばかりに頼りおる。それが彼奴の悪癖だな』

「でもその勘が大切と言ったのは貴方でしょう？」

『時と場合による。よいか、彼奴から目を離すな。彼奴は犯人逮捕のためなら一般市民を拷問すら掛ける男だ。決して目を離すでないぞ』

「わかったわ」

通信を切ると、プリンセスは軽く首を捻った。こきこきと音が響く。両手を組むと大きく伸びをした。

簡単なエクササイズは新たなメールを伝える音楽に中断された。メールは放浪人からだった。

「『飯田浩輔の簡単な履歴を送っておくので目を通しておくように』

……？」

プリンスは途端にうんざりとした顔つきになって、添付ファイルを開き、画面をスクロールさせた。そこには飯田浩輔の詳細なプロフィールが書き込まれていた。

1-3 履歴書は常に正確に

「飯田浩輔、年齢十五歳。身長百七十六センチ、体重五十四キロ。痩身。目と髪は鳶色。アメリカ合衆国国籍を持つ。常用語は英語と日本語。また、それらを含む八ヶ国語を使用できるとされる。柔術の心得あり。

アメリカ合衆国で八歳の時、偶然巻き込まれた事件を解決。その後、犯罪に興味を持ち、過去の殺人事件を調べる。十歳の時ヨーロッパ諸国を巡り、様々な犯罪現場を渡り歩く。その三年間で五十件以上の犯罪に遭遇する。十三歳の時に来日。以来、探偵事務所を構える。十四歳の時、探偵同盟に所属することを許され、探偵同盟第十三位『バトラー』の称号を得る。

疑心暗鬼が強く、誰かを気に入ることとはあっても、気を許すことはまずない。女性を特に丁重に扱う。常に礼儀正しいが、慇懃無礼と称するのが正しいほど。

事件の解決に当たる際には、不眠不休、食事なしで捜査活動を行う。しかし、事件を解決してしまった途端に重度の鬱に悩まされる。かかりつけの医師からは、

『極めて重度の躁鬱病であり、本人が自殺してしまう可能性も皆無とは言い切れない』

との診断を出されている。自殺未遂を起こしたことこそないようだが、危険な環境に身を置こうとしているように思える。

捜査方法は体当たりと称するのが最もふさわしく、頭で考えるよりも行動を重点に置いている。常に携帯しているコルト・ディテクティブ・スペシャルを使用しないことはない。本来日本国では拳銃の携帯は違法であるが、政府からの許可を得て携帯している。

結論からいえば、非常に優秀な探偵の一人ではあるが、命令無視が頻繁で、戦法と言えど敵を挑発することばかりであり、穏便な事件解決を行うことは不可能に近い。彼には多くの監視をつけるほか、

彼が現在の地位に留まるのが相応しいか再評価する必要があると思われる……」

プリンスは一気に飯田の履歴を読み終えると、やれやれと首を振った。随分アクの強い探偵のようだ。

まあいいわ。これからゆっくり、彼のお手並みを拝見させてもらうとしましょう。プリンスはいたずらっ子のような笑みを浮かべると、大きなあくびを漏らした。時差ボケがまだ完全には治っていない彼女は睡魔に負け、ドレスから大きめのワイシャツに着替えると、大きなシングルベッドに身を投じた。ツインテールがほどけ、長い髪がシーツの上に扇状に広がった。

1-4 Come on baby!

次の日、飯田が新聞に目を通すと、相変わらず警察官連続殺人鬼の記事が一面を飾っていた。まるで祭りの前のようにだと飯田は思った。

警察官連続殺人鬼の件を様々なマスコミが持ち上げたが、警察は一切のコメントを行わず、ただ捜査員を増員したとだけ伝えた。

飯田は英雄気取りで人を殺していく警察官連続殺人鬼を引き摺りだすため、一つの賭けに出た。

相手がマスコミを利用し、劇場型犯罪を敢行するなら、こちらも同じ手に出ればよいのである。その方法とは、マスコミを通して彼を挑発し、彼にとって『正当である』評価を与えない、という方法だ。

具体的には、警察に記者会見を開かせ、そこで大声で犯人の悪口を立て並べる。当然そのような刺激的なニュースは読者が多いに喜ぶものなので、報道陣も大きく取り上げるだろう。飯田はそれを目にした犯人が怒り、再び大々的な犯行を行うことを狙っているのだ。同時にこれは、英雄視されることを望む犯人の願望をぶち壊すことにも繋がる。

「貴方、自分じゃなくて他の警官が狙われたらどうするの？」
「心からお悔やみ申し上げます、とでも言っておきましょう」

渋い顔のプリンセスとは対照的に、飯田はにこやかに笑みを浮かべた。プリンセスは呆れると同時に、そこまで非情に、そして無関心になれる飯田に対し尊敬に似た感情を覚えた。

飯田は既に、警視庁にて会見をする手配を済ませていた。

彼は次の日、一人で警視庁へと赴いた。駐車場には警察車両に混じって、報道陣の車が多く駐車してある。飯田は堅牢な造りの警視庁を見上げると、にやりと笑った。その顔を、警備に当たっている警察官が驚愕と恐怖の入り混じった表情で見つめた。飯田の顔は指

名手配書の顔写真に混ぜても、大多数の人が凶悪犯と誤認しそうな表情だったためだろう。飯田はゆっくりとした足取りで建物に入った。

恐らくはマスコミであろう人間が多数待機しており、ロビーはかなり混んでいた。飯田は人と人の間に器用に身体を滑り込ませると、受付嬢の元まで辿り着いた。

「すみません。枝野刑事を呼んでいただけますか？」

微笑しながら言うと、受付嬢は爽やかな笑みを浮かべ、少しお待ちくださいと飯田に告げた。飯田は頷くと、他の人間の邪魔にならないよう移動した。壁に凭れかかり、ポケットに突っ込んであったハンカチーフを弄ぶ。羨望と嫉妬が入り混じった目線で見られるのは、既に慣れていた。

「初めまして。飯田……浩輔さん」

きっかり三分後、広報担当の刑事が現れた。少なくなった黒髪に何本もの白髪が絡みつき、渦を巻いている。あまり身だしなみに気を遣っていないのか、くたびれたグレイの背広の肩には大量のフケがついていた。刑事は飯田を安心させるように笑いかけたが、目は死んでいた。飯田も皮肉っぽい笑みを返す。彼はきつと、こう思っているに違いない。

「こんな子供に、上層部はへいこらしているのか？」と。

二人は挨拶もそこそこに、早速記者会見の部屋へと移動した。マイクが何本も並んでいるのを見て、飯田はどこにスピーカーがあるのかと思う、部屋を見渡したが、それらしいものを発見することはできなかった。

「ここで会見を行いますか……本気ですか？」

「何がです？」

「その……あの作戦のことです」

飯田は何をいさら、と言いたげな目で刑事を見つめた。

だが、刑事がこの作戦に不安を抱くのは当然だろう。

この作戦は効果があることは認められたものの、あまり賛成は得

られなかった。むしろ反対されかけたので、そこは強引に探偵同盟の特別権限でごり押ししたが、危険であることに変わりはない。現在一年で一人に済んでいる犠牲者の数が増える可能性もあるし、怒り狂った犯人が民間人を襲撃する危険性もある。

「一応警視庁や警察庁のお偉方の許可は頂いたことですし……それより記者会見なんて、私なんかが参列できるものではないのに。名誉なことです。飯田家に代々伝えるべきですね」

飯田は目を忙しく動かし、話題を逸らした。

「……いや、その……被害が拡大する可能性は？」

「私のパソコンで計算すれば八十パーセントはカタいでしょうね。しかし……」

飯田は刑事の顔をじっと見つめた。飯田の顔に浮かぶいたずらっ子のような笑顔に、彼は少しばかり驚く。

「私は全世界において最高峰といわれる探偵です。私はそれに見合う実績を持っていますし、何より、そう呼ばれることを誇りに思っています。何としてでも犯人を捕まえてみせます。そのためにもどうか、私の作戦に付き合ってください」

老けこんだ顔の刑事は顰め面であったものの、竜巻状になっている自分の髪をそつと撫で、頷いた。

会見はそれから二十分後に始まった。大手のテレビ局や新聞社は勿論、耳慣れない名の報道局なども揃っている。この事件に関して世間がどれだけ注目しているのかがよくわかる。

記者会見でマイクを前に、警官がゆっくりと紙を見ながら話し始める。今回の事件の見立てについて当たり障りのないことを延々と述べながら、飯田の方をちらりちらりと見つめる。その目線に気づいた報道陣が飯田の方にカメラを向けた。飯田は椅子に行儀よく座っていた。

「……では、私からは以上です。続いて、独自の捜査を展開している探偵同盟の飯田浩輔氏に、彼がプロファイリングした犯人像をあげてもらいます」

警察の面々が一樣に、飯田の顔を不安そうな目で見つめる。対して報道陣はおおっと歓声を挙げ、飯田に注目した。

あの探偵同盟の探偵の一人が捜査に乗り出すとは！

探偵同盟は名前や実態そのものは噂されていたものの、公の舞台に姿を見せたのはこれが初めてのことだった。一斉に焚かれたカメラのフラッシュで、彼の姿が白く浮かび上がる。飯田はまだ中学生か高校生ぐらいの年齢だが、西洋人らしい長身と、堂々とした風格のお陰で怪しまれることはなかった。

彼は澄ました顔で三脚に取りつけられたカメラを握りしめ、原稿もなしに早口で言い始めた。

「ご紹介にあずかりました、飯田浩輔です。この度、警察官連続殺人事件の捜査を独自に行っています。私がプロファイリングした犯人像ですが、犯人はまず三十台前後の男です。そして、死体を意味もなく傷つけることからサディストであると推測されます」

飯田は饒舌に、適当で出鱈目なプロファイリングした犯人像を立て並べた。

犯人は性欲が旺盛であるが、もてないため憂さ晴らしに犯罪を行っていること。銃の命中率が悪いのは、極度の肥満のため、自分自身の身体を上手く支えられないことなどと述べた。

報道陣は、始めは呆氣にとられた様子で質問も少なかったが、目を光らせて、喰らいつくように質問を浴びせるようになった。飯田はそれらの質問に対し、わざと犯人が屈辱であると感じさせる言葉ばかりを数秒で選んで、一度も噛むことなく、すらすらと回答した。その様子を飯田の眼鏡越しに聞いていたプリンスは、真のサディストはこの男だろうと確信した。自分のことについて質問された時は、ジョークを交えながら受け流した。

「私も人の性癖に口を挟む気はありませんが、少なくとも、こんな卑劣な下衆を何時までものさばらせたくはありません。この唾棄すべき男を、個人的に、私の力で逮捕したいと考えています」

最後に飯田はこう締めくくった。再びカメラのフラッシュが一斉

に焚かれた。報道陣がぞろぞろと列をなして部屋から出て行く中、彼は大きく伸びをした。

「……本当に、大丈夫ですかね？」

同席した刑事の一人が神経質そうに何度も繰り返す。飯田は毅然とした様子で言い返した。

「私達を信じて下さい。私は探偵同盟の威信を掛けて、この捜査に当たっているのですから」

飯田は立ち上がると彼らに一礼し、マスコミから十分距離を取って部屋から出ていった。彼は藁にもすがる思いで彼の後ろ姿に一礼した。

マスコミの反応は絶大なものだった。良識派の新聞は、飯田の発言内容を極めて控えめにして、探偵同盟の介入によって事件の捜査は極めて大きな進展を見せたいと述べたが、週刊誌や民報のワイドショーなどは、飯田の発言を面白おかしく取り上げ、連日報道を続けた。

動画共有サイトでは、彼の発言を記録したビデオを何処で手に入れたのか、編集が無いものをそのまま垂れ流すものがアップロードされ、一日何万回も再生された。その動画には飯田の発言に対する賛否両論のコメントが載せられていた。

飯田の目論見はほとんど成功した。全てのマスメディアを利用し、犯人に喧嘩を売ったのである。そして、この報道があった二日後、報道局各社に犯人からの手紙が届いた。

1-5 事件発生

「やはり、御立腹のようですね」

飯田は自分の部屋で珈琲を啜りながら言った。今日は奮発して、ブルーマウンテンを飲んでいる。プリンセスはベッドに腰掛け、ディスプレイに表示されている、芸能人に対する報道が最も少ない飯田のお気に入り報道局のニュースを眺めていた。画面には、白髪の交じった、落ち着いた雰囲気男性アナウンサーが全文を読み上げている。

『飯田浩輔へ。あの記者会見場で君の語った私のプロファイリングは、所謂プロファイリングとはかけ離れている。私を非難し、世論を味方につけ、英雄気取りかもしれないが、あんたのやったことは負け犬の遠吠えという奴だ。お前ら負け犬に私を捕えることはできない。覚えておきたまえ、飯田浩輔。私はこの一週間以内に、お前ら負け犬どもを駆逐する。その首の一つは貴様だ!』

プリンセスは飯田に背を向けてテレビを見ているにも拘らず、あくびを手で隠しつつ、チャンネルを次々と変える。どれを選択しても、犯人の挑発的な文章と、飯田に対する期待だ。あるマスコミは掌を返したように、飯田が同席したことに対する、警察への不信感を報道していた。

「……日本のマスコミって、大したものね」

プリンセスが元のチャンネルに戻しながら言った。

「まあ、久しぶりの劇場型犯罪なのですから、無理はないと思いますよ。マスコミがこうも騒ぐのは」

飯田は陶器のカップをデスクの上に置き、プリンセスからある程度距離を保ってベッドの縁に腰かけた。彼女は椅子代わりに使っていたベッドで姿勢を正す。ベッドは新品同様で、使われた形跡が無い。本当にこの部屋で暮らしているのかしら、とプリンセスは疑問を抱いた。

「ところで、あの手紙ですが、探偵同盟の特権を使用して警視庁に送られてきた脅迫状、あるいは犯行予告をそのまま頂いてきました。」

飯田が背広の内ポケットから茶の封筒を取り出して、わざわざ一旦立ち上がり、プリンセスに手渡した。プリンセスはその封筒を注意深く観察する。

封筒や切手はよくある種類のもので、特定は難しいだろう。消印は都内の郵便局のもの。紙もごく普通のA4用紙で、ボールペンも多分そうだ。テレビ局等に送られたものは、これをコピーしたのだろうとプリンセスは見当をつけた。

「問題は、文面の方かしら……」

「読めるんですか？」

「日本語は話せないだけで、読めるわよ！」

プリンセスは真っ赤になって言い返した。頬を空気で膨らませながら手紙を乱暴に開く。

書かれている内容は非常に攻撃的だ。筆跡鑑定を逃れるため、パソコンを使用する犯人が増えている中、手書きとは珍しい。その手書きと言うのも、定規を使用することなく、本当にそのまま、多分効き腕で書かれている。よほど自分が捕まらないという自信があるのだろう。

「で、貴方の意見はどうでしょうか？ プリンセス」

飯田はリボルバーの銃口を天井に向け、弾倉を回転させ、弾丸を吐き出させている。弾丸は敷物の上に落ちたため、音はしなかった。空の弾倉をセットし直すと、掌でマガジンを包みこみ、反動をつけて一気に回転させる。それだけでは飽き足らず、西部劇の気障な保安官のように、人差し指をトリガーに引っ掛けくると銃全体を回転させていた。

「そうね、まずこの文章を書いた人間は、余り冷静ではなかった、と考えるべきかしら。何より文字全体が歪んでいるし、文字を書き間違えた部分を、修正液を使用することなくインクで塗り潰してい

る上、貴方に対する呼称が何度も変わっているわね。最初は君、という単語を使用し、次にあんた、さらに負け犬、お前、極めつけは貴様になっているから。元々君、と言う言葉にはやや見下したような響きがあるから、結構苛立っていた様子が見受けられるわ」

「成る程。続けて下さい」

「もう一つ気になった言葉が、『負け犬』という言葉ね。この言葉の前にお前ら、とついているけれど、お前ら、と相手を指しているのだから、負け犬と言う言葉は必要無いはずよ。

それなのに、この言葉をあえてつけたということは、この言葉に何らかの想いをもっていることに他ならないわ。そう、例えば自分のトラウマになっている言葉とか」

プリンセスは得意気に自分の推理を披露した。探偵と言う人種はうぬぼれが強くないとやっていけないのかもしれない。

飯田の方を見ると、彼は啞内に自分のリボルバーを突っ込んでいるところだった。

「……何やってるの？」

プリンセスは蔑みの目線で彼を射抜く。飯田は彼女の絶対零度の目線を浴びると、手の動きを停止させた。

「いえ、まあちょっとした実験みたいなものですよ。それよりも、先程の推理、お見事です。手紙一枚で、それほどの推理を導き出すとは」

口から拳銃を引っ張り出すと、銃口に唾液の細い糸が繋がっていた。胃の辺りを押さえているのは、胃液が逆流してきそうだったからだろう。相当深く押し込んだらしい。ハンマーが起きているので、トリガーを引けば永遠の眠りにつけただろう。弾が入っていればの話だが。

「殺害された刑事達は、どれほど深く拳銃を突っ込まれたか体感してみようと思ひまして」

飯田は咳き込み、喉を擦っている。プリンセスはまだ冷たい目線を止めようとはしなかった。

「それで、自殺未遂を起こしてたわけ？」

「だから、違いますって……しかし、想像以上に突っ込まれたようですねえ……痛かったですよ。粘膜まで届きましたからね。マズルフラッシュで喉の粘膜が焦げていても当然のことです。しかし、咥内で撃鉄を起こすのは、なかなかどうして、至難の業ですね」

飯田はリボルバーの銃口をウェットティッシュで拭っている。プリンセスは呆れたように両手を肩の上に上げたが、やがて母性を感じさせる目つきで、彼をやさしく見つめた。

「……貴方も大したものね。警察へ向かうはずの敵意を、自分に向けさせたのだから」

「何のことです？」

飯田は空を向いて惚けた。手元では銃把を弄り回している。あまりにもわざとらしいその反応に、ついプリンセスはくすくすと笑い出す。

「この事件を『個人的』に、『私の力』で解決するんでしょう？」

「よく覚えていましたね。私はアドリブで喋っていたので、ほとんど覚えていませんでしたよ」

飯田も僅かに笑みを見せたが、すぐに顔を引き締めた。

「ところで、これで犯人の敵意は私に向いたわけですが、全面的にというわけにはいきません。何故なら、彼の警察に対する恨み、あるいは憎しみは何年にも渡っていることになります。木島警部補を殺した後、四人も殺したわけですし。」

それに、私は彼の手の届かないところにいます。貴方や警察が危惧したように、彼は殺したい相手を殺せない状態にあるわけです。そうになったら、犯人は身近の、自分の手の届く場所の人間を殺害しようとするかもしれません。それが派出所の警察官である可能性は最も高いです」

そこで、飯田は一度言葉を切った。

「ところでプリンセス。貴方は何故、殺人鬼が毎年この期間に殺人を行うと思いますか？」

「……さあ、わからないわ。自殺者は月の初めと終わりに多いって聞くけど……夏休みが終わるから、なんてどうかしら？」

「……面白いですが、違うでしょうね。唯の学生が何年も、拳銃を使用して事件を起こし、捕まらないなどほとんどあり得ません。学生などが使用している場合、手当たり次第自分の気に入らない人間を殺害してしまい、すぐに足がついてしまうでしょう。」

それから補足までに言っておきますが、日本人の多くは、日本は治安が悪い、と言いますが、実際のところ悪いのは体感治安であって、治安はそこまで悪くないんです。つまり警察の検挙率自体は相当なものです」

「わかったから、貴方の考えは？」

「深読みしすぎかもしれませんが、警察官に恨みがあるから、でしょう。この九月中旬から十月中旬というのは、全国的に見て警察官の一次募集期間なんです」

プリンススは、なるほど、と言いたげに軽く首を何度も振った。腰元まで届く長いツインテールが揺れ、バニラエッセンスの香りが部屋に漂う。

「確かにそれは、深読みであってほしいわね。警察官の一次募集に落ちた腹いせに警官を射殺するなんて、洒落にならないわ」

「そう思います。……しかし、殺人とは一見不条理で、何処か正当性のあるものはずですからね。なにがあるかわかりませんよ」

飯田はそう言って立ち上がると、珈琲カップを簡易キッチンへ運んだ。上着を脱ぐことなくカップを洗おうとするその後ろ姿は滑稽だった。プリンススが笑いをこらえようと、袖元で口を押さえた時、アナウンサーが緊張した面持ちで画面に現れた。

『臨時ニュースをお伝えします。今日正午頃、都内の黒川駅前交番で、警察官の遺体が発見されたとのことです。詳しい情報はわかっていますませんが、咄内を銃で撃たれているとのことです……』

そのニュースを聞くと、血相を変えて飯田はカップを放り出し、ドアを蹴破らんばかりの勢いで部屋から出た。飯田が廊下に飛び出

すと同時に舶来品の、緑のラインの入ったカップが床に落ち、ガシヤンと音を立てて割れる。

「ウェイター！ ブルーバードを表に出して下さい！」

走りながら飯田がAIに指示する。AIは人間風に言えば緊張した声で返事を返した。

飯田は走り下りるのも面倒だったため、途中まで階段で下りると、二階の吹き抜けから階下に飛び降りた。膝をばねのように曲げ、着地時の衝撃を吸収する。何事も無かったかのように走り出す彼を、職員が驚きの目で見つめる。

プリンセスもまた、彼の後を追おうとしたが、ウェイターに止められた。

『プリンセス。まだ現場付近に殺人鬼が潜伏している可能性があります。貴方はここで待機していて下さい。必要な情報は飯田が集めてくるはずです』

プリンセスは神妙な顔つきで、こくりと頷いた。

1-6 捜査開始

交番に、警察車両が止まっている。

勿論それは異様な光景でもない。警察車両が派出所に停車しているのは至極当然の風景である。

だが、警察車両の赤色灯は、人々を不安に陥れる警報音こそないものの、光を燈し回転している。そして、小説や邦画でよく登場する、現場に貼られた黄色いテープ。狭い交番で何が起きていることを察するのは容易い。そこを鑑識と思われる警察官が走り回っていた。まだ遺体は運ばれていないようだ。入口の引き戸にはめ込んであるガラスは、弾痕でズタズタになっている。

飯田は走行中のブルーバードのドアを開け飛び降りると、黄色いテープを跨いだ。途端に警官が飛んでくる。その警官は身体に似合わず童顔で、顔は丸く目は小さめで、顔だけ見れば子供のようだった。大きな身体で戸を隠すように立ちはだかる。

「駄目です。こちらは事件現場なので……」

言っている途中で飯田の顔に気づいたらしい。警官は初め驚愕を顔に浮かべ、続いて攻撃的な色を浮かべた。お前のせいで警官が一人犠牲になったんだ、とでも言いたげな顔だった。飯田はその顔を冷ややかに見つめると、やや大きな声で言った。

「入っても、いいですね？」

警官は暫し躊躇いを見せたが、やがてこくりと頷いた。周りの警官から浴びせられる鋭い刃物のような目線が無視しながら、飯田は交番の中にゆっくりと足を踏み入れた。

狭い交番は、地獄絵図となっていた。

手前にある長机の足元には銃弾が大量にめり込んでおり、机の脚についている灰色に塗装された金属板は大きく変形していた。机の上にある資料は散乱しており、血糊がついた書類がこちら側まで飛んできている。ロッカーも同様に凹んでおり、相当の弾丸が叩きこ

またたことを物語っていた。床には数え切れぬほどの空薬莢が落ちており、足の踏み場が無いほどだった。それらの空薬莢はほとんど踏みつけられていた。だがやり残したのもあったらしく。飯田が机の下を覗き込むと、原形を留めた空の薬莢が転がっていた。

机の裏側に回ると、果たしてそこに、被害者はいた。

ロッカーに凭れかかっている被害者は、全身に弾を浴び、蜂の巣と言う形容詞が相応しい。紺色っぽい色の制服はずたずたになっている。顔面は今までの被害者のように、弾丸が後頭部を貫通したせいで、ひどく歪んでいた。

飯田は被害者に両手を合わせると、決然とした態度で、被害者の腰にあるホルスターから光るニューナンプを取り出し、残弾数を確認した。一発も発射されていない。

それから、彼はポケットからドライバーらしき工具を取り出すと、机にめり込んでいた弾丸をてこの原理で抉り出した。弾丸には綺麗な線条痕が残っていた。飯田はそれと空薬莢をポケットに納めると、室内をもう一度見渡した。

これだけの銃撃は、ハンドガンでは難しいだろう。例えば、犯人がリボルバーで無かったとしても。となると、ライフルやサブマシンガンなど、フルオートにできる類の銃だろう。とにかく警官という名の『的』に向かって撃ちまくったに違いない。

飯田はそれらをじっくりと見つめながら、すぐ後ろに待機していた、先程の大柄な警察官に話しかけた。彼は両腕を組み、飯田を見下すように壁に凭れかかっていた。

「第一発見者は？」

「付近に住んでいた主婦です。銃声を一発聞いて駆けつけたところ、このようなことに……」

「なるほど。銃声を聞いたのは一発だけですね？」

「ええ」

飯田は素早く頭を回転させた。銃声を聞いたのは一発。これだけ薬莢が落ちているのに、一発だけ。

恐らく、啞内を撃ち抜いた理由は今までと同じで、それをしなければ自分の犯行であると理解させることができなかったから。

死んでいる人間の啞内を撃ち抜くという無駄な作業はそれで説明がつくとして、方法はどのようなのだろうか。ライフルだかサブマシンガンだかで、わざわざサプレッサーを外す手間まで掛けて、啞内を撃ち抜くだろうか？ いや、まず行はずが無い。

なら、主婦が聞いた銃声は、今まで通りハンドガンによるものに違いない。何処かから、違う弾が見つかるはずだ。だが、流石にこれ以上現場を荒すことは躊躇われたので、飯田はぐりと身体を一回転させ、交番全体を撮影すると警官に、

「弾を全て分析して、その結果を下さい」

と言った。警官は黙って頷いた。飯田は眼鏡の蔓を押さえると、小声で呼び掛けた。

「プリンセス、他に確認しておきたいことはありますか？」

その時、四キロ離れたウォール財団の研究施設で、飯田の送る映像をウェ이터がディスプレイに映し出していた。プリンセスは突然呼び掛けられ、びくりと身を縮こませた。ツインテールが力無く揺れる。

『い、いえ、特に無いわ』

「では今からそちらに戻ります。ウェ이터。ブルーバードをこちらに」

呼ばれるが早いか、真紅のブルーバードは飯田の元へ突っ込んできた。飯田を敵視していた警官も啞然としてその様子を見守る。無人車が彼を目がけて突っ込んでくるのだ。警官は思わず目を瞑り、彼がミンチになる様子を瞼の裏に描いた。

だが、車は彼の膝元十センチ前ほどで、見事に停車した。飯田は悠々と車に乗り込むと、ブルーバードのハンドルをいつも以上に力を含め、握った。それに気づいたのは、監視カメラから彼を見つめていたウェ이터だけだった。運転席で飯田がピンと伸ばした両腕は震えていた。

1-7 珈琲タイムにや早すぎる

ウォール財団の研究所は宿泊施設のような造りになっている。一階にちよつとしたロビーと喫茶店、大浴場にカラオケルーム、ゲームセンターまでもが設置され、二階に研究所、三階に職員の宿泊設備が設置してある。そして四階は飯田やプリンセスが寝泊まりしている、VIP専用部屋、ということになるのだった。

飯田とプリンセスは、給仕以外誰もいない喫茶店で、並んで食事を摂っていた。二人とも黙りこみ、ただ機械的に手を動かしていた。プリンセスはヨークシャー・プディングを食べ、飯田は珈琲を飲んでいた。カプチーノだった。

やがて、プリンセスが重い口を開いた。

「……どうするつもり？ 早々と犠牲者が出てしまったわよ。探偵同盟が公の場に顔を出したと言っても、実際に顔を出したのは貴方一人なのだから、貴方が全面的に責任を追及されることになるわ」「構いませんよ。私が『個人的に』解決すると言ったんです。だから、責任も私個人にあります。探偵同盟にご迷惑をおかけする気は全くありません」

飯田はそう言うのと、まだ湯気が立っている珈琲を一気に飲み干した。やや乱暴にカップを皿に戻したせいで、カップがソーサーの窪みに上手くはまらなかった。

「ところで、イギリス料理は世界一不味いと言われますが、この喫茶店で作られたものはフランス料理のフルコースにも負けますよ。もっと笑顔で食べられたらどうです？」

「待ちなさい、飯田浩輔。貴方、ちゃんと食事を摂ったの？」

飯田は返事を返さず、ロビーを突っ切り、螺旋階段を登って行った。プリンセスは上司である自分の言葉を見殺した彼に対し、苛立ちと怒りを覚えた。彼女は荒い鼻息を漏らしたが、直後深いため息をついた。

彼女自身は、飯田浩輔と言う人間を個人的に好きかどうかは別として、飯田の能力を高く買っている。彼を捨てる気は無いのだが、飯田は切り捨てられるのも覚悟している様子だ。中間管理職的なポジションにいる自分はどうするべきなのか、とプリンスは思った。『お前も少しは現場を見ておくといい』

そう言ったのは、ナイトだった。プリンスは来日する前、ナイトと二人きりで言葉を交わしていた。

『いくら難事件を論理的に解決してきたとは言えども、時には探偵としての勘というものが気になる事件は多い。警察官連続殺人鬼の事件を解決するよう、日本政府から要請を受けている。お前をバトラーの目付け役として派遣するから、現場を見てこい。無理にとは言わんがな。なにせ、バトラーが嫌がるだろうし……』

バトラーはクセが強い男だが、探偵として優秀なのは事実だ』

だけど、ナイト。ここまで自分勝手だとは思わなかったわよ。プリンスは心の中でナイトに愚痴を漏らした。心の中のナイトは、その愚痴を鼻で笑って受け流した。

ナイトの顔を知っているわけではないが、彼はきつと、女性が見たら憎たらしさを覚える顔つきに違いない。プリンスはそう断定した。

プリンスもまた、本国の紅茶に劣らない代物を勢いよく飲み干す。ロングヘアのウェイトレスがやってきて、彼の珈琲カップと彼女のを下げた。そして、年下のプリンスにも敬意を払い、丁寧に話しかけた。

「飯田のことは気にしないで下さい。彼は、事件中絶対にまともな食事をしないのです。元々食事が嫌いと言うこともあってか、彼は事件を解決するまで珈琲とパン一切れで食事を終わらせることが多々あるのです」

プリンスはその淡々とした、まるで誰もが知っている数学の方程式でも暗誦するような話し方に、危うく頷きかけた。そして、やれやれと首を振った。給仕は彼女が香水代わりにつけている、バニ

ラエッセンスの芳香を嗅ぎ取った。

飯田は部屋に駆け戻ると、疲れた足で和室に倒れ込んだ。一度深い深呼吸を行うと、二つ折りした座布団の上にどっかと座り、降魔坐で座禅を行った。座禅では本来しないはずなのだが、いつものように目を閉じる。彼にとって型はどうでもよい話だった。

今しなければならぬのは、事件現場へ『行く』ことだ。そのために、一番集中できる姿勢を作っただけのことだった。

彼の心は、今日の事件現場へと飛んでいた。

飯田浩輔は元から持つ優れた記憶力に加え、一瞬見た風景や写真を鮮明にそのまま思い出すことができる。要するに、直感像素質者である。その視覚的記憶力は異常なまでであり、彼は今、事件現場に立っていた。

デスクに回り込み、銃弾を浴びてひっくり返った椅子を起こして、そこに座ってみた。背もたれについた血は、既に乾いている。

「成る程……」

真正面には道路があり、左右には住宅が所狭しと立ち並んでいるものの、見通しがよい。緩やかな傾斜の坂があり、それは奥から手前に向かって下り坂となっている。

仮に、人が散歩していれば見えるだろうか？ 犬を連れた主婦を歩かせてみたところ、夜でもない限り、はっきりと見える。新聞の活字だって読めそうだ。真正面からくれば、まず間違いなく視界に入る。

飯田は次に、散乱した書類（飯田が上手く思い出せないためか、何故かその書類は財団の運営する心療内科の、彼のカルテだった）を何枚か集め、デスクの上に並べ直した。左端に皺が寄っているのは、椅子の上から倒れる時書類を握りしめたからだろう。となると、被害者は右利きだ。書類にサインする時、利き腕はペンを握っているが、反対の腕は書類を押さえるからだ。

犯行当時、引き戸は閉まっていただろうか？ 閉まっていたに違いない。現場に到着した時、引き戸の下部の金属部分に、弾痕が多

量にあったのを確認していたからだ。

一応と、飯田は立ち上がって、デスクの反対側に移動した。そこから床に這い蹲ってみる。死体付近の床よりも、弾痕が少ないのは明らかだ。

坂から派出所で座っている警官を射殺するには、当然銃口を少し、斜め下に傾けて発砲する必要がある。だが、引き戸の下部は金属製になっているので、銃弾が遮られてしまう。結果として、腹部から上の被弾となる。犯人も当然、それを意識して発砲しただろう。

だが、拳銃の腕があまり高くなく、なおかつ所持していたサブマシンガン、あるいはライフルの重量が軽ければ、命中率はかなり低いものとなる。ライフルなどは連射時の反動が半端ではないからだ。だから彼の背後に設置してあるロッカーの上部が、こうも凹んでいるのだろう。

飯田は白黒の交番の外に出た。『記憶の中』は何時もモノクロで、色がぼやけているのだ。彼は事件の再現を開始した。

交番には被害者が一人、デスクの上の書類を片付けている。引き戸は閉められており、犯行直前まで開けられなかった。そして、引き戸の金属部にも銃痕があるということは、犯人は引き戸を開ける直前に撃ち始めたのではなく、坂の上から、散歩でもしているかのような調子でのんびりと近づきながら発砲したのだ。

犯人は正面の坂を下りながらやってきた。早まる鼓動を抑え、興奮を隠しつつ。

一方被害者の方は書類に忙しく、気づけなかった。

犯人は、マガジンを叩きこむと、慎重に、最初は腫れものでも触るような手つきでそっと、引き金を引き絞った。だが、一旦発砲すると、もう止められない。引き金を引く指に籠る力は徐々に強くなっていき、犯人ももう興奮を抑えられなかった。思わず、走り出す。サイレンサーがついていたとはいえ、窓ガラスが割れる音と共に肩に走る痛み。それに驚いた被害者は、正面に向かってくる男が火器を持っていることに気づき、応援を要請しようと電話機に手を伸

ばした。

飯田はデスクの隅にある電話をじっと見つめる。宙で振り子のように揺れる受話器には血の指紋。ボタンにも、やはり血がついている。拳銃で応戦しようとは考えなかったのだろうか？飯田は現場の再現を続けた。

被害者が手を伸ばした先が黒電話であることに気付いた犯人は、自らの発砲を阻害する扉を開け放った。そして、デスク越しに再び銃弾を叩き込んだのだ。何十発も銃弾が命中する必要はない。たった一発でも、被害者の行動を阻止さえすればいいのだ。

目論見通り、被弾した彼は自身から見て左に、犯人から見て右に倒れた。犯人はマガジンをその場に投げ捨て、大腿でデスクを回り込む。そして、予備のマガジンをもう一つ銃身にセットした。そして、仰向けに倒れつつも拳銃を抜こうとする被害者を見下ろし、引き金を引いた。

これだけ近づき、目標が大きければ、どんなに命中率が悪かろうと、銃に欠点があろうと大したことではない。銃弾を浴びた被害者の身体は、周囲の弾丸のように床を跳ねまわった。マガジン一杯に撃ち尽くした時には、被害者は死亡していたのだ。それは虐殺に他ならない。

だが、犯人にとっては違った。犯人は床に落ちる、大量の空葉莢の奏でる金属的なメロディに陶然としていたのだ。あまりにも短い、一瞬だけ演奏されるその葬送行進曲に。初めて撃つサブマシンガン、あるいはライフルの反動に。

彼は自分の靴が、彼の血で汚れないように注意しながら、被害者の胸倉を掴むと、身体を起こさせた。今度はリボルバーを抜き放ち、彼の唾内に突っ込む。そして、撃鉄を起こし彼をハンドガンと壁でサンドイッチにすると、そのまま引き金を引いた。立ち込める硝煙と、その音の余韻を味わいつつ、名残惜しそうに彼は、死者の唾液で濡れた銃身をゆっくりと抜いて、被害者の制服でふき取り、その場を立ち去った。

やや間違いがあるかもしれないが、犯人の取った行動は、これ大体のところは合っているはずだ。飯田はこの力で多くの事件を解決してきたのだ。間違っているとは思えない。飯田の意識は現実世界へと浮上した。

飯田は大きく伸びをして、身体を捻った。骨が鳴る音がやたらに大きく響く。時計を見ると、既にシンデレラの帰宅時間をまわっていた。喫茶店にいたのが十一時頃だったので、ざっと一時間消費したことになる。飯田は息をゆっくりと吐きだすと、栗色の髪を掻き上げた。

『飯田。先程の弾丸の分析が終わったぞ。イングラムの可能性が高い。それから、警察の方もハンドガンの拳銃弾を発見した。木島警部補たちを射殺した拳銃から発射されたものとみて間違いないそうだ』

「ありがとうございます……イングラム、ですか」

イングラム。サブマシンガンの一種で、ピストルサイズでありながらフル・オートマティックで発砲できる代物だ。安価なため、よく映画の悪役が使用している。問題点は軽量すぎるため、反動が半端ではないと言うことだ。簡単に言うと、目標を定めて発砲するのが難しい。

入手経路も問題ですが、犯人は誰か、と言うのも問題ですねえ……。

飯田はウェイターに何か指示すると、ごくありふれた茶封筒を引き出しの中から取り出した。

1-8 判明!“迷”探偵飯田浩輔の履歴

飯田の書いた手紙は再びマスコミの注目を集めた。

『先日ありました黒川駅前交番における警察官殺人事件は、模倣犯による犯行である可能性が高いことが判明いたしました。よって、今回の事件は、警察官連続殺人鬼の犯行として捜査を行うことはせず、あくまで警察官殺人事件として捜査することとします』

飯田が取った行動は、もう一度犯人を怒らせることだった。飯田のことを無能と取るか、わざと怒らせていると取るかは犯人の自由だが、予告通り犯行を行った犯人ならば、何かしらの反論をよこすだろう。

そう言った彼の思惑を理解したのか、警察はその手紙についてコメントを求められても、無言を貫き通した。飯田にとってはそれが一番ありがたかった。

だが、マスコミの方は面白くないらしく、連日遺族の訴えや、飯田や探偵同盟に対する不信感、そして、本物ともわからぬ犯人からの手紙を次々と報道していった。飯田がもしもその報道をちらとでも目にしていれば、明らかにマスコミの方が間違っていると気付くものもあっただろうが、残念なことに飯田はそこまで暇ではなかった。

飯田はマスコミに追われる一方、探偵同盟からも頻繁に呼び出しを受けた。その時間は日本時間の午前三時頃が最も多かった。飯田は自分がいくら捜査中は寝ないとはいえ、ほとんど嫌がらせだろうと思った。

『バトラー、貴様、何を考えていた!』

『犠牲者をだすなど、貴様のおつむはそこまで足りないものだったのか?』

怒声と軽蔑の声も、飯田の耳には大して入らなかった。文字通り、耳栓をつけていたためである。飯田は呆れたようにスクリーンの墓

標を見渡すと、咳払いを一つして、反論を始めた。

「確かに、犠牲者を出したのは失敗でした。しかし、私が取ったのは最善に近い策であると私は考えています」

『何が最善だ！ 貴様がやったのは犯人を挑発させ、市民を危険にさらすことではないか。猿でもできるわ』

「その猿に事件解決を任せたのは、何処の無能です？」

『口を慎め！』

飯田は内心叫び出したくなる気持ちを抑えて、老人たちの愚痴に付き合った。

あんまり短気だと、脳の血管が切れますよ。そう言ってやろうとも思ったが、小火に爆弾を投げ込むようなものでやめた。

『バトラー。繰り返し返すようだが何故あんな策を取った。犠牲者が出る事は考えなかったのか？』

ナイトが重々しい声で発言した。先程まで小学校の教室のようにざわめいていた会議室が、水を打ったように静かになる。

「勿論、犠牲者が出るという最悪の可能性は考えていました。しかし私は、どんな対価を払おうとも、近年稀に見る凶悪犯罪者を逮捕しようと決意していました。迅速に事件を解決するためには、私はどんな手段でも取ります」

『法を犯すとしてもか』

「ええ」

『ではお前は、遺族の前でもそう言うことができるのか？』

「当然です。不謹慎かもしれませんが、警察の仕事は市民を守ることです。当然、自分を守る力が必要であることぐらい、わかっていたはずですよ。ですが――」

飯田はそこで、目を鋭く細めてスクリーンを見渡した。

「……私が犯人を焚きつけたことで、犠牲者が出たのは事実です。私は早急に、何としてでもこの事件の犯人を逮捕してみせます」

飯田はそう言うと、スクリーン群に背を向けた。もう誰も、彼を茶化したり、罵声を浴びせたりするような真似をしなかった。

ナイトはしばらく沈黙していたが、やがてぽつりと言った。

『早急に事件を解決するように』

「言われなくとも」

飯田はスクリーンに背を向けたまま答えた。ドアを後ろ手で閉め、部屋から退出した。いつもはする一礼を、今日は抜かしていた。

そんな中、警察に直接一通の手紙が届いた。手紙の差出人は警察官連続殺人鬼で、宛て名は飯田浩輔だった。

『負け犬の遠吠えを繰り返す飯田浩輔へ。君は私のことを何だと思っているのか。私と模倣犯の区別すらできないのか。君のおつむの足りなさにはつくづく頭が下がる。君が私を捕まえるなど、到底不可能だ。本当に君は探偵同盟に所属するだけの価値があるのかね？

まあいい。

私を模倣犯と勘違いしたのは、私がサブマシンガンを使用したからだろう。だが、考えてもみたまえ。私と自分を同一視する馬鹿共が、サブマシンガンを入手できると思うかね？ それに、私は他にも、私の犯行であると知らせるための証拠を残している。ここまで言われないと、推理ができないのかな？』

犯人は、やはりサブマシンガンを入手している。

先日殺害された警察官が、ライフルあるいはサブマシンガン等で殺害されたという情報はマスコミには流していない。よって、この書面を書いたのは本物の犯人だ。どうやら、向こうはご丁寧なそこまで教えてくれたらしい。傲慢で自己顕示欲の高い男ですね、と飯田は思った。

だが、もうこの手段で情報を得る事は望めないだろう。相手はどうやら、本気で飯田が無能だと考えているらしい。この手段を取り続けていれば、やがては向こうもこちらの真意を理解することだろう。飯田はそろそろ、別の捜査方法に移ることにした。

そこへ、一通のメールが飯田の元へ届いたことを、ウェイターが知らせた。

『飯田。貴方が以前お世話になった滝警部からメールが来たぞ。自

分の知り合いに、当時の木島警部補のことを良く知っている刑事がいるので、その人を紹介する、だそうだ』

「ほう。何処で会えるんです？」

飯田は低俗な雑誌を床に投げ捨てながら言った。そこには、

『判明！ “迷” 探偵飯田浩輔の履歴』

と書かれた、出鱈目な記事がだらだらと書かれていた。飯田はマッチでそれに火をつけると、そのままダストシュートに蹴り込んだ。火事になる危険性を、彼はまるで危惧していないらしい。

『勿論、警視庁だ』

飯田は一つため息をつく、部屋を抜け出した。研究員たちはまだ働いているのか、廊下は静かなものだった。いくらこの階がVIP専用の階だといっても、やや静かすぎた。

飯田は静かな場所とにぎやかな場所のどちらがいいかと聞かれれば、間違いなく静かな場所を好むが、その静けさは、今や飯田の精神をちくちくと刺す針のようだった。一步一步進む度に、足が鉛のように重くなっていくのを感じた。廊下の端が遠ざかっていく。こんな経験は久しぶりだった。

そう言えば、初めて留守番した時もこんな風に静かでしたっけ？ 飯田は自分の頭が勝手に昔のことを思い出すことを止めることができなかった。とうの昔に捨てた家族のこと、そして、昔巻き込まれ解決した事件のこと。

今でこそ事件こそが彼の活力剤となっているが、昔はそうではなかった。むしろ嫌いだった。

硝煙と汗とアンモニアの不快な臭い。催涙弾が発射され、視界は悪い。涙と鼻水がひっきりなしに出てくる。

誰かが喚く。くそつたれ。生存者はいるか、こっちにはいない、いや一人いる。子供だ。

響く二発の銃声。倒れる大人。SWATの隊員であろう大柄な白人が白目をむいて飯田の傍に倒れる。飯田は思わず後ずさった。

銃をくるくると回転させながら、誰かが呟く。

「美しいだろ？」

「美しいだろ？」

美しい？ 美しいとはなんだ？

「……美しくしてやる」

額に押しつけられる熱い銃口。飯田は目を瞑らず、逆光に照らされる男を見上げた……。

よろめくような足取りで、何とか廊下の端までやってきた彼は、壁に右手をついて呼吸を整えた。肺に新鮮な空気を送り込むと、足を引きずるようにして一歩踏み出した。途中で何度もこけそうになった。呼吸をするたびに肺が痛む。まるで、銃で肺を撃ち抜かれたかのような。飯田は壁に凭れかかると、ずるずるとその場に崩れ落ちた。

ピアノの静かな調べが、吹き抜けになっているロビーから流れてきた。飯田がはっとして、階下をそっと見下ろすと、プリンセスがロビーに置いてあるピアノを演奏していた。その演奏は、まるで飯田のためだけに行われているようだった。プリンセスがいつも以上に華奢に見えた。

その幻想的な姿に見とれていた飯田だが、やがて、その儚げな姿を壊すまいとできるだけ静かにロビーに下りて行った。足音を立てずに歩く飯田の足取りは、至って軽やかだった。先程とは違って、一歩一歩歩くのが辛くなかった。体重を感じさせない動きは、東洋の神秘的な舞のようだった。

プリンセスは目を瞑って、まるで自分の身体の一部のようにピアノを取り扱っていた。飯田が階段を下りてきても、全く気づいていないようだった。

飯田は彼女の演奏が終わるまで、じっとピアノの横に立ってプリンセスの演奏に聴き惚れていた。もう忌まわしい過去の記憶を思い出すこともなかった。

演奏が終わると、飯田は拍手しながらゆっくりと、彼女の元へと歩み寄った。プリンセスは何時ものような冷然とした様子ではなく、

顔を赤らめ、目を伏せていた。

「……聞いていたの？」

「ええ。素晴らしい演奏でした」

プリンセスがこうも恥ずかしがっているのは、彼女がピアノを弾いた理由が、人に聴かせるためのものではないからだ。だが、多少癖はあるものの、コンテストに出れば大賞を受賞できるに違いない。

「……人に聴かせられるほどではないけど」

「そんなことはないですよ」

飯田はありふれた言葉しか使わずに、淡々と告げた。そして、ちよつと警視庁まで行ってきますと言った。プリンセスに自分の部屋のカードキーを渡し、

「ウェイターに私の見ている映像を表示させますので、それをご覧ください。捜査資料は出し惜しみしませんので」

一礼して、ジャパンウォール財団の施設を後にした。

プリンセスには何故か、彼がスキップしているように見えた。

1-9 長さんのテーマを聴きながら

「木島警部補……か。いや、警視かな？ 凄い男だった……何て言うか、もう気迫がね……片端からやくざをふんじばって、刑務所へぶち込んじまうんだから……」

老齡の刑事は、熱い緑茶を啜り上げ、大きくため息をついた。向かいに座っている飯田は、かつて無いほどの真剣な表情で、刑事の指先を見つめていた。飯田の放つ風格は行進曲、『威風堂々』をそのまま体現していると言っても過言ではない。

警視庁から五分ほど歩くと喫茶店がある。一見ぱっとしない外装ではあるが、店内は天井や壁に塗装された白と、テーブルに使われている木材の茶色が見事なコントラストになっている。

また、照明は温かみのあるオレンジ色で、落ち着いた印象を与える。椅子に座れば、肩の力が抜け、眠くなってくるほどだ。飯田はあまりの居心地の良さに、何故か罪悪感を抱きながら、刑事の紡ぎ出す話を一身に聞いていた。

この野崎大郎巡査部長こそが、滝警部が紹介した木島警部補をよく知る人物だった。小柄な体型のため飯田が見下ろす形になるが、肩幅はがっしりとしていた。ラグビーなどのスポーツをしていたのだろう。髪は黒髪の混ざらない、見事な白髪だった。眉は太く、鼻の穴は大きく膨らんでいた。顔中に大小深浅様々な皺が刻まれていた。スーツは大して金のかからない安物だったが、この暑さの中間ちゃんとネクタイまで締めていた。

「とにかく、仕事一筋の人だったよ。他の刑事にも一目置かれる存在だった。命削って働いてる、って言えるのはあの人ぐらいかな？ やくざを心の底から嫌ってて、根絶やしにするために働いてるみたいだった。詳しく話したわけじゃあないんだけどねえ。やくざを捕まえるときのあの鬼気迫る表情、一度見たら忘れられないな。

暴力団関係者と飲んだりする刑事はいるけど、あの人は違う。と

にかく綺麗な人だったよ。でもちよつとやりすぎるところがあつて、やくざとの乱闘はしょっちゅうだったね」

そう言うのと、野崎は再び茶を啜った。ずずつ、という音が響く。話し方が上手い。相手が続きを聞きたくなるような合間に、お茶を啜っている。

「なるほど……暴力団ややくざを嫌っていた、ということですか」

「そうだね。嫌うっていう言葉じゃまだ生易しいかな？ 嫌悪と言うか憎悪と言うか、そんなところだね」

「……何がそこまで、彼を駆り立てたんでしょうね？」

「さあ……。でも、命知らず、とは職場で言われていたよ。危険な場所に身を置きたがっているようにも見えていたからね」

「木島警部補が亡くなる前後の状況について教えてくれませんか？」

野崎は嘯くように空を見上げた。彼が思い出す時に無意識の内に言う仕草なのだろう。

「確か……彼が無くなる数日前、東洋名水産という商社を摘発する予定だったんだ。その時、直接的な指揮を任されたのは木島警部補だった」

「東洋名水産？ どういった商社ですか？」

「ええつと……だね、確か東南アジアで養殖した魚を日本で売っている、とか聞いたね。だけど、暴力団事務所の隠れ蓑だったんだよ。彼らが銃器を密輸する、という情報が飛び込んできたから、大規模な摘発を行う予定だった」

「銃器……ですか」

「そう。主に中国製の物ばかりだったそうだけれど、重火器なんかはアメリカのマフィアからも買い取っていたそうだよ。それらを摘発しようとした矢先に警部補が殺害されてね……摘発が何日か遅れたんだ。そのせいか、大したものは発見できなかった」

野崎巡査部長の話し方は、悔しがっているわけでも無く、極めて淡々としたものの言い方だった。その境地まで達するに、長い年月を必要としたに違いない。

「……ご家族はいらしたんですか？」

「ああ。奥さんと息子さんの二人だね。息子さんは確か……十七歳ぐらいだったかな？ お通夜で会った時、奥さんの方はかなりやつれていてね。病弱な雰囲気だった。警部補の後を追うようにして亡くなったらしいんだ。息子さんの方は、一旦は警察官になったそうだけど、一年くらいで退職したそうだ。なんでも、鬱病にかかったそうだね」

「鬱病ですか……」

「ああ。かなりひどくて、業務にも支障が出るとかで」

野崎はまた、右手で陶器の側面を持ち、左手で底を支えながら、音を立ててお茶を飲み干した。

「息子さんの名前は？」

うーん、と唸り声を上げ、野崎は首を傾げていたが、思い出したように手を打った。

「確か……木島優司、とか言っていたなあ……」

「木島、優司ですか。わかりました。ありがとうございます」

飯田は丁寧な頭を下げ、野崎に別れの言葉を告げ、背を向けた。

そして、突如後ろによろけるようにして振り返り、額を叩くと野崎に向かいあった。

「すみません。もう一つ聞きたいことがあるんです。最近暴力団関係者が殺害された事件はありませんでしたか？」

「え？ 特に無かったと思うが……いや、そう言えば一つあったな……。五ヶ月ほど前、東洋名水産と縄張り争いしている、黒嶋組系暴力団の幹部が殺害されたんだった。まだ捜査中で犯人はわかっていない」

「なるほど。大変参考になりました。ありがとうございます」

飯田は自分が飲んだ分の料金を机に置くと、店を出て行った。彼はブルーバードに乗り込むと、早速ウェイターに指示した。

「黒嶋組の事務所に向かって下さい」

『正気か？ 黒嶋組に乗り込んで一体何をやらかす気だ？』

「ちょっといやもんつけるだけですよ」

飯田はさも面倒くさそうに言った。ウェイターも彼がしたいことの真意が理解できたのか、何も聞かなかった。

1-10 真剣で！

黒嶋組暴力団事務所、と言う事務所は現実には存在しない。正しくは、株式会社黒嶋組、となっており、土木業を引き受けている。エントランスは立派なもので、白色光のライトが昼間から煌々と煌めいていた。飯田は入り口に設置してある監視カメラに向かって、チャーチル首相のようなピースサインを送ってみたが、何の反応も返ってこなかった。警備員はサボタージュを実行中のようだ。

飯田は受付嬢に、警察の者だがお宅の警備システムについてお聞きしたいことがあるので、至急責任者を呼んでもらいたい、と言った。受付嬢は飯田が探偵同盟の探偵として顔を出していたにもかかわらず、澄まし顔で警察手帳を見せろと要求してきた。飯田は滝に用意してもらった警察手帳を提示した。階級は警部となっていた。

相手の対応は素早かった。受付にも設置してあった監視カメラで誰かが飯田の様子を窺っていたのだろう。すぐさま別室に通され、熱い緑茶が振舞われた。だが、飯田はそれに手をつけなかった。黄ばんだ茶葉が浮かんでいたためである。

飯田がソファに身を沈めた瞬間、タイミングを見計らったかのようにならぬ男が反対側の部屋のドアから入ってきた。

「私は立花久志と言います。この黒嶋組の警備責任者という立場にあります」

彼の口調は丁寧なものだったが、瞳の中には軽蔑と言う名の青い炎が燃えていた。舐められたものですね、と飯田は思ったが、愛想良く握手した。

「私の名前は浩輔。飯田浩輔です。階級は警部。ところで、お宅の警備システムについてですが、あまり万全とは言えませんか」

「ほう、どのような点ですか？」

「まず、死角が多い点ですね。それから、監視カメラが電池式ではない点です。変電設備をやられたら、ダウンしてしまうんじゃない

んですか？ それからあの機種は時代遅れで画質が悪いはずですよ。顔なんてモザイクが入った状態でしょう。もっと高性能のカメラを設置すべきです」

「なるほど。しかし、貴方のピースサインは判別できましたが？」

飯田は何も言わずにソファに座り直した。黒いソファはスプリングが壊れていて、身体が沈み込んでしまう。なるたけ背もたれの近くに尻を持ってくる必要があった。プレジデントズ・チェアとは大違いです、と飯田は呟いた。

立花はよく肥えた身体を震わせ、舌で唇を舐め回した。唾液に濡れた唇がてらてらと光る。

「それより、最近の警察はどうも御親切ですな。民間企業を一軒一軒訪れて警備の不備について指摘しているんですか？ さぞお忙しいことでしょう」

「……本題に入りましょう。私が聞きたいのは、東洋名水産についてです」

飯田は立花の皮肉を無視した。

「ほう。東洋名水産ですか？ 残念ながら、私どもは関知しておりませんな。何しろ、私どもとは社会に貢献する場所が違いますからな」

「まあ、そうですね。お宅は賭博、あちらは銃器ですからね」

飯田は目を光らせ、楽しそうに笑いながら言った。事実を突かれた立花は一瞬沈黙した。

「……どうも貴方は根本的な誤解をされていらっしゃるようだ。我々はいくまで社会に貢献するための民間企業であって……」

「茶番はさっさと終わりにしましょう。私が聞きたいのは、貴方のところの社員を殺害した犯人です」

立花の表情が一変した。先程まで浮かべていた軽蔑の笑みは消え去り、野獣のように獐猛に歯を剥き出し、陰惨な笑いを浮かべた。

「つまり、あんたは、その……我々の社員の仇討を行ってくれるということですか？」

「ええ。そうです。私が追っている事件の犯人も、貴方の社員を殺したと思われまますから」

立花は鼻をふんと鳴らして、黄ばんだ緑茶を喉に流し込んだ。唇の端から滴った雫をスーツの袖で拭う。

「それが狙いか」

「いけませんか。決して悪い話ではないと思いますがね。私は貴方の社員の仇を討つ。貴方は私に犯人の情報を提供する。ただそれだけの話、ですよ。それとも――」

飯田と立花は真っ向から睨みあった。飯田は上唇を舐め、十分に湿らせてから続けた。

「警察署の方で罵声を浴びせられながら言いたいというマゾっ気があるのなら言わなくても構いませんがね。一応こう見えても警察には顔が効くんです。貴方を拘束することぐらい十分もあれば十分ですよ」

「そんな人権侵害のような真似を一探偵がしてもいいのか？」

「国民や国民の権利を守るのは警察の義務であって、私の義務ではありません。私の義務は、迅速に事件を解決することだけです。そのためには何をしてでも犯人を挙げるつもりです」

飯田はばねのように身体を反らせながら立ち上がった。ソファが空気を吸い込み、その巨軀をさらに膨らませた。

「私は今、非常に危うい立場にいます。マスコミを使って犯人を挑発したところ、相手が逆上して警察官を一人殺害しましたからね。私と探偵同盟の信頼は失墜するばかりです。私が警察官を動員して、東洋名水産を潰せるだけの力を持っている間にお答えして頂きたいものです」

立花の返答は親指で人差し指を弾き、鳴らすことだった。がちやがちやと、玩具で武装した人相の悪いスーツの男達が入ってくる。数は三人。プリンスが息を呑んだのが、眼鏡越しに聞こえてきた。「悪くない話だが、あんたの話はいまいち引っ掛かる所がある。警察の記者会見に同席できたとはいえ、本当に、あんたに東洋名水産

を相手にするだけの實力があるのか？ それを確かめさせてもらいたい」

「……私も安く見られたものですね」

だるそうにため息を吐き出し、飯田は身構えた。両拳を軽く握り、腰を落とした独特の姿には隙が無い。

飯田と男達は暫く睨み合っていたが、先に仕掛けてきたのは男達だった。頭を突き出し、闘牛のように突っ込んできた彼の足元に滑り込み、足払いを掛ける。男はもんどりをうってテーブルに顔面をぶつけた。鼻の骨の折れる音がした。飯田の飲まなかった緑茶という名の熱湯を存分に味わった彼は、その状態で気絶した。

「さて、次はどなたです？」

飯田はスーツの埃を払いながら言った。応接室とは名ばかりで、埃と言う名の絨毯が敷かれている。あまり長居はしたくない部屋だった。

二人目の男が俊敏な動作で殴りかかる。体重の乗った重い拳を、飯田はサイドステップで軽くかわすと、男の、拳を固めた腕を右手で勢いよく引っ張った。バランスを崩しこちらに引き込まれる男の腹に膝蹴りを喰らわせる。手を払うと、男は横に回転しながら地に伏した。

三人目の男は怖気づいたのか、中々近寄ってこようとはしなかった。飯田は面倒くさそうに頭を搔くと、大腿で彼との間合いを一步詰めた。勢いにのまれた男が一步後退する。飯田は予備動作なしにいきなり回し蹴りを放った。男の左頬に革靴の踵が食い込む。血の混じった唾を吐きながら男は転倒した。

「……なるほど。大したもんだな」

立花は感心したように手を二度打った。そして、大きく伸びをしながらソファから立ち上がった。

「俺のところの部下を三人ともめすとはたいした腕だ」

「とりあえず、見舞金だけは置いておきましょう」

飯田は札束の厚みではち切れそうになっている封筒をテーブルに

置いた。五十万円ほどが入っていた。それをみて、立花の笑いがさらに広がる。

「あんたも中々面白い人だな。容赦なく叩きのめした相手に見舞金か。ますます気に入ったよ。じゃあ、いくつか情報を教えてやる」

そう言って、立花はまだ熱い茶を一気飲みした。舌打ちしながらまずい、と呟くと、彼は事務所側のドアを開け、珈琲を持ってこいと怒鳴った。

「まず、東洋名水産の事だが、あんたも知っているだろうが、十年近く前に大規模な摘発が行われるところだった。ところが、指揮を執る刑事が殺されたものだから、捜査は遅れ、大したもののは発見でなかった。結局摘発されるはずだった銃器は全く見つからなかったのさ」

「なるほど。で？ 貴方の社員を殺したのは？」

立花は飯田の台詞を無視して話を続けた。

「それで、だ。噂によると、警察官連続殺人鬼はサブマシンガンで警察官をハチの巣にしたというじゃないか。俺はピンときたさ。東洋名水産がバックについて、連続殺人鬼を支援しているってことを多分、東洋名水産は指揮を執る予定だった刑事を殺害した犯人のことも知っていたはずだ」

「私でも思いつきましたよ。そんなこと」

飯田はやや投げやりに答えながら、先程の受付嬢が運んできた珈琲を啜った。これもまた不味い。泥水を啜っているようだ。インスタントコーヒーに何を混ぜればこの味を再現できるのだろうか。飯田は顔を顰めて、その泥水をテーブルの上に置いた。立花はそんな飯田の顔を一瞥し、舌で唇を舐め回した。

「俺達のとこの社員を殺したのは、実際俺達も把握していない。だが、東洋名水産が殺したのは間違いない。なんてったって、あいつら以外俺達にいちやもんをつけてくる奴はいないからな」

「ですが、犯人が確実には分かっていない今、報復攻撃に出れば、逆に貴方方が手酷い目に合う。そういうことですか？」

「ああ」

飯田は、この人は何も知らないんですかね、と嘆息を漏らした。何も知らない相手を問い詰めても何も出てくるわけがない。もったいぶった割に、何も知らないとは馬鹿だろうか？

「だが……犯人が東洋名水産なのは確かだ。間違いない」

「と言われましても、証拠がねえ……精々、サブマシンガンくらいでしょう？ 銃器不法所持がいいところで、犯人と結び付けるのは難しいですよ」

「まあ待て、いいものをやるから」

立花はそういうと、もう一度ドアを開け、名簿を持ってこいと怒鳴った。名簿という単語に飯田が左眉を跳ね上げる。その反応を楽しそうに見つめていた立花がゆっくりと口を開く。

「東洋名水産は退職警官や現職警察官を買収して情報を得ている。今から俺が持つてこさせるのは、その警察官たちのリストだ。東洋名水産に再就職した、な。」

確か、警察官連続殺人鬼は射撃が上手いようで下手なんだろう？

銃に慣れていると言えば、やはり警官だろうからな。……最も、海外に行きや誰だって拳銃を撃てるがな」

受付嬢がしかめ面で分厚い書類を持ってきた。飯田はそれを受け取ると、パラパラとめくってみた。名前、年齢、血液型、住所、身体的特徴、癖、かつての階級と言ったものが事細かに書き込まれていた。

「貴重な情報をどうもありがとうございます。私はこれで……」

飯田は一礼し、木製のドアから出て行こうとした。

「ああ。ちょっと待て。俺の名刺を渡しとく。困ったことがあったら、何時でも連絡して来い。再就職先ぐらいなら紹介してやる」

「……それはどうも、御丁寧に」

飯田は葉書大の名刺を受け取った。名刺には、

『立花久志 株式会社黒嶋組代表取締役』

とでかでかと書かれており、住所と電話番号、メールアドレスが

細かい字で刻まれていた。飯田はまじまじとそれを見つめると、立
花の顔を見つめ、一度ため息をついた。そして、だらりと両手をス
ラックスの横に垂らしながら、部屋を出て行った。

1-11 優しさの消えた街

飯田はブルーバードに戻ると、立花から渡された名簿をチェックし始めた。眼鏡の蔓に仕込まれているボールペンで気になる人物の名前をマークしながら五十枚以上はある紙をチェックする。全ての人物のチェックを終えると、飯田は彼らの名前を声に出して読み始めた。

「在原健二、上村築地、沢野慶介、相沢大輝、前田優司、焼山全造……以上ですね。私が怪しいと思うのは」

ウェイターは何故今言った人物が怪しいのかは聞かなかった。彼はただ仕事をこなすだけだ。世界最凶のクラッキング・コンピューターが作動した。次々と個人情報をつき出していく。

『前田優司は木島優司と同一人物だ。木島警部補が死んだあと、母親の姓である前田を名乗っているみたいだぞ』

ウェイターが補足説明を行った。

「かつてやくざを憎んでいた警察官の息子が今ややくざの一員ですか……」

飯田が特に重視したのが、銃である。先ほど挙げられたのはいわゆるガンマニアや銃に愛着を示していた人物ばかりだ。ウェイターがものの数分で探し出した資料の中には警察学校の射撃訓練の成績まであった。それによると、皆ガンは好きだがあまり得意ではないと言った人物ばかりが浮かび上がってきた。

『プリンセス。どうです？ 誰か気になる人物はいますか？』

『そうね……相沢大輝は警視庁の捜査二課の人間だったのよね？ 捜査二課と言えば出世コースだから、銃がノンキャリアの警官より上手いとは思えないわ。ステレオタイプな判断だと言われてしまえばそこまでだけど。』

それから、在原健二と上村築地、沢野慶介は犯人のリストから外してもいいと思うわ』

「何故です？」

『木島警部補が殺害されたのは十五年前よね？　この三人は十五年前も警察官だったのよ。警察官が殺人事件を起こすとしたら普通、捜査方法などを熟知しているはずだから、証拠隠滅とかは得意なはずよ。それなのに、生活反応のある傷を作って、なおかつ遺書を持たせるだけで自殺に見せかけようとするなんて、いくらなんでもお粗末すぎないかしら？』

「なるほど。つまるところ、十五年前には警察官になっていなかったあとの二人が怪しい、ということですか」

『そう言うことになるわね』

「お見事です。プリンセス」

『別に。こんな問題、できて当然でしょう？』

思い出したように飯田は時計を見た。時間を確認するわけではなく、習慣のようなものだった。昔から話のタネに困ると、飯田は自分の長針と短針、そして秒針しかないシンプルな時計を覗き込んだものだ。

飯田はモールス信号を打つように、指先で額をほとんど叩いて見せた。

「行くべきか行かざるべきか……それが問題ですかね」

『どこへだ？』

「決まっているじゃないですか」

飯田は思い切りアクセルを踏み込んだ。エンジンが唸り、タイヤが激しいスキール音を上げる。ブルーバードは全身を震わせ、走り出した。

「東洋名水産ですよ」

結局彼は、一度ウォール財団に戻ることにした。

だが飯田は、ウォール財団に入ることはできなかった。門の周りに、マスコミが屯していた。どこからか飯田の居場所を聞きつけた彼らは、飯田のブルーバードを見つけ、走り寄って来た。飯田は一瞬、彼らを轢き殺したいという衝動に駆られたが、何とかそれを吞

み込んだ。飯田はブルーバードのスピードをそろそろと緩めた。

「飯田さん、降りてきて下さい！」

「飯田、降りてこい！」

「この人殺し！」

マスコミだけでなく野次馬も混ざっているらしい。飯田はブルーバードを傷つけられる前に、さっさと車から飛び降りた。膝をばねにして着地すると、背広の裾が風にたなびいた。流石のマスコミも野次馬も啞然として彼の一举手一動に注目する。飯田は手を叩きながら言った。

「で？ 私に聞きたいことは何です？」

野次馬達は我に返り、再び罵声を浴びせ始めた。立場上弱い人間をいたぶるのが趣味らしい。悪趣味ですね、と飯田は呟かずにはいられなかった。

「土下座して遺族に、謝れっ！」

そう叫んだのは中年の頭が禿げたサラリーマン。

それで私が土下座したところをお茶の間に放映して、遺族に見せるんですか？ なんなら直接遺族を連れてきたらどうです？ 飯田は憐みを含んだ目で彼を見つめた。

居心地が悪くなったのか、彼は目を左右に動かし、太った身体を、フラフラでもするかのように器用に揺らしながら人混みの中に消えた。

結局のところ彼は、遺族に謝れといいながらここで飯田が土下座する瞬間を目に納め、彼を見下すことで歪んだ自尊心を満足させただけなのだ。この暑い中ご苦労様です、と飯田はこっさりばやいた。

「土下座しろ、飯田！」

シュプレヒコールは瞬く間に人々の間に広がっていった。マスコミは飯田が土下座し、カメラ越しに遺族に謝る瞬間を今か今かと待ち構えていた。

だが、飯田は土下座しなかった。それどころか、謝罪文句の一つ

も言わなかった。こいつには血も涙もないのか？ 人をみすみす死なせておいて？ マスコミは半ば呆れ果てて飯田の身勝手さを報道した。

飯田がどうしても土下座できない理由はあった。それは、飯田が謝罪した瞬間に、犯人は自分の勝利を確信してしまうのだ。それだけは絶対に避けなければならなかった。だから、飯田はテレビの前で謝罪するわけにはいかなかった。

「飯田さん、早く遺族の方に土下座して下さい」

マスコミが焦れたように言う。飯田は背をどつかれた。振り返ると、カメラマンがこちらに向かってカメラを向けていた。どうやら、いいショットを取るために、わざと彼にぶつかり、注意を惹いたらしい。

つくづく、イラつく人たちですね。

飯田は威嚇射撃をして、さっさとウォール財団に入ろうと思った。そこから先は、いくらマスコミと言えども入ることはできないからだ。大使館、などと揶揄されるのもよくわかる。

腋に吊るしたホルスターに手を伸ばす。銃把の冷たい感触が心地よい。

飯田はふと振り返った。誰かの視線を感じた。

野次馬達の間から、黒のベンツが見え隠れしている。そのベンツは三十メートルくらい先に停まっていたが、なんだか怪しい挙動だった。こちらの様子を双眼鏡で観察している。飯田は第六感とでも言うべき何かが自分に警告するのを感じた。深く呼吸し、腰を落とす。嫌な予感が拭えない。

双眼鏡が窓に引っ込む。そして、次に出てきたのは、L字型の金属の塊だった。Lの線と線とが直角に交わった部分を、誰かが握りしめている。

飯田は、凍りついた。

金属の塊は、イングラムだった。

1-12 追跡

ベントがスキール音を上げて、エンジンを吹かし始めた。まずい。飯田は人混みを掻きわけ、ブルーバードの元へ辿りつこうとした。人混みの中から逃げだそうとした。

だが、人間で幾重にも造られた壁を乗り越えるのは、容易ではなかった。飯田は突き飛ばされ、よろめいた。咄嗟に彼は、地面に身を投げ出した。マスコミ達はベントに気づかなかった。地に這いつくばった飯田の無様な姿を人々は嘲笑し、足蹴にしようと足を振り上げた。

野次馬の何名かが宙に舞った。ベントに轢かれたのだ。

銃弾がそこら一帯にぶちまけられ、マスコミ達は何が起こったかもわからぬまま次々と凶弾に倒れていった。飯田は人々の中心にいて、尚且つ屈んでいたため、被弾しなかった。飯田はぱっと立ちあがると、街路樹の陰に屈みこみ、隠れた。気休め程度の障壁だが、ないよりましだ。

葉莢の排出される音だけがやけに大きく響いた。飯田は左腋のホルスターに手をつ突っ込むと、コルト・ディテクティブ・スペシャルを抜き放った。ベントが立ち去るのを今か今かとそっと顔を出す。

ベントはバックし、倒れている者を踏みつけながら車道へと戻った。道路にはイングラムが撒き散らした空の葉莢が大量に転がっている。サスペンションが駄目になるような走り方をして、ベントは逃げ出した。

「ウェイター！ あのベントを追跡して下さい！」

飯田は大声で叫ぶと共に走り始めた。ベントとは対向車線上に停まっていた赤の二ドアハードトップのブルーバードがタイヤから白煙を上げバックを開始し、その場で百八十度回転する。

こちらにブルーバードが突進してきた。ウェイターが開けたドアに、飯田は飛び移った。飯田が完全に跳び移る暇もなく、ブルーバード

は速度を上げ始めた。飯田は路面で少し足を引きずったものの、大した怪我はなかった。ハンドルにしがみつき、何とか車に乗り込んだ。広い運転席で身を落ち着かせると、飯田は携帯電話を取りだした。

「もしもし……警察ですか？ ジャパンウォール財団研究所前で銃撃事件が発生しました。死傷者はかなりの数に上ります。現在犯人の乗ったベンツを追跡しています。ナンバーは……」

飯田はそれを伝え終わると、次に消防に連絡し、同様の内容を報告した。電話を切ると、飯田は追跡に専念することにした。

「スーパードラッグモードがあればよかったんですがねえ……」

『あるわけないだろうが』

ウェイターが呆れ声で呟いた。

前を走るベンツは法定速度を遥かに超えた、百キロで走行中だ。

前を走る車を次々と追い抜き、割り込み、無謀な運転を繰り返している。前に割り込まれたトラックは急ブレーキをかけ、ベンツにクラクションを浴びせた。たちまち、あちらこちらで渋滞が起こる。

ブレーキを踏み損なった一台の車が、トラックの荷台に体当たりした。キャンピングカー仕様になっていたトラックの住居の壁が吹き飛び、中でお茶を啜っていた老婦人が悲鳴を上げた。

ウェイターの操縦するブルーバードも似たようなもので、いくら空いているとはいえ、オレンジの線で区切られた道路のちょうど真ん中を走行している。対向車線戸の狭間で、危険極まりない追跡だった。対向車とすれ違うたび、相手の車のサイドミラーを叩き折った。

「さて……捕まえたら事件解決が一気に近づきますね」

『一般市民をカーチェイスに巻き込むわけにはいかんぞ、飯田』

「わかってます」

飯田は運転席の窓を開け、身を乗り出した。自動操縦に設定したブルーバードが対向車を避けようと巨体を左右に揺らす、飯田は完璧にバランスを取っていた。拳銃を両手でゆっくりと構える。そ

の姿は堂に入っていて、見る者を惚れ惚れとさせる姿だ。

前方を走るベントが赤信号で交差点に突っ込み、急カーブして脇道に入った。ブルーバードも対向車と接触寸前で右折し、その後を追う。車一台が何とか通れるほどの狭い脇道だ。表通りから締め出されるかのように、住宅やマンションが立ち並んでいる。ここなら対向車も歩行者もない。飯田は一発、発砲した。

弾は左のテールランプに直撃した。テールランプが粉々に砕ける。ベントは何事も無かったかのように走り続けた。

『ヘタクソ！』

ウェイターが大声で罵った。

「仕方がないじゃないですか、こうも揺れてるんだから……」

飯田は言い訳をしながら、もう一度発砲しようとよく狙いをつけた。銃の撃鉄を起こす。

後部座席から男が一人手を出した。その手にはイングラムが握られていた。ウェイターがくそつたれ、と悪態をつく。飯田は急いで身体を引っ込めた。

イングラムが火を噴いた。

男の盲射は大した脅威ではなかった。フロントガラス一面に弾丸がぶちまけられ、弾が防弾ガラスにめり込む。弾がバンパーに直撃し、乾いた音を立てて跳ね返った。

『後でちゃんと修理して下さいね、この車』

自分の第二の身体のように思っているウェイターは、ぼそりと呟いた。飯田は面倒くさそうに頷いた。どうせ、ライラックに言えば無料で修理してくれるのだ。どのくらい被害が出ようと、関係の無いことだった。

マガジンが切れた向こうは、一度イングラムを引っ込めた。チャンスとばかりに飯田が身を乗り出し、再び発砲する。今度はトランクの鍵穴に直撃した。鍵が壊れて開いたトランクが、風圧でパカパカと開きながらベントは走り続ける。

『このヘタクソ！ とんま！』

「うるさいですね。だったら撃ちやすいような運転をして下さい」
交代するように後部座席からイングラムが突き出される。飯田は
急いで首をひっこめた。十発近い弾が直撃し、サイドミラーが砕け
散る。

ベントとブルーバードは、大通りに飛び出した。突如現れた二台
に激突しかけたトレーラーが思い切りブレーキを踏み、ハンドルを
切る。轟音を立てながらトレーラーは車体を浮かせた。そのまま、
道を塞ぐようにして荷台が横転する。後続の車が急ブレーキをかけ、
後ろから追突される。クラクションの大合唱が響く。

そんな混乱をよそに、二台は反対車線に飛び込み、走り続けた。
目前に行く邪魔な車を、ベントの助手席に座っている者が銃を撃ち
込み、排除する。ブルーのセドリックがフロントガラスを撃ち抜か
れた。仰天した運転手がハンドルを切り、歩道に突っ込む。幸い歩
道にはガードレールが設置してあったので、歩行者を轢き殺すこと
はなかった。

飯田はできるだけ窓から身を乗り出し、もう一度発砲した。車に
当たるところか、弾はアスファルトを抉っただけだった。飯田は弾
倉から空の薬莢を取り出すと、急いで弾を装填した。

ベントはさらにスピードを上げ、交差点に突っ込んでいった。信
号は黄色になりかけていたが、ベントは無事交差点を横切った。ブ
ルーバードも後を追おうとスピードを上げた。

タイミングを見計らったかのように大型トラックが交差点に進入
した。ブルーバードは激突する寸前にハンドルを切り、急停車した。
クラクションを鳴らしたが、トラックは一向に動く気配を見せない。
運転手はさまを見ろ、とバックミラーに映るブルーバードを嘲っ
ていた。

飯田はぎりぎりと歯ぎしりをした。ベントを逃がすわけにはいか
ない。重要な手掛かりを失ってしまう。飯田は左右を見渡した。

右前方に工事現場があった。何の工事かはわからないが、土砂を
堆積させた小さなジャンプ台のようなものができている。飯田は一

一旦ブルーバードをバックさせると、ギアの横についている『加速』と書かれた赤いボタンを強く押しこんだ。

エンジンの回転数がいきなりレッドゾーンに突入し、飯田は強烈なGを体感した。ブルーバードは百キロを超えるスピードで土砂に乗り上げた。

車体がバラバラになるかと思うほどの衝撃が走り、飯田は尻を突き上げられるような感覚を覚えた。続いて、ぐっと前に引っ張られるような、強い力が働く。ブルーバードはトラックの数センチ真上を飛び越した。トラックの運転手が呆然としてその大ジャンプを見上げた。

トラックの援護もあつてすっかり安心しきっていたベントは、トラックの荷台を飛び越すスポーツカーという、滅多に見られないカースタントに仰天し、再びエンジンをスタートさせた。

だが、レッドゾーンに入ったブルーバードが追いつけない相手などいない。ブルーバードはやすやすとベントに追いつくと、スピードを合わせ並走した。男たちが啞然とした顔で飯田を見つめる。

慌てた男の一人がイングラムをブルーバードに向かってばらまいたが、全て防弾ガラスに遮られた。飯田は運転席の窓をパワーウィンドウで開くと、男たちに向かって手を振った。見事な早撃ちで、ベントの前輪と後輪二つを撃ち抜いた。タイヤがズタズタに裂け、スピードが落ちる。ベントはよろめくようにブルーバードに接触した。小さな火花が散った。

ブルーバードは一旦ベントを追い越すと、見事なドリフトを披露しながら停車した。進路をふさがれ、操縦が困難になったベントに勝ち目はなく、ベントは大人しく停車した。

だが、中に乗っている者は車ほど潔い人間ではなかった。ベントから降りると、ブルーバードに向かって一斉射撃を開始する。だが、防弾ガラスに阻まれ、大した効果を上げる事はできなかった。

男達は車を盾にして銃撃を行っていた。いい加減銃弾を浴びるのが嫌になってきたウェイターは、ターンすると猛然とベントに突っ

込んでいった。飯田が運転席から顔を出し、慎重に引き金を引く。車の走行する方向と射線軸が完全に一致していたのが幸いし、今度は外すことはなかった。

一発の銃弾はベントのガソリンタンクを撃ち抜いた。

給油口から火がちらりと見えたとさえ思えば、火は一瞬で車体に移った。ガソリンが大して入っていなかったためか、車は爆発こそしなかったが、勢いよく燃え始めた。

男達はみっともなくベントに背を向けに出した。ブルーバードは急速にスピードを落とすと、飯田を車から放り出した。飯田は華麗に着地すると、逃げる男達の足を狙って銃を発砲した。男達がバタバタと倒れて行く。走行中の車からでなければ、百発百中の腕を持つ飯田だった。

1-13 拷問

十分後には警察が到着した。飯田は警察に同行し、取り調べにも立ち会わせてもらった。

四人の犯人は皆男で、身元から東洋名水産へ繋がる証拠は皆無だった。飯田はマジックミラー越しに彼らの取り調べの様子を眺めていたが、やがて傍にいた刑事に尋ねた。

「おとすにはどれくらいかかると思います？」

「そうだな……いや、そう簡単にはおちないだろう。最低でも十日はかかるだろうよ」

「それでは遅すぎます」

どいて下さい、と飯田は刑事を押し退けると、堂々と取り調べ室に侵入した。

「初めまして。私は飯田浩輔です」

飯田は右手を差し出すと、呑気に犯人と握手した。先程まで取り調べを行っていた警官が呆氣にとられる。こいつは一体、何をする気だ。

握手する際、不必要なほど力を込め、犯人の一人は薄く笑った。俺は誰が何をしようと絶対に吐かない、そう物語っている顔だった。飯田はにやりと笑い、こう言った。

「今から貴方を尋問します。いや、拷問と言った方が響きがいいので、拷問と呼びましょう。今の内に言うのも、言わないのも貴方次第です。さて、どうします？」

男は不敵に笑うと、飯田の顔めがけて唾を吐きかけた。飯田は首を横に振り、その攻撃を避けた。それを宣戦布告と見なした飯田は容赦が無かった。

目にも止まらぬ速さで彼は拳銃を抜くと、男の両肩に銃弾を撃ち込んだ。男が仰け反り返って椅子から転げ落ちる。飯田は今座ったばかりの椅子を蹴倒しながら立ち上がり、さらに銃弾の雨を男の身

体に降らせた。

両足、両腕、太股を撃たれた男は悲鳴を上げて床を転がりまわる。全て急所は外してあった。飯田はリボルバー拳銃をくるくると回しながら残酷に微笑んだ。

「まだまだ、終わりませんよ。貴方に恨みがあるわけではないですが、何しろ捜査が行き詰っているものでね。しかたなく、こうして貴方を拷問しているんです。拷問。いや、いい響きですね」

狭い取調室に、さらに銃声が響く。今度はわざと外した。だが、顔から十センチも離れていない床に銃弾をぶち込まれ、男は顔を蒼然とする。流石にまずいと最初から部屋にいた刑事が止めに入った。

「やめろ、飯田。そのへんにして……」

「うるさいですね、黙っててください」

刑事はなおも止めようとしたが、飯田が銃口を向けたので、慌てて跳びすさった。

「まだ言いませんか？ 強情ですねえ……次はどーこを撃とうかなっ……」

歌うように飯田は呟きながら、弾倉の中の空薬莢を床に撒き散らした。カラカラ、と乾いた音を立てる薬莢が男の耳を鋭く刺激する。耐えられずに、男は大声で喚いた。

「喋る！ なんでもしゃべる！ 頼むから、もう撃たないでくれ！」

「おや？ 何言ってるんですか？ もう喋るんですか？ もっと粘りましょうよ」

「やめてくれ、やめてくれ！」

「じゃ、この辺にしときましようか……」

そう言いつつも、飯田は拳銃を仕舞おうとはせず、銃口を男に向けたままだった。

「では一つ目。貴方は何処にお勤めですか？」

「ど、どういう意味だ」

飯田はこれだから下等動物は困るんですよ、と言いたげな目で彼を見た。

「つまりですね、貴方が所属している組織を教えてください、と言ってるんです」

「と、東洋名水産。東洋名水産だ」

「はいはい、二度も繰り返さなくたってわかります。では次。今読みあげる名前の人物は何処にいますか？ いや、どこに所属しているんですか？」

飯田はゆっくりと、六人の人物の名を挙げた。男は観念したらしく、壊れたファックスのようにべらべらと情報を吐き出していく。
「在原、上村、沢野は退職した。相沢はデスクワークばかりして。警視庁の捜査二課にいたとかで、重宝されてる。前田と焼山は汚れ仕事を引き受けてる。東洋名水産の邪魔になる人間を消す仕事だ」

「なるほど。その中でイングラムを持ち逃げしたのは？」

「前田だ。最初は東洋名水産にいた。だが、そのあとはいなくなつた。いつか絶対、見つけ出して罫り殺してやるとボスは言ってた」
「マック？」

刑事が自分の疑問を思わず口に出す。飯田は呆れたように刑事を見つめるとイングラムの別名です、と懇切丁寧に教えてやった。

「まあ確かに、やくざが警察官と争おうとするなど、ほとんど考えられませんからね……警察官をマックで射殺する事件を引き起こしたのは前田優司が勝手にやったことですか？」

「そ、そうだ。俺達は何もしていない」

「では何故、私をウォール財団前で襲おうとしたんですかね？ ちよつとばかり矛盾してませんか？」

飯田は返答によつては今すぐ射殺してあげましょう、とでも言いたげに、リボルバーをくるくると回転させた。男は肩をびくりと震わせ、慌てた声で弁明した。

「いや、あの、それは……」

「それは、なんなんですか？ なんなら、当ててみましょうか」

飯田は拳銃を持った手で自分の肩をぽんぽんと二度叩くと、獣を

思わせる笑みを浮かべていった。

「貴方方は前田優司と同じく、東洋名水産に所属していた。ですが、前田優司は暴走し、勝手に組のサブマシンガンを使って警察官を射殺した。そのため、前田優司は組を追われることになった。その際、前田優司と行動を共にし、組から逃げ出した人物……それが貴方方です。前田優司に何と言われて脱退したかは知りませんが、何にせよ、私や警察に捕まらなかったら、貴方方は今頃野垂れ死んでいたところでしょうよ」

男はがっくりと膝をつき、大声で喚いた。

「あいつが悪いんだ！ け、警察にコネがあるとか言って、ボスを警察に引き渡せば俺達は恩赦される上、東洋名水産の幹部になれるとか騙しやがって！」

「そんな馬鹿げた話に乗るからバカなんですよ。わかりますかバカ？ 聞いてますかバカ？ ……ところで、前田優司の居場所は？」

「し、知らない」

「やれやれ、ここまで来て情報の出し惜しみですかね？」

飯田は拳銃をちらつかせながら言った。それだけで、男は大きな体を震わせ、必死で飯田から距離を取ろうとする。

「ほ、本当に知らないんだ！ 頼む、助けてくれ！」

「……仕方ないですね」

飯田はそう言い捨てると、上着のポケットをごそごと探り、テープレコーダーを取り出した。その録音スイッチを切ると、再生させてみる。飯田と男のやり取りはしっかりと記録されていた。男の顔色が変わる。

別に眼鏡でも録音できるのだが、飯田は男を脅迫するためにあえて録音機を使用した。

「もう証言をころころ変えないで下さいね」

「そ、そんなのが証拠になるもんか！ 俺は脅されたから答えただけだ！ お、俺の言葉が真実だという証拠はどこにもないぞ！」

「その時は貴方を殺すだけですよ」

言い捨てて部屋を出た飯田は、他の刑事に捕まった。

「おいあんた、いくら何でもやり過ぎだ」

「別にいいじゃないですか。重要な証言をしてくれたことだし」

「あんなやり方で聞き出したのにか？ あんなの、証拠にも何にもならん。逆に裁判でこちらが不利になるんだぞ！」

「何か勘違いしていませんか？」

飯田は冷たい声で刑事に告げた。

「私は別に貴方方の都合なんて考えていません。私の仕事は犯人を挙げることであって、裁判で勝つことじゃないんです。裁判なんて、検事と勝手にやって下さい」

「だがしかし、被疑者と言えどもあんなことをしたと言われたら……」

「私が全部やったと言えればいいでしょう。制止しようとしたが、拳銃で威嚇射撃されたため、止める事が出来なかったと。そう報告書に書いてもらって構いませんよ」

話は済んだとばかりに、飯田はさっさと立ち去った。右手で握っている拳銃が蛍光灯の光を反射し、凶暴な輝きを見せる。それを目にした警官たちが慌てて道をあけた。

警察署をバックに、一台のブルーバードが真紅の風となって走り抜ける。無論、飯田の乗っているブルーバードだった。

「さて、ウェイター。貴方なら、前田優司は何処にいますか？」

『人間のことを私に聞いてどうするんだ？ 人間のことを考えるのはお前の仕事だろ』

「人間の私が思いつかないから機械の貴方に聞いているんですがね」

『……二人とも、私がいることを忘れていないかしら？』

プリンススの冷たい声が耳元に響いた。この通信はウェイターを介して行っているの、当然ウェイターも聞いている。

「まさか。忘れてたわけじゃないじゃないですか」

『そうは思えないけど……まあいいわ。で、犯人は前田優司で間違

いないのね?』

「ええ。十中八九、彼で間違いないでしょう」

『わかったわ。じゃあ私は前田優司の足取りを追ってみるから』

突然車内に厳かな合唱が響いた。飯田の元に、一通の電話が入ったのである。飯田の社内電話の着信音は『オラトリオ メサイア ハレルヤ・コーラス』だった。

『はいもしもし、飯田浩輔ですが?』

電話に出るのはウェイターの仕事だ。このAIは飯田のメッセージを代弁することも多い。飯田は一体誰からだろうと想像しながら、ジャパンウォール財団の研究所まで車を飛ばしていた。

『もしもし、こちら野崎だが』

「野崎さん? 久しぶりですね」

『実は今、一つの情報が入った。東洋名水産が何者かに襲われたそうだ。飯田君も知っておいた方がいいんじゃないかと思ってね』

「どうも。情報ありがとうございます」

飯田は感謝の台詞もおさなりに、電話を切った。

ウォール財団に戻ると、彼は自分の部屋のベッドにスーツのままで身体を投げ出した。だが、寝る事はなかった。

数分後身体をむくりと起こすと、彼はパソコンのスイッチを入れ、テレビのニュースを観賞することにした。早速速報で東洋名水産の正面玄関が映し出されていた。

正面玄関である自動ドアは内側に押し潰されるように変形しており、硝子は粉々になって床一面に散らばっている。恐らく、車が突っ込んできたのだろう。よくまあやくざ相手にそんな真似ができませんね、と飯田は半ば呆れた。もしこれを前田優司がやったのなら、前田優司は頭のねじが二、三本吹っ飛んだ阿呆としか思えない。

「……やれやれ」

飯田はネクタイを締めながらため息をついた。前田優司は、何様のつもりなのだろうか。既に刑事を推定で六人殺し、罪もない報道陣を殺害するように指示して。

「……ところで、プリンセスはどうやって前田の住所を捜査するつもりですかね？」

『さあ？ 知り合いの刑事などを使って捜査するんじゃないか？』

「……それじゃひきこもりじゃないですか……。どこがアームチュア・ディテクティブですかねえ」

飯田は欠伸を漏らしながら言った。ウェイターはさっさと事件を解決して寝ればいいのに、と彼を見ながら思っていた。

1-14 クラウン

飯田は一晩置くと、今度は東洋名水産に出かけることにした。普段ならば相手の事情など考えずに出かけるのが飯田なのだが、今は警察と鉢合わせするのは躊躇われた。

出かける前に飯田はプリンセスに一言言っておこうと彼女の部屋をノックしたが、応答はなかった。どうやら、一人で捜査を開始しているらしい。

どう捜査しているかは知りませんが、誘拐されないようにしていただきたいものです。飯田は心の底からそう願った。

東洋名水産の入口は昨日のテレビのままになっていた。例の黄色いテープが入口に何重にも張られ、まさに事件現場であると物語っている。飯田は軽々と黄色いテープを飛び越すと、入口に侵入した。なんだか、テレビゲームをやっている気分ですね、と呟き苦笑する。完全にFPSの世界だ。廃ビルにマフィア。設定は完璧だ。

「待て！ テメエは何者だ」

振り返るとそこには、ゾンビではなく安っぽいスーツを着た男が立っていた。黒いスーツにサングラスをかけ、いかにも、やくざですと服装からして名乗っている。

「私は飯田浩輔です。申し訳ありませんが、上司の方に引き継いでいただけませんか？ 貴方と話していると忍耐ばかり消費しそうなので……」

「何だとテメエ！ こっちに来い！」

男は床に落ちているコンクリート片を大股で跨ぐと、飯田の肩を乱暴に掴んだ。飯田はその腕を払いのけると同時に腕を掴み、後ろ手にねじあげた。男は情けない悲鳴を上げた。

その悲鳴を聞きつけ、数人の男たちが走り寄ってくる。

ゴキブリですか、あんたらは。

「おい、貴様、確か飯田浩輔とかいったな、探偵同盟の。何しに来

た」

「お悔やみを言わせてもらおうと思ひましてね。誰でもいいですから、前田優司をよく知っている人はいませんか？」

男は一瞬、虚を突かれたような顔をしたが、すぐに顔を元に戻した。

「……前田優司のことなら俺がよく知ってる。何を聞きに来た？」

「ここは客人に座らせてもくれないんですか？　せめて応接室ぐらいには通してほしいものですね」

「生憎応接室は使えないな。前田の馬鹿が車でぶっ壊しやがった」

「そうですか。それでは、どこかゆっくり話せる場所にご案内お願いします」

彼らが案内したのは、ビル内のオフィスだった。部屋に入った瞬間から、目つきの悪いサラリーマンに睨まれた。飯田はわざと死んだ魚の目をして彼らを一瞥すると、向こうは一斉に目線を逸らした。飯田はそんな彼らを無視して、目の前の男をじっくりと観察した。

男は飯田と同じイギリス製の生地を使ったスーツを着込んでいるが、その体軀にスーツがあっていない。スーツが小さいのではなく、男の身長が低すぎるのである。一見すると、子供が父親のスーツを着込んで仮装大会に出場した、と言われても納得できそうな格好だ。

「で？　俺から何を聞き出したいんだ、あんたは？」

「そうですね。前田優司と貴方達の関係です」

飯田は正方形で白色の折り紙を取り出すとそれを熱心に机で折り始めた。男たちはこいつは何をする気なのだろうと身構えた。そんな目線を気にせず、飯田はひたすらに紙を折る。

「前田は以前、この事務所に所属していた。しかし、前田が勝手にサブマシンガンを持ち出し、警察官を射殺。そのまま前田は数人の仲間と共にサブマシンガンを持ち逃げした。その解釈でよろしいですか？」

「ああ、大体あってる」

男は飯田の手元に目線を落としながら言った。

飯田は折り紙で、小さな紙コップを作っていた。空気を入れて底を膨らませると、どこから取り出した魔法瓶でそれに珈琲を注ぐ。最初から魔法瓶に口付けして一気に飲めばいいのに、と男たちは思ったが、それを教えてやるほど親切な人間はここにはいなかった。「では質問です。前田とはどのようなようにして知り合ったんですか?」

「……俺達にとっちゃいつものことさ。居酒屋で飲んで、酒をおごる。賭けゴルフをやって、女を送り込む。後は刑事は、俺達のいいなりさ」

「……もしそんなことが蔓延っているのなら、この国の正義は終わったも同然ですね」

「そうかもな。だが、そうやって俺達は刑事と共存してるのさ。前田優司も、親父ほど堅物じゃなかった」

男は煙草を胸ポケットから引っ張り出し、口に咥える。フィルターの部分をぎりぎりど噛みしめた。前田にしてやられたのがよっぽど悔しいらしい。

「ある日を境に前田は俺達との接触を頻繁に行うようになってきた。だから俺達も、そろそろあいつが釣れる頃だと思ってたんだ。実際、前田は釣れたよ。意外なオプシオン付きでな」

「オプシオン?」

「あいつはこう告白してきたのさ。『実は俺は人を殺したことがある。十七歳のときに、親父を殺した』とな」

「なるほど。つまるところ、大規模な摘発の指揮を執るはずだった木島警部補を殺害し、摘発を遅らせたのは、他ならぬ木島警部補の息子だったというわけですか。つまり、貴方方は前田に借りがあったわけですね」

「流石に呑み込みが早いな。つまりは、そういうことだ。だからなるべくあいつの望むポジションにおいてやったってのに、恩を仇で返しやがって」

「でも、彼に黒嶋組系暴力団の幹部を殺させたんでしょう?」

「まあな」

男はそう言って、肘かけの椅子に座りなおした。飯田はそろそろ引き上げる潮時だと思い、ゆっくりと腰を上げた。

「おっと、どこへ行く気だ？」

手下の男たちが素早く立ち上がると、立ち上がりかけた飯田の肩を突き飛ばした。衝撃で椅子に尻もちをつく。飯田は嫌悪を露わにする、手で肩の埃を払った。

「礼儀を知らない輩ですね。このスーツの値段を知らないんですか？」

「安心しろ。スーツに傷を付けずにあんたを痛めつける方法を、こいつらは熟知してる。大体、ここの秘密を知って唯で帰れるとでも本気で思ってたのか？」

「私の方こそ聞きたいですね。私がここにきて、貴方達が傷つかずにここを出られるとでも思ってたんですか？」

飯田はゆっくりとスーツをめくって見せた。男たちの顔からみるみる血の気が失われていく。

飯田はスーツの内側に、これでもかと言わんばかりのプラスティック爆弾と手榴弾を接着していた。少なくとも、このビルを吹き飛ばすには十分すぎるほどの量の爆薬だった。

「ちなみにこれで、ここはドカンといきます」

スーツのポケットをこそごと探ると、飯田は飛行機の操縦桿のミニチュアのようなものを取り出した。勢いよくポケットから引っぱり出したため、危うく床に落下するところだった。それを寸前ですくい上げ、飯田は思い出したように呟いた。

「ああ、この爆弾のスイッチ、衝撃にも弱いんですね。今さっきは大丈夫でしたけど、今度はどうかわかりませんよ？」

顔を蒼白にした男に向かって、飯田はアルカイクスマイルを浮かべて言った。

「さて、帰らせてもらいますね？」

男たちは一斉に、がくがくと頷いた。

1-15 心的外傷後ストレス障害

あれから一週間、前田優司と思われる犯人は警察署襲撃と暴力団事務所の襲撃を繰り返していた。警察は前田以外にも模倣犯にも苛立ちを募らせていた。既に逮捕された模倣犯は十人を超える。どれも未遂で終わったが、やがては犠牲者が出てしまうことは言うまでもなくわかりきっている。

これらの苛立ちは、主に飯田に向けられてしまう。当然のことだ。あれだけ大見得切って犯人を逮捕すると言ったのだ。その飯田が何もしていないように見えれば、警察は当然反感を覚える。事実、多くの警官の心が探偵同盟や飯田から離れていった。

だが、飯田にはまだ味方がいた。飯田の知り合いの滝警部や、野崎巡査部長である。彼らは飯田の置かれている複雑な状況を理解し、できる範囲で彼に手を貸そうと必死になっていた。

その好意に甘え、飯田は再び記者会見を行おうと、親しい滝警部に連絡を取り、それが可能かどうかと聞いたのだが、彼の意見は『難しい』だった。

「そうですか……やはり、難しいですか？」

『ああ。ウォール財団前での虐殺があっただろ？ お前の提案ではまた犠牲が出かねない。誰だってスクープを撮るために死にたがる馬鹿はいないさ』

「……わかりました。なら、ウォール財団で全て用意します。テレビとラジオの局は全てこちらがジャックさせて頂きますので、よろしくお伝えください」

『は？ おい、飯田ちょっと待……』

飯田は一方的に電話を切った。続いて、ウォール財団の代表であるエドワード・ライラックと連絡を取る。

「もしもし、ミスタ・ライラック？」

『ああ、どうした？ 飯田』

「明日記者会見を開きたいのですが、準備はできますか？」

『……待ちたまえ。何の準備かね？』

「テレビ局とラジオ局のチャンネルを全てジャックする準備です」
「少なくとも見ても一分の沈黙後、ライラックはようやく言葉を発した。」

『……は？』

「いや、だから、テレビ局とラジオ局を……」

『飯田。それは事件解決にどうしても必要なかね？』

ライラックは渋い声で聞き返した。飯田は真剣な声で言った。

「当然です」

『……わかった。何とかして政府と各テレビ局の方に掛け合ってみよう』

「お願いします」

「貴方も無茶するわね。飯田浩輔」

ノックの音と共にドアが開かれる。飯田が振り返ると、扉の傍にはプリンセスが立っていた。ツインテールを交互に揺らし、こちらに近づいて来る。

「どうせ記者会見で堂々と彼を挑発して、彼がやってくるのを待つつもりなんでしょう？ 当然だけど、建物に被害が及ぶわよ」

「私の心配はしてくれないんですか？」

「そうね。貴方が死んでも今のところ代わりはいないもの。こんな計画を立てたのは貴方だけど、少しくらいは心配してあげるわ」

「温かいお言葉を、どうもありがとうございます」

飯田は皮肉っぽく笑いながらプリンセスに一礼した。プリンセスもおどけた仕草で、スカートのふちを掴むと、丁寧にお辞儀してみせた。

「それから、前田優司のことを調べてみて判明した過去がこの報告書に書いてあるわ。何かの足しにはなるでしょう。読んでおきなさい」

「ありがとうございます」

早速目を通すと、書類には飯田の報告書に似た簡潔な文章が綴ら

れていた。

「ふむ……『小学三年生の時に同級生の少女を暴行。小学五年生の時に下級生の前歯を二本折る大怪我を負わせる。その際に父親から暴行を受けた痕があり、愛情に飢えたため取った行動が元でさらなる虐待を受け、悪循環を生み出したと思われる』ですか。なるほど」
A4用紙にびっちり書かれた文字を、飯田はすらすらと読んでいった。

「エディプス・コンプレックスでも抱えてたんでしょうかね？」

「どうかしら？ 抱えていた可能性は高いと言えるでしょうね」

「これは推理とは呼べませんが、木島警部補の葬式の後、木島警部補の奥さんは自殺しています。相当の神経衰弱だったようですが、何が奥さんを追い詰めたんでしょうね？」

「……息子が自分の夫を殺した、という告白かしら？ 前田のような男なら、いの一番に母親に自分の罪を告白するでしょうし」

「そうですね。前田は父親を嫌っていた節がありますから、父親のことが現実以上に暴君に見えていた可能性はあります。その反動とすべきか、母親を自分の中で美化していったのではないのでしょうか？」

「でも母親は、木島警部補を愛していた」

「そうです。息子の行った犯罪と夫を失ったことが直視できずに病気になる、やがて亡くなった。前田は拳銃を手に入れた代わりに母親と父親を失ったわけです」

「あくまで想像の域を超えないけれどね」

プリンセスは肩をすくめた。ツインテールが揺れ、バニラエッセンスの匂いが辺りに漂う。

「……一つ聞きたいんですけど、『負け犬』という言葉は木島警部補が恒常的に使用していた言葉なんですか？」

「ええ。息子に向かってよく言っていたらしいわよ。『負け犬は負け犬らしくしている』ってね……」

「そこまで息子に対し非情になれるなんて、大した人ですね。確か

本島警部補の勤務態度は優秀でしたよね。やくざとの付き合いもなく、とても綺麗な人だったと……」

「ええ。でも、そう言う人だからこそ、家庭で荒れていたのかもしれないわよ。自分のやっていることがやくざと同じように思えてならなかったのじゃない？」

「なるほど……まあ悲惨な生き方ですね。前田の友人は……特にいないでしたね」

「ええ。中学生の時は『怒らせたら何をしかすかわからない男』として入学当初から有名だったみたいよ。不良グループから勧誘もあったそうだけど、断ったらしく、ランチにあってるわ。休み時間は主に図書室で本を読んでいたそうね。なんでも、自分だけのスクラップブックを持っていたとか聞いたわ」

「スクラップブックですか……一体何を書いていたんでしょうね？」
「そうね。当時の彼の読書カードを見る限り、全て犯罪系だったみたいよ。主に少年犯罪全般。それらを手垢で汚れるほど読んでいたみたい」

「幼いころから殺人者になりえる素質はあったってことですか」
飯田は資料の紙をもう一枚、めくった。最後はこんな言葉で締めくくられていた。

『結論として前田優司の幼少の経験は、一生消えないトラウマになっていると思われる。また、母親を神聖視していた点からみても、父親の存在はある意味で大きかったと言えるだろう。仮に前田優司を挑発し事件を解決に導こうとするならば、このトラウマを刺激するのが一番よいと思われる』

1-16 慇懃無礼なサディスト探偵

前田は込み上げてくる笑いを抑える事が出来なかった。今まで、彼を否定してきた街が、人が、彼に恐れをなして平伏しているのだ。これほど心地よいことはなかった。彼は見ようと思えばいつだって人を血に染める事が出来るのだし、いつだってイングラムの奏でる静かな調べに耳を傾ける事も出来る。まさに、やりたい放題だった。どうだ、親父。これでも俺が負け犬に見えるか？ 前田はあの世にいる父親にそう問いかけた。地獄で苦しんでくれているといいのだが。父親を罵倒しようとする、安っぽい文句しか口から出てこないのが、前田が自分でも残念に思っていることだった。

高校生になった時には、前田は固く決意していた。

父親を殺す。父親を殺し、母を解放する。

それは父親と言う、越えなければならぬ壁を超えることと同義であることに前田は気づいていなかった。前田にとって、それは父親殺しと言う形だったのだ。

十七歳の時、彼はそれを遂に実行に移した。平日、学校を休むと、かつて父親が勤務していた署の管轄内にある、小さな公衆トイレに父親を呼び出した。ネタは、高校の学友の持つやくざとの繋がりだった。

昔から父親、木島俊朗はやくざに対しても獰猛だった。行き場の無い怒りをぶつけるかのように彼はやくざと対峙し、常に闘ってきた。そんな父の姿を、前田は何度か見たことがあった。

やくざの情報を伝えると前田が電話越しに申し出た時、父は驚いたように沈黙した。まるで逡巡するかのように暫く黙っていた後、やがてぽつりと言った。

『何処で会おうか』

「親父が昔働いていた警察署があるだろ。あそこの近くの公園の公衆トイレってのはどうだ？」

『わかった。すぐ行こう』

仕事中の父の姿を見るのは、前田にとって久しぶりだった。以前は大きかったその背中が、年老いたことも手伝って猫背になり、ひ弱に見える。前田は思った。前田が用意してきたネタに食らいつくときだけ、言葉がはつきりしていたが、後はぼそぼそと、何を言っているのか全く聞き取れなかった。

「……そうか。情報ありがとう」

立ち去ろうとする父を、前田は呼び止めた。

「それだけか、親父」

「それだけとは……どういう意味だ？」

「とぼけるなよ」

前田は一步一步、足音高く父に近寄った。父はゆっくりと自分の息子を見上げた。その眼からは何の感情も読み取ることとはできなかった。

「俺をさんざんいじめただろ？ そのことについて聞きたいんだよ。親父。何か言いたいことはないのか？」

「……何と言ってほしいんだ、お前は」

その瞬間、前田は激昂した。父に掴みかかると、ポマードで固めた髪を引っ張り、手洗い場の鏡に叩きつけた。がしゃんという音と共に、呆気ないほど鏡は簡単に割れた。

「立てよ、親父」

前田はそう言って四つん這いになった父の襟首を掴み、無理矢理立たせた。彼がよろよろと立ち上がると同時に、顔を洗面台に押し付け、水を流し始めた。父親は息ができずに、足掻いた。無様だった。膝を立て、洗面台にしがみついていた父の尻を思い切り蹴飛ばしてやった。父は呻き声を齒の間から絞り出した。

「ほら、もっと楽しもうぜ、親父。あんたが昔俺で楽しんだ時みたいにな」

前田は床に転がる父を蹴りつけながら言った。父は言葉を忘れたかのように、うう、と唸るばかりで、悲鳴の一つもあげずに、こち

らを見上げた。まるで、満足したか、赦してくれとでも言わんばかりに。

それが余計に、癪に障った。前田は彼を床に突き飛ばし、何度も父の顔を蹴り上げた。顔を掴んで壁に叩きつけ、何度も殴った。それでも、父は泣き言一つ言おうとしなかった。ただじっと、こちらを見上げた。

前田は遂に、父をトイレの個室に追いつめた。父のスーツの内側を探ると、黒光りするリボルバー拳銃が現れた。撃鉄を起こすと、もう一度父の姿を見下ろした。かつて自分を虐待してきた父が今、自分の元に跪いている。彼は父の口に銃を突っ込むと、こう言った。「負け犬はどっちだ？ 親父」

前田は笑いながら、銃の引き金を絞った。父親は驚愕に目を見開き、トイレに倒れ込んだ。銃弾は後頭部を貫き、トイレのタンクに穴を開けた。水が血に混ざり、赤く染まっていく。赤。あか。アカ。前田は、魂を揺さぶられるような感動を覚えた。これだったのか。先輩達は、この感覚を味わう為に、事件を起こしたのかと。

前田は忘れない内にと、彼の内ポケットに遺書が入った封筒を入れておいた。生活反応のある傷のことなど、考えもしなかった。

ブランデーの壺の首を叩き折ると、前田はそこに直接口をつけ、豪快に飲み干した。熱い液体が食道を流れていくのを感じた。

『それでは、予定時刻になりました。ウォール財団からの緊急ニュースをお伝えします……』

先程まで見ていたバラエティ番組の司会者が、カメラの外に引っ込んだかと思えば、突如人気上昇中の女性アナウンサーが画面に現れた。一体何事だ？ 前田は自宅のテレビを食い入るようにして見つめた。

そして、叫び声を上げた。

画面には、憎き探偵、飯田浩輔が映っていたのだ。

『お久しぶりですね。警察官連続殺人鬼。いや……前田優司さん？』
前田は心臓を鷲掴みにされたような気分陥った。何故この男は

俺の名前を知っているのだ？ まさか、こいつは推理できたと言うのか？ この俺が犯人だということを？ 冗談じゃない！

電話を引っ掛くと、すぐさま手下に連絡しようと前田はダイヤルボタンを押した。それを見透かしたような台詞を飯田が吐く。

『ああ、それはやめておいた方がいいですね。前田さん。使い捨ての部下に頼ることしかできないんですか？ 貴方は。少しは自分が前線に立って戦ってきたらどうです？ 私はカメラの前に身を晒しているというのに、フェアではありませんよ。そうでしょう？ 負け犬』

負け犬？ 負け犬だと？ こいつは何を言っているんだ？ まだ俺が何処にいるのかも知らないくせに。そうだ。こいつが俺の居場所を知っているはずがない。俺をあぶり出そうとしているんだ……挑発に乗ってはいけない。

『少し昔話をしようじゃありませんか。前田さん。貴方が小学校三年生の時でしたっけ？ クラスメイトの女性に怖がられたんですってね。もしかしてその人、初恋の人だったんじゃないですかあ？ その時貴方はどんな気分だったんでしょうねえ？ いくら名探偵の私でも推理できませんよ。ケダモノが何を考えているのか考えるだけでおぞましいですから』

黙れ。お前に何と言われようと、俺は姿を現さんぞ。お前は俺の何を知っている？ 何も知らないだろうが。どうせ俺の小学校の同級生を当たって聞き込んだことを知っているだけに過ぎんだろうが。『小学校五年生で貴方は下級生をいじめ、前歯を二本を折ったそうですね。中学校に上がってリンチにあい、貴方も前歯を二本失ったと。いやあ、因果応報とはこのことを言うんでしょうね。それとも情けは人のためならず、とでも言うべきですか？』

黙れ。俺は絶対に出て行かないぞ。前田はそう思いながらも、テレビの電源を切ることだけはしなかった。何かに吸い寄せられるように、画面に食い入るようにしてテレビを見つめていた。

『父親を殺した時はどんな気分でした？ 自分は負け犬じゃないと

でも言い聞かせていたんですか？ それとも父親に負け犬とでも言
ってたんですか？ 貴方は何のために父親を殺したんですか？』

飯田は一旦言葉を切り、思い切り息を吸い込んで言った。

『……まさか、母親を強姦するためですか？』

前田は凍りついた。そして、絶叫した。

それは自分の大切なものを傷つけられた者の怒り狂った叫び声だ
った。

殺してやる。飯田浩輔。今すぐに殺してやる。何処にいる。言っ
てみる。来てほしいんだろ？

『私はウォール財団研究所前で貴方を待ってますよ。来れるものな
らいらっしゃい。母親を強姦しようと、父親を殺した前田優司さん』

再び、テレビ局のアナウンサーが現れた。動転した様子で、髪が
いつもより乱れている。

『い、以上でウォール財団からの緊急放送は終わりです。それでは
引き続き、番組をお楽しみください……』

前田はそんなアナウンサーの言葉を聞いていなかった。飯田を殺
すため、前田は苛立った足取りで部屋を出て行った。

1-17 決闘

飯田はウォール財団の研究所の門に凭れかかり、前田が来るのを待っていた。性懲りもなく野次馬たちが集まり、彼にカメラのフラッシュを浴びせていたが、飯田が銃を抜き出し、上空に向かって発砲すると、蜘蛛の子を散らすように逃げだした。死にたくないのなら最初から来なければいいのに、と飯田は思った。平和な国はこれだから困るんです。事件をアトラクションか何かの類と勘違いしてませんか？

「ウェイター。準備はいいですか？」

ブルーバードはライトを一瞬光らせ、彼に答えた。準備万端。後は前田が網に引っ掛かるのを待つだけだ。飯田は唇の端を吊り上げ、不敵に笑って見せた。

プリンスは相変わらず研究所の自分の部屋で、飯田の眼鏡が映し出す映像に見入っている。結局、彼女は現場で何を学んだんでしょうね？ 現場に出てもいない気がするんですが。

ナイトは事件解決後、きつと渋顔をするだろう。たまには自分の思い通りにならないことを知るべきなんですよ。メイタンテイと呼ばれる人種は……。飯田はやれやれとため息をついた。

『来ましたよ、飯田！』

その声に我に返ると、飯田はすぐさま気持ちを切り替える。鷹のように鋭い目で自分の元に突っ込んでくる一台のバンを睨みつけた。バンは車線などお構いなしに、十字路を横切り、こちらの元へと突っ込んでくる。助手席の窓が開き、サブマシンが飛び出した。飯田はそれをスローモーションで冷静に見つめていた。髪を振り乱し、鬼のような形相をした前田が確かに助手席に乗っていた。飯田は彼と視線を交わした。

イングラムが火を吐いた。

間一髪、ブルーバードが飯田を庇うようにバンの前に飛び出した。

その横っ腹にバンが突っ込みかけ、急ブレーキを踏む。停止しきれず、バンは二十キロ以下のスピードでブルーバードのわき腹に突っ込んだ。ブルーバードはバンに衝突され、わずかにたじろぐ。飯田は走り出すと、ブルーバードの元に滑り込んだ。前田は飯田が走った後をなぞるようにイングラムを発砲した。ブルーバードに凭れかかりながらコルト・ディテクティブ・スペシャルを抜き出し、出鱈目に発砲する。銃弾はバンを直撃したが、ボディに僅かな穴を開けただけだった。

飯田は姿勢を低くしたまま、そつと身体を半回転させ、バンのほうに向き直った。その途端、銃弾が彼に襲いかかる。飯田は再びブルーバードに凭れかかったが、時既に遅し、一発の熱い銃弾が彼の右腕を貫いた。飯田はじんと骨に響く痛みに舌打ちしながらも道路に身体を伏せ、バンのタイヤを打ち抜いた。

それに気づいた運転手は、急いでアクセルを踏み込み、逃走を図った。飯田もまたブルーバードに乗り込むと、よたよたと走り出したバンを追った。時折ハンドルから手を離し、右腕の出血した部分を抑える。弾を摘出したとはいえ、そう簡単に治癒するわけではなく、その腕に触れる度に火箸を押しつけられたような熱さが走った。この腕は暫く使い物になりませんね、と飯田は冷静に思った。神経が傷ついていなければよいのだが。

パンクしたとはいえ、なんとか走り出したバンは、三十キロほどのスピードで当てもなく走り出した。飯田は左手で銃を握り直すと、バンの後輪を打ち抜き、早くもバンを走行不能にしてみた。間をおいて、男たちがばらばらと車から逃げ出す。助手席からも前田が転がり出た。飯田はブルーバードから降りると、彼の後を追って走り出した。バンの横を駆け抜けた瞬間、彼は運転手が射殺されていたのをしっかりと目撃した。

前田はこちらに向かって何度か銃を発砲した。幸い人通りも少ないので流れ弾に当たる人間はいなかった。前田はセミ・オートにするということを考えるほどの余裕もないらしい。すぐに三十二発の

弾丸を撃ちつくしてしまう。飯田は彼が草を薙ぐように発砲するたびに、路面に転がった。下手に発砲するわけにはいかなかった。人通りが少ないとはいえ、通行人に流れ弾が当たる危険性があった。

前田は足をもつれさせながら必死に走り、駅に逃げ込んだ。しめた、と飯田は思った。ダイヤが狂っていない限り、この時間帯にやってくる電車はない。前田はまさに、袋小路に飛び込んだのだ。飯田は閉まりきった改札口を飛び越え、逃げる前田を追った。

全く、広い駅という物はある意味、迷宮といえるのかもしれない。人の流れという壁に行く手を阻まれる上、様々な路線が駅から広がりを見せる。その雑踏を毎日難なくやり過ごしているサラリーマン達は、ギリシャ神話のラビントスに放り込まれても、呆気ないほど簡単に脱出できるに違いない。

そこに、ミノタウロスがいなければの話、ですがね。

飯田は自分の考えに、思わず頬を弛めた。今のところ彼の後ろ姿を見失ってはいない。前田は最も近くにあったホームへと逃げ込んだ。剥げかかった塗料に後ろから照らされたその文字は、『2』と書いてある。飯田は階段をジグザグに上った。

飯田がホームへの階段を登り切った時、突如前田が襲いかかった。物陰に隠れていた彼はイングラムで飯田の頭を殴りつけた。いくら小型とはいえ、サブマシンガンである。飯田はたまらずバランスを崩した。前田が銃口をこちらに突きつけ、引き金を絞った。飯田は咄嗟に左腕で前田の右腕を払った。銃弾は飯田の耳を掠めて壁に突き刺さった。飯田は前田の腹を蹴りつけた。呆気なく彼は吹き飛び、床の上を滑る。ホームに立って電車を待っていた一般市民が何事かと彼ら二人を見つめ、銃を持っていることに気づき茫然とした。

甲高い女性の悲鳴がホームに響く。

それを合図にしたかのように、百人を超える人間が統率なく逃れようともがいた。前田はそんな彼らを追い散らすかのようにイングラムを発砲し、彼らを追いやった。逃げようとして蹴躓き、後から

後からやってくる人間に踏み潰された老人や子供、女性だけがその場に残った。はあはあと荒い息を出しながら前田はくると飯田のほうを振り返った。死んだ魚のような目で銃をゆっくりと構える。

飯田は咄嗟に近くの鉄柱の影に前転しながら飛び込んだ。弾は柱に遮られ、高らかになり響きながら跳ね返る。サイレンサーをつけているせいで、銃声よりも、凄まじいスピードで排出される空莖莖の、アスファルトに落ちる音のほうが大きかった。飯田は自分のすぐそばで跳ね返る弾丸の音を聞き、顔を顰めることなくハエでも追いかけるように首を振った。

前田は再び走り出した。そのあとを飯田が追う。

ほぼ無人のホームで点灯している自動販売機の明かりが、前田の姿を映し出し、長い影ができる。飯田は影踏みでもするかのように、彼の影を追い掛けた。前田は三十メートルほど先行している。その脚は力がこもっており、必要以上の足音を立てている。それに比べ、飯田の足取りは軽やかだ。ハンマーを起こし、何時でも発砲できるようにする。

突如、前田が足を止めた。飯田も滑るようにして立ち止まる。前田が再びイングラムを構えたが、飯田のほうが早かった。飯田はリボルバーを片手で振り上げながら発砲した。その銃弾は前田の右手の中指の第二関節から先を吹き飛ばした。

「ゲームは終わりです。前田優司さん」

飯田が冷たい声で言った。前田は奇妙なほど顔に表情を表していなかった。能面のような無表情さで、ちら、と横に目線を移した。飯田もつられて顔を横に向ける。その一瞬の隙に、前田は倒れていた女性を人質に取った。

「どうだ、飯田。撃てるもんなら撃ってみろ」

前田は勝ち誇ったように言い放った。飯田は顔色一つ変えず、涼しい顔で銃をぶっ放した。イングラムが前田の手を離れ、ホームの床を滑って行く。そのあとを追おうと手を伸ばした前田の数センチ横の地面に銃弾が撃ち込まれる。前田は動きを止めざるを得なかつ

た。自由になった女性は金切声をあげて逃げていった。

「動かないでください」

飯田はこんなときでも敬語を使った。この少年には砕けた口調という概念がないらしい、と前田は本気で思った。

「私の勝ちです。前田さん。大人しくしてください。さもないと、あなたの足を使い物にならないようにしなくてはなりません」

「……ふん」

前田は飯田の脅し文句を鼻で笑った。何を言っているのだ、こいつは。俺にはまだ逃げ道がある。早く来てくれないものか。早く、早く……。

ああ、飯田が近付いてくる。一步、二歩、三歩。早くしろ。早く来い。早く、早く、早く！

ホームにお決まりの警告音とアナウンスが響き渡った。

『二番乗り場を列車が通過します。危険ですので、黄色い線の内側にお下がりにください』

勝った。

前田は高笑いを始めた。何故？ 何故彼は笑っている？ 飯田は

右の眉を跳ね上げた。

答えはすぐに出た。

貨物列車がホームに滑り込んでくる。時速四〇キロ以上はでいであるだろうそれに、前田は飛び移ろうとしているのだ。それに気づいた飯田は、彼の足に向かって発砲したが、銃弾は足元の点字ブロックを撃ち抜いただけだった。

前田は黄色の点字ブロックを陸上の踏切板に見立て、大きく跳んだ。コンテナが積まれた車両の間、空いたスペースに彼は見事なまでに飛び移った。走り幅跳びの選手もかくやと思えるほどのジャンプだった。そのまま電車は走り去っていく。前田の高笑いも遠ざかっていく。

それを見ていた飯田も走り出した。脇をしめ、軽く握りこぶしを作り、若干の優雅さを残した走り方だった。つんのめりながら目標

を目指す。

それはホームに設置してある跨線橋だった。ホームとホームを直接行き来するための橋。飯田はそこから飛び降り、貨物列車に乗るつもりだった。危険なのは百も承知だ。だが、無理な話ではない。前田はそれ以上のことをやってのけたのだから。

幸いなことにその跨線橋には屋根が無く、歩道橋のように手摺だけがついていて。彼が手摺から身を乗り出すと、その真下を貨物列車は通り過ぎていく。一両、二両……と既に、全車両の半分は過ぎてしまっただろう。時間はあまり残されていなかった。

飯田は深呼吸を一つすると、手摺を乗り越え、僅かなスペースに仁王立ちになった。電線の位置と車両の位置を確認する。電線に引っ掛かったらアウト、車両に上手く乗れなかったらアウトと、厳しい挑戦だ。

それなのに、飯田は笑みさえ浮かべている。

彼は危険なスポーツに挑戦したがる人間の部類に入るだろう。所謂一般の人々が感じる恐怖に対し極めて鈍感な人間達だ。それが悪いというわけではないが、一度味わったことのある興奮の上をいく、さらなる興奮を味わいたがるという特徴があり、早死にしやすい。

最も、飯田の場合は元々躁鬱気質で、事件が無ければ重度の鬱患者として、病院で処方箋をどっさり貰うのが彼の日常で、殆ど救いようが無いのだが。

飯田は意を決して、跨線橋から飛び降りた。スカイ・ダイビングのような恰好をした方が足を挫かずに済む。貨物列車のコンテナが、目前に迫る。一瞬のことだが、風で思わず眼を瞑ってしまった。

腹に強い衝撃が走る。彼は激痛に目を見開いた。

彼は、硬いコンテナにしがみついていた。とは言え、しがみつけるほど彼の腕は長くない。加えて、コンテナはかなり滑りやすかった。飯田は強打した腹から徐々に、下に滑り落ちるのを感じた。足は虚空を蹴っている。飯田は後ろを振り返った。

彼の後ろに車両はなかった。つまり、ここから滑り落ちれば、そ

のまま線路に振り落とされることになる。流石にそれは願い下げだ。いくら走行中のブルーバードから飛び降りるのに慣れている彼でも、この恰好から落ちれば、頭部を強打するのは眼に見えている。こぶができるだけでは済まないだろう。

飯田は何とかして這い上がろうともがいたが、指先はコンテナの表面を引っ搔くだけで、この態勢はちつとも安定していない。ちらりと横を見ると、僅かなスペースがある。このコンテナは、車両一杯にスペースを取っているわけではないらしい。そこに辿り着くことができれば！

飯田は肘で身体を固定して、必死に左のスペースにじり寄った。何度も反動をつけて移動するため、彼の身体は自然と振り子のように動く。その反動のお陰で、少しずつ横に移動できたが、それよりも、身体がずり落ちる方が早かった。

列車が左のカーブに差し掛かったらしく、彼は少し右に転がる。

そして、遂にその両手を離してしまった。

彼の身体は一瞬、宙に浮く。思わず目を瞑った。

しっかりと伸ばした指先が何かに触れた感触を覚え、彼は指に力を込めた。途端にそれに引っ張られるようにして、彼の身体は空に浮いた。飯田は恐る恐る目を開けた。

しがみ付くことができたのは、連結器のやや上部。終点に置かれる車止めのような赤い丸がついた箇所よりやや上、その落下防止柵のようなところだ。彼は度重なる幸運に感謝して、落下防止柵の間から車両によじ登った。

彼は奇跡的に、貨物列車の上に飛び乗ることに成功した。後は前田を逮捕するだけだ。飯田は自分の拳銃を労わるようにそっと撫で、弾倉に全弾装填する。ぱちんと音を立てて弾倉をセットし直すと、飯田は慎重に前の車両へと移動を始めた。コンテナを積むだけの列車なので、足場は相当悪い。ちよつとでもバランスを崩すと、列車から転落してしまいそうだ。

突如、銃弾が耳を掠めた。飯田はすぐさまコンテナの陰に飛び込

んだが、危うく床にぽっかりと空いた穴に落ちそうになった。飯田はコンテナにぴったり張り付くと、しゃがみ込み、ゆっくりと顔を突き出した。前田が今所持しているのは父親から奪ったニューナンのはずだ。サブマシンガンという新しいおもちゃに夢中だった彼が弾を何十発も持っているとは思えない。思えないが、用心に越したことはない。

眼鏡を赤外線モードに切り替える。それでも、前田の姿は捕捉できなかった。飯田は再び慎重に、身体を横にして狭い通路を何とか移動する。連結器の上をひらりと飛び越えた時には、まだ一両目というのに飯田は汗だくになっていた。額を流れる汗を乱暴に拭う。汗がすぐに乾かないということは湿度が高いんですね、と馬鹿なことを一瞬考えた。

前田がどこの車両にいるのかは謎だが、何にせよ、飯田を陰で待ち受けていることには違いない。飯田はより一層慎重な足取りで歩き始めた。

飯田が三両目の車両に飛び移ったとき、再び銃声が響いた。今度はより近くなってきている。思わず彼は身を縮めた。列車の走行に伴う風で上着がはためいている。夜風がつんと、夏独特の土のにおいを運んでくる。飯田はそれを振り払うように、銃声の下方方向に向かってめくら撃ちした。手ごたえは全く感じられない。再び前進を始めた。むき出しの車輪と流れていく地面を見据え、冷静に足場を確保していく。その動きには、寸分も隙はなかった。

三発目の銃声が夜空に響く。前田は何故弾を無駄撃ちするのだろうか。前田が飯田を捉えているとは思えない。盲目撃ちにも限度がある。赤外線、暗視ゴーグルにもなる眼鏡を持っている飯田ですら前田の姿を見ることがすらかなわないのだから。

五両目の車両に飛び移った時、飯田は暗視眼鏡越しに夥しい量の血痕がコンテナの側面部についているのを発見した。どうやら前田はこの車両に飛び移り、このコンテナに抱きついたか衝突したかしららしい。さぞ凄絶な痛みが走っただろうと飯田は同情した。無論

彼の腕も感覚が麻痺してきたとはいえ、未だに疼いているのだが。

しかし、その血痕の付き方はまるで上から流れてきたかのように一直線になっていて、まったく途切れていなかった。どういふことだろう。傷跡をコンテナに押し付けたとしか思えない。

飯田の頭に一つの考えがよぎった。コンテナを慎重に見渡し、手や足を引っ掛けることができそうな突起を探す。左の隅にあった凹凸に足を引っ掛け、体重をかけて身体を押し上げる。

コンテナから顔を出した瞬間、銃声とともに弾丸が飛んできた。どこから来ているのかもわからないまま、咄嗟に顔を右に傾げる。弾丸は眼鏡の蔓を直撃し、飯田の側頭部を抉っていった。眼鏡は吹き飛び、飯田は思わず右手で顔を覆った。吹き飛ばされた眼鏡は車両の上を飛び跳ね、車両の下へと吸い込まれていった。

「これで五分五分だな」

と言う前田の幻聴が聞こえた気がした。おかしい話だ。あの眼鏡が赤外線・暗視眼鏡であることを前田が知っているはずもないのに。飯田は一旦コンテナから降りると、もう一度突起に足をかけた。

そのまま左足に力を込め、身体を一瞬上へと持ち上げる。その瞬間、飯田は拳銃をぶっ放した。どさりと、何かが下へ落ちる音が聞こえた。飯田は拳銃を持った右手をコンテナにかけると、精一杯身体を伸ばしてコンテナの上に大の字になった。力を込めた左の人差し指が悲鳴を上げる。コンテナと拳銃の指を差し込む部分とに板挟みになって、指が反り返っているのである。飯田は匍匐前進をするように腕を折り曲げ、肘で身体を支えた。人差し指の激痛からは解放された。

飯田はコンテナの上で立ち上がると、慎重にコンテナからコンテナに飛び移っていった。コンテナには浅い溝がわずかにあるものの、滑りやすいことには変わらない。ましてや飯田の靴はランニングシューズといった類ではなく、溝が全くない革靴である。飯田は飛び移るたびに精一杯踏ん張り、落ちないように努めた。

その頃には大分目が闇になれていた。飯田は驚異的な眼力を発揮

し、コンテナの表面を四つん這いになって擦り始めた。八両目に到達したとき、ぬるりとしたものが手にべったりと付着した。まだ乾いていないそれは、血だった。この近くに前田がいる。飯田は緊張で身を強張らせた。

至近距離で銃声が響いた。明確な殺意が込められた弾丸は、飯田の左頬を掠めた。飯田はコンテナから飛び降りると、マズルフラッシュの光った場所めがけて飛び蹴りを喰らわせた。足が前田の手を捉えた。拳銃が音を立てて転がっていく。ちよつと足を踏み外した飯田はよろめき、コンテナにしがみついて事なきを得た。

前田は叫び声をあげると、飯田に殴りかかった。飯田は体重の乗った一撃を左手で簡単にガードした。前田の右足が振り上げられる。飯田はさっと後ろに飛び退いた。飛びながら撃鉄を起こし、前田に突きつける。前田は動きをピタリと止めた。

「卑怯者！ 銃はしまえ！」

前田は口舌をもって飯田を倒そうとしているらしい。飯田は馬鹿にしたような目で彼を見た。

「誰も拳で語り合おうなど言ってませんよ。さあ、後ろを向いてください」

「断ると言ったら？」

「わかりませんか？」

飯田はにこりともせずに言った。前田は渋々後ろを向いた。飯田はその両手に手錠をかけるために前田に歩み寄った。

突如、周囲が暗闇に包まれた。一瞬飯田は、何が起こったのか分からなかった。ゴー、という音が響き、視界がほとんど遮断される。トンネルに入ったのだ。

飯田は一瞬、隙だらけになった。それを窮鼠である前田が見逃すはずがなかった。前田は足で飯田の拳銃を蹴り上げた。拳銃は呆気ないほど簡単に弾き飛ばされた。前田は拳銃に飛びついた。

飯田はコンテナを蹴るとその反動を利用して強烈な蹴りを前田の顔面に喰らわせた。革靴は前田の鼻面に食い込み、鼻の骨をへし折

った。血をまき散らしながら前田は宙を飛び、通路に叩きつけられ蹲った。前田の右腕に手刀を振り下ろす。今度は、前田はそう簡単に拳銃を手放そうとしなかった。何度か前田が引き金を引いてしまっただが、弾丸が飛び出したのは一回だけだった。それすらも飯田の肩の上を通り過ぎ、闇へと消えていった。

前田は頭を低くすると、ラグビーのタックルでもするかのように突っ込んできた。それをまともに受けた飯田は吹き飛んだ。流石に、体重差には勝てなかった。連結器のあたりまで吹き飛ばされ、柵にぶつかって止まる。受け身もろくに取れなかったので、飯田はすぐに立ち上がることができなかった。

「殺してやるッ！」

安っぽい台詞を吐きながら、前田は飯田に駆け寄ると、太い腕を飯田の首に回してぐいぐいと絞め上げた。窒息させるというよりも、電車から突き落として殺す気らしい。

そう判断した飯田は両手で柵を握りしめると、前田の腹に蹴りを入れた。ばねのようにしなやかに伸び縮みした足から出される蹴りは前田をよろけさせるのには十分だった。飯田は通路に両足をつけると、鋭いパンチを前田の顔面に放った。刺し歯である前歯が砕ける音が響いた。飯田は背広の腰辺りに作った隠しポケットに手を突っ込むと、S & WのM六〇を引っ張り出して突きつけた。

「あなたの負けです」

飯田の声は、冷たく響いた。

トンネルから出た貨物列車は、満月の青白い光に照らされていた。

1-18 事件解決

警察官連続殺人鬼こと前田優司はこうして逮捕された。あるマスコミは元警官が警察官のみならず暴力団をも襲ったことに関し、汚れた英雄と称し、大げさに書きたてたが、世間の反応はもう少し冷やかだった。恐らく、飯田の読んでいる新聞の質が悪いだけだろう。警察にそれほど恨みがあるに違いない。

それでも、世間が警察官連続殺人鬼の逮捕について騒いでいるのは間違いなかった。

「今日もやっているわね」

プリンセスがベッドに腰掛け、パソコンの画面を退屈そうに覗き込みながら言った。飯田は右腕に包帯を巻きつけながら返事を返す。「まあ確かに、元とはいえど警察官が行ったことですからね。まさか警察官が同僚を射殺、しかも暴力団の事務所まで壊滅させるんですから、皆、何がしたいのか分かっていないのだと思いますよ」

「でも、あなたは分かっているんでしょう？」

飯田は振り返り、プリンセスの顔を見つめた。プリンセスはこちらに向かって挑戦的な笑みを浮かべている。ちょうど、テストで百点を取る自信がある子供が、採点者である教師に向けるような笑みだ。飯田もつられて笑みを返す。

「そうですね。答え合わせといきましょうか」

二人はブルーバードへと乗り込んだ。裏口から発車したので、マスコミに見つかることはなかった。たとえ見つかったとしても、車の内部は外から見えないようになっている。

行き先は所轄署である四川署。そこに、前田優司は捕まっている。四川署の管轄内に、黒川駅前交番があった。話によると、滝がわざわざ待っているという。

座り心地のよいように改造した後部座席には西洋人形よろしくプリンセスがちょこんと座っている。シートベルトを締めていないの

は、飯田の運転を信頼しているからであろうか。

まさか。ただお腹が圧迫されるのが嫌なだけなんですよ。飯田は気にせず、いつもの癖で信号が赤に変わってから強引に交差点に乗り入れた。尾行されているわけでもあるまいし、馬鹿らしいとは思ったのだが、習慣には勝てなかった。

だが、どうやら習慣に従って置いて正解だったようだ。一台の後続車が慌ててアクセルを踏み込み、飯田の後を追ってきた。飯田はバックミラーを見ながら眉を跳ね上げた。口元には僅かに笑みが浮かんでいる。それは、獲物を見つけた豹のような笑みだった。

「ウェイター。自動操縦モード」

『了解』

「……何をする気？」

飯田の笑みに気づいたプリンセスが不思議そうな顔で問いたです。「ちよつと四川署に行く前に寄り道しないといけないみたいです」

飯田はコルト・デイクティブ・スペシャルを点検すると、異常がないのを確かめた。運転席側のドアを開け、そこから一気に飛び降りた。プリンセスは咄然とした表情で後ろへと流れていく飯田の姿を追った。飯田は近くのガードレールにしがみつくと、靴底から火花を散らしながら急停止した。

後続の車はあたふたと停車した。飯田の退路を断つように斜めに停車して道路を塞ぐと、ばらばらと男たちが複数降りてくる。皆手に拳銃を持っており、圧倒的に不利だった。

そんな中でも飯田は澄まし顔で拳銃片手に、髪をかきあげて見せた。その姿は同性も惚れ惚れするほどの美しさだった。

「前田優司は逮捕されました。皆さんが何故物騒な武器を持ってるか知りませんが、あとの祭りですよ。もう宴会は終わりました。穩便に帰っていただけたら幸いです」

「ふざけんじゃねえよ。俺達が、前田が逮捕されたくらいで引き下がるようなタマだと思ってるのか？」

「まあ思っではいませんでしたけどね」

飯田はふっと力を抜いて微笑み、彼らに背を向けながら言った。

「何だと？」

「どうせ残党は残党で違った考えを持っている、とは思ってましたよ。しかし……」

飯田はゆっくりとため息とともに続きを吐き出した。

「……しかしここまで馬鹿だとは」

その言葉にいきり立った男たちが一斉に銃を飯田に向けたが、彼のほうが一瞬早かった。飯田は突如振り返ると、三人いる男の一人目の太股を銃で撃ち抜いた。ガードレールを軽々と飛び越え、狭い路地の中に姿を消す。残った二人が喚く仲間を尻目に、彼を追いかける。飯田は俊足で、たちまち男たちを引き離した。時折振り返っては、正確な射撃で男たちを牽制する。男たちは足をもつれさせながら、なんとか狭い路地を飛び出した。

横から真紅のブルーバードが突っ込んできた。男たちを、轢くぞとばかりに蛇行運転を繰り返す。男たちは慌てて路地に戻った。そこをどこからか降り立った飯田が全員の足を撃ち抜き、手錠をかけた。男たちは呻きながら路上に転がされた。

「さて……警察と救急車、どっちが早いでしょうね？」

飯田は携帯電話を取り出しながら、残忍に微笑んだ。

アクシデントはあったが、飯田一行は無事に四川署に到着した。受付に行き、滝警部を呼び出す。プリンセスは飯田の傍にしていると目立つため、少し離れた場所で日傘をさしていたのだが、やはり彼女自身もドレスのせいで目立っていた。

現れた滝警部は肩を叩き、飯田を連れて取調室と向かった。プリンセスも日傘を畳んで後に続く。

「まったく、飯田。お前のせいで皆大騒ぎだ。少しは反省しろ」

天然パーマの入った髪をくしゃくしゃと掻きながら滝は言った。滝もまた飯田と同じ気取り屋で、イギリス製の黒いスーツを着込んでいる。最初に貰った月給を全てスーツに費やしたというのだから、大した男だと飯田は思う。ネクタイの色は紺色だった。

「でも、犯人は逮捕しましたよ」

「だが、あとのことを考えるとだな……」

「私は後のことを考えるつもりはありません。市民の安全を守るのは警察の仕事でしょう。私の役目は犯人を逮捕することであり、その役割はもう果たしましたよ」

「……お前は相変わらずだな」

「それより、犯人の様子は？」

プリンセスがうんざりとした口調で会話に割り込む。滝は驚いたようにプリンセスを見つめ、どもりながら頷いた。

「あ、ああ。それなんだが、前田優司は全く自白しようとしない。頑なに口を閉ざして笑うだけだ。不気味としか言いようがない」

「……なるほど。では私が話してみよう」

取調室に入ると、飯田はどっかと椅子へと座りこんだ。前田は俯いていたが、ゆっくりと顔をあげ、汚らしい歯ぐきをくつきりと見せながらにやりと笑った。

飯田はそれを鼻で笑い飛ばす。

「そんな脅し、誰にも通用しませんよ」

「……別に脅してなどいない。これが自然な顔だ」

前田は薄気味悪い笑顔を引っ込め、無表情になった。

「では、生まれつき馬鹿面をしていたわけですか？」

前田は飯田を睨みつけたが、飯田は素知らぬ顔でテーブルの上で手を組んだ。

「今私の立場はあくまで日本警察の協力者であり、貴方を拷問によって自白させることも可能です。しかし、私はそんな野蛮な手段を取りたくはないんです。わかって頂けますか？」

「……それはあんた自身のためか？」

「ええ。私も自分の履歴に傷が入るのは嫌ですからね。いろいろと上がるさいのは警察と一緒です」

それをマジックミラー越しに聞いた滝がプリンセスのことをじっと見つめた。しかし、プリンセスの一睨みに、滝は好奇の視線を向

けるのをやめた。

「さて。簡単にあなたの人生を振り返りましょうか。前田優司さん」
飯田は椅子をできるだけ机から遠ざけると、窮屈に曲げていた脚を机の上に乗せた。前田は異常に擦り減った飯田の靴底をじっくり眺める羽目になった。

「簡潔に述べましょう。貴方は幼少の頃から父親である木島俊朗から虐待を受けていた。その結果、所謂エディプス・コンプレックスとも言われる感情を抱いたわけです。

まあこの感情は本来、誰もが抱くものですから悪いとは言いません。ですが問題は、それが貴方の人格形成に大きく関わっているということです。本来失われるはずのそのしこりを貴方は抱いたまま育った。その結果、貴方は父親に憎悪を募らせる一方、母親を異常なほど愛した。

また、貴方は学校で何件かいじめの事件を引き起こしていますね。それらを引き起こした後、教育と称して木島俊朗氏が貴方に体罰を与えたこともわかっています。学校ではいじめっ子として、しかし家ではいじめられっ子として板挟みだった貴方はその内部に秘めた攻撃的な衝動をどうやって処理したんでしょうね？」

「……それを当てて見せるのが探偵じゃないのか？」

飯田はそうですね、と呟き、肩をすくめた。

「貴方はおそらく、妄想の中でそれらの破壊衝動を抑え込んでいたんでしょう。でも、それだけでは治まらなかった。だから貴方は図書館で過去自分と似た境遇の少年が起こした事件を調べ上げた。その少年と妄想の中で一体化して人を惨殺するためです。ですが、それにもやはり限界というものがあります。

これは推測になりますが、貴方が小学校に在学中、飼育小屋のウサギやニワトリがBB弾で撃たれ、ナイフで切り刻まれた事件があったそうですね。また、図工室が赤いペンキで塗られたとか。……それらは全部、貴方が引き起こしたことなのではないですか？」

「知らない」

「……まあいいでしょう。話を戻します。抑圧された破壊衝動や攻撃的な衝動。加えて、父親に対する反感。それらは貴方の成長に比例して大きくなっていったでしょう。子供は成長すればするほど、父親の背中が小さく見えるものです。貴方も例外ではなかった。貴方は卑小に見える父親に虐待を受けていたという事実には耐えられなくなりました。そして……今から十五年前の九月、父親である木島警部補を射殺したんです」

「証拠は？」

「貴方が所属していた東洋名水産に、貴方が木島警部補を殺害した、といった旨の発言を聞いた人がいますよ。」

ちなみに、何故九月だったかと言うと、単純なことです。貴方の母親の誕生日だったから。貴方は母親に対し、最高の誕生日プレゼントをしたつもりだったんですよ」

前田は再び黙り込んだ。

「母親を暴君である父親から解放した。貴方はその事実で満足し、意気揚々と家に帰り、早速母親に告白したんです。父親を殺したと。そして、自分だけを見てほしいと。貴方は、母親が褒めてくれるものだと思っていたのでしょうか。」

しかし、母は貴方のことを褒めることはなかった。逆に叱咤した。なんてことをしてしまったのかと。それでも貴方は諦めることができなかった。あの暴君であり、自分よりも弱いはずの父親を、母親が愛しているという事実を信じることはできなかった。

そして、母親は発狂した。それは、貴方の世界の中であってはならない出来事だった。横暴な父親を庇い、どんなに殴られても、どんなに貶されようとも、いつも気高く、優しかった母親は、貴方にとっては神聖なものだったのですよね？ 必死に貴方は彼女を介護した。しかしそれも空しく、錯乱した貴方の母は自殺した。貴方が亡くなった母に対してできることは、父と同じように警察官になり、自分が父よりも強いということを証明すること、だったのでしょうか？」

飯田は冷たい瞳で前田を射抜く。

「母親が死んだあと、廃人のようにになっていた貴方は、たった数カ月で落ち込んでいた成績を一気に伸ばし、志望校をやすやすと合格していますね。その原動力となったものはやはり、母親に対する愛だったのでしょうか？ それとも、父親が貴方を馬鹿にするようなことを囁いたのでしょうか？ まあどちらでも構いません。」

貴方は警察官を目指して勉強した。大学時代、サークルにも所属せず、勉強一筋だった貴方にとっては容易いことだったのでしょう。警察学校の教官は、貴方の父親の知人で、何かと貴方によくしてくれたようですし、環境も貴方に味方していたみたいですね。晴れて、貴方は警察官になることができた。

しかし、そこからです。そこから貴方は挫折した。貴方は警察官という職を知れば知るほど嫌気がさした。知ったような口のきき方をさせてもらいますが、実際のところ私はよく知りません。全部聞いただけです。

命がけの職業でありながら、割に合わない賃金。上司の圧力の大きさ。泥沼というと語弊がありますが、様々な人と関わらなければならぬ。それらに疲れて警察官をやめた、その時です。あなたには、死んだはずの父親の声が聞こえたんですよ。『負け犬は負け犬らしくしろ』とね」

前田は身体を仰け反らせ、飯田から精一杯離れようと蠢いた。勢いよく床を蹴ったため、椅子が転倒する。恐怖に顔を歪め、床に倒れ伏しながらも、なおも飯田から離れようとした。脚は虚しく空を蹴るばかりだ。

「……そして、貴方は狂気にとりつかれた。何時までも死んだはずの父の幻影に怯え、それから逃れようと、それを越えようと足掻き、警察官の顔に父の面影を見い出しては、彼らを殺害したんです」

「違う！」

悲鳴のような前田の声が部屋に響いた。

「親父は死んでいない！ 俺を殺そうと！ 俺を殺そうと襲って来

たんだ！ あいつは不死身だ、何度殺しても何度殺しても、何度殺しても、何度殺してもあいつは他の警官に乗り移っては、俺を殺そうとしているんだ！ 信じてくれ！ 俺は殺されかけたんだ！ そうだ、正当防衛だ！ 正当防衛なんだよ！」

「正当防衛？」

飯田はぞっとするような表情を浮かべ、鼻で笑った。

「ならば、何故暴力団と手を組み、マックを入手したんです？ あれはサブマシンガンですよ？ あれで父親を穴だらけにする気だったんですか？」

「親父は死なない、死なないんだ……」

「死なない父親は、サブマシンガンによって殺せると？ ほう。九ミリパラベラム弾より、シルバー・ブレットでも使った方がよほど効果的でしょうよ。何故サブマシンガンなんかを入手したか？ 単純な話ですよ」

飯田はゆっくりと椅子から立ち上がり、鼻水と涙で顔がぐちゃぐちゃな前田に向かって一歩踏み出した。鋭い悲鳴を上げ、前田が必死に後ずさりするが、すぐに壁に激突した。

「貴方は、人を殺すことに快感を覚え始めたんですよ。父親と似た、制服を纏った大の男達が、ポケットに収まるサイズの人殺しの道具を口に突っ込まれ、その冷たい感触に怯えるその姿にね。」

しかし、やがて興奮は失われた。貴方は拳銃で人を殺すことに飽きたんです。もっと強力な武器で人を殺そうと考えた。だから暴力団と手を組み、彼らの敵を殺害することを交換条件に武器や金を調達して貰ったんでしょう？ 最も、勝手にサブマシンガンを持ち出して警察官を射殺したため、貴方は追われる身となったようですが、貴方は、貴方よりも弱い父親ですらやくざと手を組まなかったことを思い出した。だから貴方は、仕返しの意味も込めて暴力団事務所を襲撃したんですよ」

飯田は眼にも止まらぬ速さで前田に近寄ると、拳銃を引き抜いた。
「ヒッ……！」

「さあ」

飯田は前田の口をこじ開けると、唾内にリボルバーを突っ込んだ。勢いが強すぎて、歯にコルト・ディデクティブ・スペシャルの固い感触が、口一杯に広がる。苦い汁が喉まで込み上げているようだ。た。

「どうです？ 私が貴方の父親に見えますか？」

「ん……あ……ああ……」

前田が呻く。全身を震わせる。恐怖のあまり、失禁すらも始めたらしい。床に黄色い染みが広がる。

「殺されたいですか？ 負け犬」

首を振る前田の顔面を、飯田は振り上げた革靴で蹴りつけた。後頭部を床に打ちつけながら、前田は失神した。飯田はリボルバーを取り返すと、汚物を見る眼で前田を見下ろし、ウェットティッシュで彼の唾液を拭き取る。

「エディプス・コンプレックス。まさに貴方の状態に相応しい言葉です。父親に殺意を抱き、実際に殺害した上、自分の母親を聖人扱い。そのなれのはてが殺人魔。両親が草葉の陰で泣くことでしょうね」

そう吐き捨てると、飯田はウェットティッシュを前田の顔面に投げつけ、部屋から退出した。

「それで顔でも拭いて、父親と同じところに行って頂きたいものです」

プリンスが廊下の壁に凭れ、立っていた。

「……あんなこととしてよかったわけ？」

「さあ？ どうでもいいことですよ」

飯田は肩を竦めた。何処かおどけたような仕草だった。

「……一つ言えることがあります。木島俊朗氏もまた、同族嫌悪に陥っていたんでしょう」

「え？」

プリンスにゆっくりと顔を向け、飯田は後を続けた。

「『暴力団を捕まえる時の鬼気迫る表情』そして、逮捕する際の暴力行為。家庭で暴力をふるう自分自身を見せつけられたような気がして、嫌だったんでしょよ」

飯田は乾いた笑い声をあげた。

「馬鹿な話ですよ。そんなことを考えてるぐらいなら、最初から暴力をやめればよかったのに」

飯田の笑みは、どこまでも虚しいものだった。

二人はそれから、無言で四川署を後にした。

1-18 事件解決（後書き）

これで第一部は終わりです。

第二部まで、三ヶ月くらいお待ちください。

第一章後書き

慇懃無礼な過激派探偵第一章、いかがでしたか？　少しでも楽しんでいただければ幸いです。

主人公、飯田浩輔は私が書いている他の中編小説に出てくる主人公に比べると、「自分」がモデルの主人公ではなく、「自分がなりたい人間」像に最も近い主人公であります。なにものにも縛られず、自分のやりたい放題し放題、ちよつと過激すぎる主人公かなと思いつつ、第二部へ移りたいと思います。

第二部は連続爆弾魔が登場。飯田浩輔は次々と犯行を重ねる爆弾魔をどうやって食いとめるのか？　第二章に御期待下さい。

2-1 十六夜

暗雲が広がる十二月の朝のことだった。日本の首都にある、ウォール財団の日本支部では、飯田浩輔が退屈そうな顔でデスクワークに励んでいた。つやのある木製の机に頬づえをつき、今年解決した事件の件数、詳細を書き出し、特に探偵同盟第十三位バトラーとして解決した件を重点的に洗い出していた。

最も、今年探偵同盟の名を出して事件を担当したのは、秋に解決した警察官連続殺人鬼事件くらいのものだ。あとは、私立探偵の飯田浩輔としてしか取り扱っていない。しかしそれすらも、A4用紙一枚に収まる程度なのだが。

彼は無論探偵同盟の席に座ることができるだけだけの頭脳を持ち合わせているが、肉体労働の方が好きだった。それに加え、解決した事件のことは片っ端から忘れていくのである。彼が開発したAIのウェイターがいなければ、彼は始末書や報告書をろくに作成せず、他の同盟員から馬鹿にされ、ライラックから呆れられていただろう。ウェイターは深くため息をついた。

飯田も同じく、ため息をついていた。

まったく。過去のことをいちいち掘り返してどうする気ですかねえ。

『飯田。ため息をついている暇があったら、さっさと書類を作成しろ』

ウェイターが苦言を呈した。飯田の作成する事件の報告書は、どう考えても小学生の描いた絵日記や小説としか思えない。真面目にやればそれなりの書類を作成できるのだが、彼は頭でっかちの上司をからかう為にも、あえてそれをしないのだ。

ウェイターとしてはそんなことを見過ごすわけにもいかず、毎回彼の報告書を勝手に書き直すはめになる。

「私はもう過去の事件なんて忘れたんですがねえ……そもそも、プ

リセンスが報告書を提出しているんじゃないんですか？」

彼は未だに警察官連続殺人鬼の件に関する報告書兼始末書を書き上げていない。

『彼女は事件を解決したその日に、ライラックを介して同盟に提出している。怠け者の、貴方とは違うんです』

ウェイターは元首相のような口調で言った。飯田はおどけたような顔で肩を竦めた。

「やはり、ホワイトカラーは違いますね」

『彼女のドレスの色は青だったがな』

ウェイターが軽口を叩く。ブルーカラーに引っ掛けたジョークのようだが、とても笑えない。ウェイターも失敗したと思ったのか、飯田が立ち上げていたペイントソフトを強制終了した。

「はいはい、わかりましたよ。えーっと、改行して、こう打って下さい。『本職探偵同盟第十三位バトラーは、探偵同盟第十二位プリンスと協力し、未曾有の事件の被疑者である前田優司を逮捕するに至った。めでたし、めでたし』……これでいいですか？」

『……お前はあの事件を何だと思ってるんだ』

「その名の通り、昔話ですね」

『あの件で我々はこってり絞られたんだぞ。犯人とのカーチェイスの末、貨物列車上で銃撃戦を行ったり。どうやって走行中の貨物列車に飛び乗ったんだっけ？』

「忘れましたね、そんなこと」

飯田はすつとぼけた。跨線橋から飛び降りたことをウェイターが知っていながら聞いてきたことを承知していたからだ。ウェイターは創造主そっくりのため息について、自分で勝手に書類を作り始めた。

チャイム音とノックの音が響いた。飯田が耳を欹て、机上のリポバーに手を伸ばす。全弾装填されていることを確認すると、それを懷に忍ばせ、彼は足音を殺してドアに近寄った。

『ウォール財団の誇るセキュリティを突破してここまで来れる人間

がそう何人もいるのか？」

ウェイターが飯田をからかうような口調で呟く。飯田はそれに耳を貸さず、そっとチェーンとロックを外すと、ドアをぱっと開いた。素早く、コルト・ディテクティブ・スペシャルをドアの隙間から相手に突きつける。

「……来訪客が来る度に銃を突きつけるとは、素晴らしい御挨拶ですね」

ドアの外に立っていたのは十六夜と呼ばれる少女だった。黒く長い髪を背中辺りまで伸ばし、眉は太く、髪と同色の目は大きい。鼻は小さく丸みを帯びていて、唇にはリップクリームが塗られていた。施設内は暖房が利いているとはいえ、この真冬の中白のワンピースを着る意味を、飯田は理解できない。

彼女はこの建物内で唯一、ウォール財団の正規の職員ではない。元々不良のグループにくみしていた一人だったが、飯田が彼女の身柄を引き取ったのである。その度胸は大したもので、彼が今このように銃を突きつけていても全く動じずにいることができる。主な仕事は、研究所の喫茶店の給仕だ。なかなか人気があるらしい。

「貴女でしたか。いや、失礼な真似をしました」

飯田は頭を下げ、銃を上着のポケットに押し込むと、丁重に彼女を部屋に招き入れた。

彼女はベージュ色のトレイの上に、ハンバーガーとおにぎり、紅茶と珈琲にフライドポテトを載せている。飯田は珈琲の色から上質の豆を使用していることを確認しつつ、紅茶の香りに顔を顰めた。彼は紅茶が嫌いなのだ。

『女性に銃を向けるんだからな、よりにもよって。英国紳士のやることじゃないよ』

「私はテキサス出身です。スノップとでも何でも言ってお下さい」

飯田は彼女を応接間に案内した。ソファと机が置いてあるだけの簡素な部屋だ。

「ところで、何の用です？　まあ、トレイの上に置いてあるものか

ら、私に差し入れを持って来て下さったと思うのですが」

「ここで私がこれを平らげる、という可能性は考えられませんか？」

「貴女はそこまで意地の悪い女性じゃありませんし、美女が食事をしている場面を見せて頂ければのなら、喜んで部屋を提供しましょう。ま、借り物の部屋ですがね」

飯田は昔から口説き文句を考えるのが好きだった。想像と現実の反応の違いが面白いのである。だが残念なことに、彼の口説き文句を好意的に受け取るのは大概自分の嫌いなタイプの女性であることを承知していた。情に濡れた女、と飯田が称するタイプである。結局、彼が口説き文句を言える相手は、十六夜くらいのものだ。彼女は決まって、

「お世辞が相変わらず上手いですね」と微笑むだけだが。

『飯田。早く続きを書け。さもないと私もストライキを起こすぞ』

「ほう。何を要求するんです？」

行儀よく手を合わせ、おにぎりにかぶりついた飯田が不思議そうな顔で、薔薇と拳銃が表示されたディスプレイを見つめた。リボルバー拳銃の引き金に薔薇が絡みついている絵は、飯田が先程ペイントソフトで描いたものだ。ちゃっかり保存していたらしい。

『私もインターネットという電脳空間で羽を伸ばしてみたいんだよ。面白そうなソースが転がっている可能性もあるだろ？』

「まあそうですが……まさか、国防省でもハッキングする気ですか？」

ウェイターは飯田の問いに答えず、さっさと自分をインターネットに流し始めた。飯田は次々と画面に現れる機密ファイルを見てため息をつく。どこをハッキングしたのかは知らないが、足のつかないようにしてほしいものです、と飯田は心の底から願った。

消防車のサイレンがどこから響いてきた。飯田と十六夜はほぼ同時に立ちあがった。

「何でしょうね、今のは」

「さあ……ニュースを見てみればわかるんじゃないですか？」

十六夜は小首を傾げ、下唇に人差し指を当てながら言った。なるほど、と飯田が頷き、パソコンのテレビのプログラムを起動する。

二分後には速報が流れていた。

『臨時ニュースをお知らせします。都内にある小学校で火事が起こりました。繰り返します。都内にある小学校で火事が起こりました……』

「火事ですか……道理で……」

「……またあなたの出番かもしれませんね」

では失礼します、と十六夜はトレイを抱えると部屋を出て行った。飯田は分厚い赤のカーテンを開け、外の様子を窺った。分厚い防弾ガラス越しに、小学校が見えた。ここからそう離れていないらしい。飯田は、消防車が赤色灯を回転させながらそちらの方角へ行くのをじっと見つめた。何故か、嫌な予感が拭えなかった。

2-2 怒りの日

次の日の月曜日、飯田は眼鏡をかけ、炎上した小学校へと向かった。市街地のど真ん中に建てられているその小学校に通学する生徒は多いのだが、火事が起きたのは昨日、つまりところ日曜の夜だ。平日ならいざ知らず、休日の、しかも夜となれば被害も少ないだろうと飯田は思った。

実際学校を見てみると、学校が倒壊しているほどの火事が起きているわけでもなかった。

この火事が事故ではなく事件だとすると、何故犯人は日曜の夜を狙って火事を起こしたのだろうか。被害が小さくなるのは分かっていたはずだ。この火事は人的被害を出すことが目的ではなかったのだろうか。

飯田はそんなことを考えながら、軽やかに黄色いテープを乗り越えた。すぐさま警察官が飛んでくる。

「勝手に現場に入ってきてはダメですよ……」

「はい、警察手帳」

実際、飯田は警察手帳を見せる必要もなかった。若い警官は慌てて敬礼し、彼を現場に案内までしてくれた。警察官連続殺人鬼事件を解決したことで一躍有名になっていた飯田の顔を知らぬ者はいなかった。

さらに、事件解決後飯田は政府に強く働きかけ、特別に捜査権を手に入れた。そのため、飯田は自分の興味のある事件は心おきなく捜査することができるようになった。そのおかげか、最近は鬱の波が緩やかになってきている。

躁状態になりすぎるのもあまりいい状態ではないのだが。

二人はしんと静まり返った一階を抜け、捜査員が走りまわっている三階へと移動した。

「こちらが爆発の現場です」

「火事ではないんですか？」

「はい。使用されたのは簡単な手製の爆弾だったと思われます」

案内されたのは六の一、と言う焦げたプレートのかかっている教室だった。

校舎全体が古いのもあって、木で造られた引き戸の白い塗装ははげていた。火事の際は閉まっていたらしく、教室側の面は黒ずんでいた。窓ガラスは全て木端微塵に吹き飛んでいる。木が焦げた臭いがする。プラスチックの焦げた臭いもそれに加わり、最悪なブレンドになっていた。

焦げている机のうち、一つだけひどく炭化している物があつた。恐らく、この机が最初に燃やされたのだろう。その机は前方から三番目、廊下側の窓から数えて二番目の席だった。

「この机に座っている人間が被疑者……なわけないですよねえ……」
それでは、あまりにも阿呆だ。飯田は首を振ると、ため息をついた。

「……ところで、このラジカセには何が入ってるんですかね？」

飯田は教壇に置かれていたラジカセを手に取った。片手でひよいと持ち上げると、入口に立っていた警官に聞く。

「このラジカセは事件が起こる前からここにあったんですか？」

「学校の備品だからあったと思いますが……定位置がそこは定かではありません」

「そうですか……」

飯田は中からCDを取り出した。ディスクの表面を見て、顔を顰める。市販のCD―Rだ。何の曲が入っているか聞いてみなければわからない。

飯田は捜査員にちょっと借りますと報告すると、CDをセットし直し、再生した。途端に、荘厳な音楽が流れてきた。飯田と捜査員は思わず顔を見合わせた。

「最近の学校ではレクイエムまで教えているんですか？」

「いや……定かではありませんが……この曲は？」

飯田はそんなことも知らないんですか、と言いたげな目で捜査員を見ると、ため息をついた。

「ヴェルディのレクイエム、『怒りの日』です。モーツァルト、フォーレと並べて三大レクイエムと呼ばれる名曲ですよ」

「そ、そう言えばパチンコか何かのCMで聞いたことがあるような……：しかしまあ、なんでこんな曲が……」

「わかりません。学校の教員にこのCDも学校の備品だったのか確かめておいてください。今のところ、推理するには情報が足りなさすぎます」

教員に聞いたところ、そんなCDを入れた覚えはないという。

飯田は一階に降りると、正面玄関に向かった。犯人が正規の手続きを踏んで学校を訪れたとすれば、ちゃんと記録されているはずだからだ。

名簿を見たところ、昨日学校を訪れた人間は三人だった。鮫島隆二、亀山俊夫、荻田優一の三人だ。来校した目的は『卒業生として』と書かれている。それぞれ別々の時間帯にやってきていた。何時に帰ったかは記録されていないので、どれくらい滞在したのかは謎だ。事務の人間に確認したところ、やはり来客は三人だったという。

しかし、事務員も常に待機しているとは限らないから、他にもいた可能性はある。

飯田は職員室に保管されていた膨大な量の卒業アルバムからそれぞれ三人の名前を探りだした。確かに三人ともこの学校の卒業生だった。飯田はそれぞれの住所を控えると、学校を後にした。赤のブルーバードに乗り込む。

このブルーバードは一九八〇年代の六代目のブルーバード、二ドアハードトップで、飯田のお気に入り車だ。

だが職業上、この車はどうなるか分からない。前回の事件では、銃弾でスタスタになってしまったのだから。

しかし、ライラックに無理を言って修理してもらったところ、ほぼ新車状態で返ってきた。これで飯田は、安心して乗り回せるとい

うものだ。

飯田は三人の住所に向かってみた。鯨島の住所はそのままだったが、あとの二人は引越していた。飯田は彼から現在の二人の住所を聞き出そうとしたが、彼は他の二人の住所を知らなかった。飯田は仕方なく彼の家を去った。

飯田がウォール財団に戻ると、十六夜がいつも通り無表情でロビーの受け付けに立っていた。

「お客様が来てますよ。飯田」

「へえ、どなたです？」

「私だけ。お邪魔かしら？ 飯田浩輔」

冷やかな日本語が飯田の背後から聞こえてきた。飯田が振り返ると、日傘を持ったプリンセスがこちらに歩み寄ってくるところだった。飯田は軽い驚きの声を上げる。

「プリンセスじゃないですか。どうしたんです？ しかも日本語、話せるようになったんですか？」

「……ヴェルヴェチカよ」

プリンセスはやや顔を赤らめながら呟いた。

「はい？」

「だから、私の名前。観光目的で日本に来たのよ。いつも職業上の称号で呼ばれたくはないわ。日本語はこの前覚えたばかりよ」

「そうですか。ところで、ファミリーネームは？」

「秘密。言ったら、私がどこの国の人間かばれちゃうわ」

プリンセスはいたずらっ子のような笑みを浮かべて、飯田を見上げた。飯田は苦笑しながら彼女の顔を見つめ返した。

「まあ美しい女性には秘密があるものですからね。何も言わないことにします」

ところで、と飯田は切り出した。

「昨日爆弾事件があったのをご存知ですか？」

「え？ そんなことがあったの？」

「ええ」

「その事件、貴方が担当することになったわけ？」

「いえ、個人的な興味を抱いて捜査することになりそうです」

「……どんな事件？」

プリンセスの目が突如鋭くなった。これがよくある探偵モードという奴か、と飯田はその目に圧倒されながら思った。

「人的被害が出なかった爆弾事件です。それだけでなく、こんなCDが残っていました」

飯田は携帯電話を取り出すと、無料動画サイトから同じものを見つけ出し、音楽を再生させた。それを聞いたプリンセスは一瞬で曲を把握した。

「ヴェルディのレクイエム、『ディエス・イレ』ね？」

「その通りです。何故現場に残されていたかは謎ですが」

「しかも、人的被害を出さない爆弾事件ですって？ 爆弾って普通被害を出すために使うものでしょう？」

「……人に恨みがあつたのではなく、校舎に恨みがあつたのかもしれないよ」

プリンセスはくすくすと笑いながら日傘の柄の部分を握り、手首のスナップをきかせてそれを一回転させた。

「なかなか楽しそうな事件じゃない。休暇で来たけど、刺激のある休みになりそうだね」

「……事件を楽しんでどうするんですか……」

飯田は呆れながら両手を広げた。そんな彼らを見守る十六夜は、貴方が言えたことじゃないでしょう、と言いたげな目をしていた。夜、プリンセスは気まぐれで、飯田の部屋へと行ってみた。自分のカードキーを通し、指紋認証システムに右手の人差し指を通す。ドアの上部につけられたランプが赤から青へと変化する。プリンセスはドアノブを握りしめると一気に引いた。

部屋の中では大音響で音楽が流れていた。『怒りの日』だ。飯田はカウチに腕を広げて座り、テンポの速いその曲を何度もリピート再生していた。プリンセスは耳に両手をあてながら飯田に近寄った。

虚ろな目で天井を見つめていた飯田だったが、プリンセスが入ってきた途端に懷に手を伸ばすあたり、かなり興奮状態に陥っていると思われた。

「眠らないの？」

飯田はぱちんと人差し指を親指で弾いて音を立てた。途端にスピーカーが沈黙する。飯田はカウチから起き上がった。

「眠らないんじゃないくて、眠れないんですよ。一応貴方の方が先輩ですから、私のプロフィールは読んでいると思いますが」

「ええ。重度の躁鬱病患者で、普段は鬱状態、事件が起きた時には躁状態になるって聞いたわ」

「仰る通りです。自分でも特異な体質だと思いますよ」

「睡眠薬とか使わないの？」

「薬は嫌いですし、耐性があるんですよ」

飯田は上着の皺を伸ばしながら言った。暖炉の火がはぜる。プリンセスはそちらに視線を移した。

「……被疑者は近いうちにまた爆弾騒ぎを起こしますよ」

「そうね。その可能性は十分にあるわ」

「被害が出る前に、犯罪そのものを阻止すれば……その人物こそが、本物の名探偵なんでしょうがね。我々は、犯罪が起きてから被疑者を特定することしかできません」

「でも、犯人がそれ以上の罪を犯すのを防ぐことはできるわよ」

プリンセスはそう言いながら、飯田が一度も『犯人』という言葉を使用していないことに気づいた。なかなかやるじゃない、とプリンセスは思った。

「……ところで、ここで寝ますか？」

「なんでそんな話になるのよ！」

感心した自分が馬鹿だった。プリンセスは年相応に顔を赤らめた。

「もう夜も遅いですし、一体何をしに来たのかな、と……」

「うるさいわね。唯の雑談をしに来たのよ。この変態！」

プリンセスは肩をいからせ、部屋を出て行った。後に取り残され

た飯田は再び、麻薬中毒者のように瞳孔を開いてじつと虚空を見つめていた。

「……私、彼女の逆鱗に触れたみたいです」

『お前が馬鹿なことを聞くからだろが』

ウェイターは呆れ声で呟いた。

2-3 探偵同盟特別権限

住所がわからないなら、電話番号から割り出せばいいじゃない、とどこぞの貴族のようなことを言ったのはプリンセスだった。

鯨島は二人の住所は知らなかったが、携帯電話の電話番号は知っていた。飯田は一旦それらの番号に電話をかけ、本人が出たのを確かめると、大手の携帯電話会社に赴き、二人の住所を教えろと丁寧に迫った。受付嬢も飯田の顔を知っていたらしく、飯田が警察手帳を見せると、

「何時の間に刑事さんに転向されたんですか？」

などと首をかしげていた。飯田は笑ってごまかした。

こんな過激で反体制のローン・ウルフが刑事などになってしまったら、それこそ法治国家ニッポンは終わってしまうだろう。

飯田はこうして、爆弾事件のあった当日に学校を訪れた三人の住所を全て控えた。一人ずつ、当日に何をしたのかを聞いてみたが、答えは全員似たり寄ったりで、郷愁を覚え学校に立ち寄り、校舎の中を見て回ったと答えた。時間帯も全員ばらばらで、帰った時間も被っていないかった。飯田は被疑者を特定するのは難しいと捜査を途中で断念した。

しかし、事件解決を放棄したわけでは無い。犯人はまた犯罪を二度、三度と繰り返し返して行くうちにぼろを出すだろう。飯田はそれを狙っているのだ。

「で、貴方の策は？」

「今言ったとおりです。犯人が新しい犯罪を行って、ぼろを出すまで待つこと。それから、都内の小中学校に警告はしておきました。特に、あの三人が通っていた中学校には厳重に警戒するように伝えておきましたよ」

「なんで中学校にも？」

「そりゃあ……エスカレーター式に上がる可能性もあるじゃないで

すか」

プリンセスは呆れたように鼻を鳴らしたが、飯田の意見がなかなか間違っていないことを内心認めているようだった。

飯田はあくまであの三人の中に犯人がいると信じているようだった。一瞬ちらりと見ただけの卒業アルバム住所から当時のクラスメイト達を当たり、三人の身辺調査を行っていた。

プリンセスは『ディエス・イレ』の意味を考えていた。

犯人が意味もなくディエス・イレの音楽を残したとは考えられない。それは犯人からのメッセージだ。誰に宛てたわけでもない、決して理解されないであろうメッセージ。

「ディエス・イレ……怒りの日。旧約聖書の預言書の中に登場する、神が世界を裁く終末の日……どういう意味かしら？」

プリンセスは一人バア付きの喫茶店の隅でアップルティーを飲みながら考え込んでいた。そこへ、聞き込みを終えた飯田が帰ってきた。

「次に流れるのはモーツァルトの怒りの日かもしれませんね」

「笑えない冗談だわ」

プリンセスは顰め面で言った。飯田はそれを鼻で笑い、給仕の十六夜にカプチーノを注文した。

「三人のことで新しい発見はあった？」

「いえ、特には。鮫島、荻田、亀山の共通点は、中学校時代文芸部に所属していたということくらいです。荻田以外は全員劣等生で、そのうち荻田は地区で最も偏差値が高いと言われていた高校へ進学しています。その後私立の大学を出て、コンピューターのソフトウェアを開発する中小企業に就職していました。本人に会ってみましたが、これと言って怪しい点はありません。マイブームまっしぐらの、所謂ナード風の人でしたね。少し繊細そうなところはありました。」

鮫島は高校を卒業後、アルバイトを転々とした後、電子機器を製造する工場に就職。亀山も似たような境遇で、彼らにも特に怪しい

点はありませんでした」

「犯人が他にいる可能性は十分ね」

「ええ……何だが徒労に終わった気がします」

飯田は給仕が運んできたカプチーノに口をつけながら言った。珈琲についてきたシナモン・スティックを慎重に抜き出すと、クリームを珈琲に溶かさずに飲み始めた。

「被疑者が人的被害を出すことを目的としていなければよいのですが……」

「こんなのはどうかしら。警察に三人を探偵同盟の特別権限で勾留させ、一ヶ月様子を見るとか」

「ミスタ・ライラックが反対しますよ。いくらなんでも非人道的すぎると」

「でも、犠牲者を出すわけにはいかないでしょ？」

「……なんだか、私と貴女、いつもと立場が逆な気がします……」
飯田は少し押され気味に言った。珍しい光景だと十六夜がくすりと笑った。そんな彼女を、飯田は睨みつけた。

「何か言いたそうですね、十六夜。貴方の意見は？」

「……私は探偵ではありませんよ、飯田」

十六夜は一瞬浮かべた笑いをすぐさま消すと、厨房の奥に引っ込んだ。

「彼女に対して随分冷たいじゃない。どうかしたの？」

「……いえ。少し大人げない真似をしてしまいました」

飯田はため息をついた。珈琲の上に乗ったクリームが吐息でゆらりと揺れた。プリンセスはそんな彼の姿を見て、色々と複雑な事情があるのかしらと首を傾げた。

2-4 第二の事件

事件が起きたのはまたも日曜日だった。被害にあったのは中学校で、三人の出身校だった。飯田は早速、調査に出かけた。急な勾配の坂の頂上、つまるところ高台の上に建設された中学校で、正面に堂々と設置されている時計の針は三時二十七分で止まっていた。

「なるほど。爆発の影響で時計が止まってしまったということですか」

「いえ、元々止まっていたそうです」

「……そうですか」

飯田は訂正を入れた捜査員を冷ややかな目で見つめながら言った。捜査員は飯田の絶対零度の目線を浴びて凍りついてしまった。

「何のんびりしているんですか。行きますよ」

飯田は正面玄関から校舎へと侵入した。捜査員が彼の後を慌てて追う。

爆発したのは三年生の教室で、今回の爆発は前回とは違い、かなり威力のある爆弾を使用したようだ。教室の中心を爆心地とし、そこから円を描くように爆弾の痕跡が残っている。机や椅子が吹っ飛び、ばらばらに解体され、壁に突き刺さっている。飯田はまるで押し退けたかのように広々とした、爆心地に立ち尽くした。

「これでは……証拠もろとも吹き飛んでいる可能性がありますね」

「そうですね……」

捜査員はどこか達観したような口調で飯田に合わせた。飯田はそんな彼を不機嫌そうに睨みつけると、教卓の上に置いてあったCDラジカセを持ち上げた。今回も、中のCDは無事だった。飯田は他の教室のCDラジカセでそれを再生させた。

今回のCDも、ヴェルディのレクイエム『怒りの日』だった。飯田は鼻を鳴らしてCDを抜き出すと、捜査員に押し付けた。受け取った捜査員は、何故彼が不機嫌なのか、理解できなかった。

階下に降りて、日曜日の来校者名簿を調べる。時計を修理するために学校側が雇った業者も含めると全部で七人。その中には、亀山や荻田、鮫島の名前が記されていた。

「……荻田、亀山、鮫島の名前がここにも載っていますね……」

『まさか、三人の共謀かしら？』

「いや、流石にそれはないでしょう。ですが、自分たちが被疑者だと言ってくれているようなものですよ」

『でも、犯人が学校の来校者名簿に名前を残していなかったという可能性も考えられるわよ』

「ええ。ですが、可能性としては低いと思います」

『……どうということ？』

プリンセスは声を潜めた。

「最近の学校は不審者対策として、以前ほど昇降口を開放したりしていないんです。となると、入れる場所はおのずと正面玄関に限られます。四六時中いるわけではありませんが、事務室には普通事務員がいるはずです。」

仮に事務員がおらず、名前を書かずに済んだとしても、職員室は一階です。そう易々と教師たちの目を潜り抜けて上の階へは上がれないでしょう。卒業生なら、顔を覚えられているのですから、なおさらです」

『……ま、一理あるわね』

飯田はあまり納得してなさそうな口調のプリンセスと通信を切った。学校を一旦出て、再び鮫島の元へと向かった。

彼は三LDKのアパートの一室でカウチに寝転がり、テレビを見つめていた。そんな姿を見て、ウェイターは思わず飯田の普段の姿を思い出した。

「どうということなんですか？ そろいもそろって、三人で中学校に行くとは」

飯田が鮫島を問い詰めると、鮫島はあっさりと、
「荻田に誘われたのである日学校に行った」と白状した。

「荻田さんが？」

「そうだよ。荻田は俺達が所属していた当時の文芸部の部長でね。彼に誘われたら、行かないわけにはいかないだろ」

「そんなものなんですかねえ」

飯田は頭を掻きながら呟いた。彼が所属している団体と言えば、探偵同盟くらいだ。老人たちに呼び出され、ねちねちと愚痴を言われる役目ばかり回ってくるので、どちらかと言えば辞めたい。元々人と付き合うのは得意な方ではないのだ。

もしもナイトが、

「飲みに行くのに付き合え」

とでも言ったら、飯田は全力で拒否するだろう。未成年であることを考慮しても、だ。

「日本人ならやっぱ『和』を保つのが重要だろ？」

「いや、私は日本人じゃありませんから」

「あっそ」

鮫島はカウチの上で大欠伸をした。

「荻田優一さんってどんな人なんです？」

「変わった男だよ。一言で言って。時代錯誤も甚だしい。時代遅れの男だ。詳しいことは亀山にでも聞いてくれ」

飯田は狭く雑然としたリビングに置かれているカウチから立ち上がると、窓際に飾ってある写真を手にした。詰襟を着た数人の男子生徒と、それを上回る人数の女子生徒が写っている。女子たちの方が体格がよく見えるのは気のせいだろうか。

「中学校の文芸部のメンバーだよ。他の連中は結婚してたり、自分の道を進んでたりしてるってのに、俺達は過去に縛られて全く前進できないのさ」

鮫島は自嘲するように言った。ビール瓶を一本冷蔵庫から取り出すと、瓶に直接口をつけて飲み始めた。

「一杯やるか？」

「いえ、遠慮しておきます。車で来てますから」

「そうか……その写真、必要なら持っつけ」

「では、お借りしましょう」

飯田はそれをポケットに収めた。どこか哀愁漂う鮫島の姿に一礼し、飯田は部屋を辞した。

自動車免許を持つていないことは言わなかった。

「俺に用があるということですが……」

亀山の家を訪れると、小柄な亀山は目を白黒させながら飯田を部屋に招き入れた。

彼もまた、アパートの一室で暮らしていた。リビングにはテーブルが一つと向かい合う二つの椅子があるだけだった。亀山は神経質そうに五分刈りの頭を撫でながら、上目遣いでこちらの様子を窺っている。飯田が一番嫌いなタイプだが、飯田はできるだけ彼の仕草を意識しないよう努めた。

「ええ、そうです。調べたところ、貴方は事件があったその日、小学校、中学校に足を運んでいますね」

「え？ あ、はい、そうですけど……まさか俺を犯人だと言いたいですか？」

「御冗談を。私はまだ何も言ってませんよ」

飯田はそっけなく言った。

「あ、ああ、そうですね」

「中学校の方には苧田さんに誘われていったんですか？」

「ええ。そうです。苧田は俺の一番の親友ですから。小学校からの付き合いです」

「ふむ、そうですか……」

『なんだか、苧田が一番怪しくなってきたわね』

プリンスが口を挟む。飯田はそれに返答せず、苧田のことについて質問し始めた。

「苧田さんってどんな人です？」

「そうですね……小学校の時から聡明な男でしたよ。ルックスはいまいちで運動神経はなかったけど話術が巧みだね。でも増長しやす

いところもあって、それが玉に瑕だったかな」

「……私が聞く限り普通の男に思えるんですが」

「……そうかもしれませんね」

亀山は居心地悪そうに椅子に座りなおした。

「でも最近、眠れないとか言っていましたよ。不眠症がどうたら、睡眠薬を使用しているとか……」

「ほう、そうですか」

「それから、彼の作品があるんですけど、彼、あまり学校のことが好きじゃなかったのかな、と思わされる小説がたくさんあるんです」

「たとえば？」

飯田が訊くと、亀山は虚空に視線を漂わせ、少し待って下さいと奥に引っ込んだ。暫くして、A4の紙を数枚持ってくる。

「たとえばこの小説だったら、連続殺人犯が学生だったというおちですし、こっちの小説では教師を惨殺する少年が主人公になっています。社会に復讐するという話もありますし……」

「それを言ってしまったら、推理小説作家はみんな危険人物ですよ。殺人犯を登場させている時点でアウトです」

飯田はゆっくりと椅子から立ち上がった。

「まあ何か思い出したら連絡してください。これが私の名刺です」

最後に彼は、苧田の元へと向かった。何故苧田だけを後回しにしたかと言うと、彼は都内に住んでいなかったのである。彼は首都に隣接する県に住んでいた。飯田はブルーバードを運転しながら十六夜が無理やり持たせた軽食のハンバーガーを口に運んでいた。持っていくのをあれだけ渋ったくせに、結局食べるのかとウェイターは飯田をからかったが、飯田は何も言わなかった。

「で、プリンスは誰が怪しいと思います？」

『苧田優一の他に誰がいるかしら？　でも……』

「でも？」

飯田はハンドルを切りながら聞き返した。

『あまりにも、『苧田優一が犯人である』状況証拠がありすぎて、

気に入らないわね』

「確かにそうですね。来校者名簿に残された名前、荻田優一によって発案された中学校来校、しかも作品」

『本当に荻田が犯人だったら、警察と探偵を舐めるな、と言いたいわね』

「小説や漫画だったら、ここが推理の分かれ目ですよ。裏をかいて荻田が真の被疑者であるか、或いは誰かが荻田を陥れようとしているのか」

『貴方が解決した事件ではどちらの方が多かったの？』

「そうですねえ……そもそもこんな状況に陥ること自体少なかったですよ」

国道を突っ走る赤のブルーバードに向かって、いつしか天から雨が降り始めた。飯田は舌打ちすると、ワイパーを作動させた。ついでに操縦モードを手動から自動に切り替える。

飯田のブルーバードにはカーナビなど必要ない。ウェイターが道に迷うことなどまずないからだ。

それでも飯田は念には念を入れて、GPS搭載のカーナビを車に設置している。そんな彼の態度に、最初ウェイターは創造主のくせに自分を信用していないのか、とひねくれた考えに囚われていたものだ。

しかしそれが、飯田なりのウェイターと言う一AIの負担を減らすようにする努力であることに気づいた時、飯田には何も言わないことにした。

飯田が自分の口調を直そうとパッチファイルを当てようとするときは全力で拒否するが。

荻田優一の家についたのはそれから約四時間後だった。道路はそこそこ空いていたのだが、雨のせいでスピードを落とさざるをえなかったことが第一の要因だろうと飯田は思った。

荻田の家は一戸建てで、小さいながらもそれなりの幸せを享受しているように見えた。荻田はカッターシャツとスラックス、白衣姿

で彼を出迎えた。

「家でも普段そんな恰好をしているんですか？」

「ええ、そうですけど」

「……そうですか」

飯田は何となく嬉しくなった。しかし、荻田に心を許したわけではない。

リビングは整然としているというよりも、単に物があまりにも少ないだけだった。テーブルと椅子以外に何もない。荻田は客である飯田より先に座ると、どっかと椅子に座りこんだ。短い足を組み、両手を組む。

「で、僕に聞きたいことはなんですか？」

「そうですね……貴方が訪れた日に小中学校で爆弾事件が起きました。それは、ご存知ですよね？」

「ええ。勿論……つまり容疑者と言うわけですか」

「その通り、被疑者です」

「と言われてもなあ……僕は僕が犯人じゃないことを知ってる。だけど、それを証明しろと言われてもできないからなあ……」

「そうですね。それができない限り、貴方は永遠に被疑者です」

飯田は椅子に座りなおした。昔から木製の椅子に座ると肩が凝る。その上、座り心地が悪いのだ。

「では質問を始めましょうか。小学校に行った理由はなんですか？」

荻田は顎を撫でながら天井を見上げた。それから思い出したように眼鏡をかけ直す。

「いや、そう言われてもなあ……懐かしさを覚えて、としか言いようがないんですけど」

「そんなものなんですか？」

「ええ。なんて言うかその……お恥ずかしい話ですが、高校生活や大学があまりうまくいっていなかったものですから……何となく、人恋しくなって、そのですね……」

上手く自分の言いたいことを伝えようとするのだが、話が支離滅

裂になっている。飯田はそんな彼をじっと観察していた。

「では、次の質問を。この曲をご存知ですか？」

飯田はヴェルディの『怒りの日』を再生させた。苅田は一瞬で理解したらしく、ああ、と呟いて怒りの日と答えた。

「……合ってますよね？」

「ええ。正解です。警察はまだ発表していないのですが、現場にはヴェルディのレクイエムのCDが残されていました。心当たりは？」

「そうですね……昔文芸部でこの曲を使用してちょっとしたCMみたいなものを作ったんです。だから、当時の文芸部に所属していた人間なら皆知っているはずですよ」

「その文芸部と言うのは、これですか？」

飯田は鮫島から借りてきた写真を上着のポケットから引っ張り出すと、苅田に見せた。

「ああ、これです」

「貴方は学校は好きな方ですか？」

「いえ、どちらかと聞かれれば嫌いですね。集団に縛られているのは一番苦手なんです。ああ、でも中学校生活は最高でしたよ。文芸部とは名ばかりで、やりたい放題でしたから」

苅田は苦笑しながら言った。その顔はどこかおどけたようなところがあり、本当のことを言っているのかわからない。飯田はそんな彼の一挙手一動に注目していた。彼の眼は、微妙に苅田の左腕が震えていることを見逃さなかった。

「……お邪魔しました。警察の方からも質問があるかもしれませんが、まあ面接の時を思い出して冷静に答えていって下さい」

「警察ならもう来ましたよ」

苅田は始終苦笑しっぱなしだった。飯田もまた少し笑いをこぼすと、苅田の家を去った。颯爽とブルーバードに乗り込む飯田の後ろ姿に、どこか羨望にも似た視線を送っていたのは、かつての自分の少年時代を思い出していたからなのかもしれない。

「どう思います、プリンセス」

『苺田が怪しいことに変わりはないわね』

「そうですね。ちょっと滝さんに連絡してみましよう」

飯田は自動操縦モードに切り替えるとカーナビのボタンを操作した。

このカーナビはウォール財団特別開発部が作成したもので、GPS搭載のカーナビゲーションシステムに加え、電話機能まで付属している。テレビを見たり音楽を聴くことも可能だが、飯田はあまり使用することがない。

「もしもし、滝さんですか？」

『ああ、そうだが？ 飯田か？ 何の用だ』

滝は相変わらずぶっきらぼうに電話に答える。飯田は天然パーマがかかった黒髪の滝の端正な顔立ちを思い浮かべながら、言葉を紡いだ。

「小中学校連続爆弾事件があつたでしょう。あの件です」

『ああ、それか。あれがどうかしたか？』

「警察の見解はどうなんです？」

『そういうお前は？ どう考えてる？』

滝は先に飯田の考えを言わせるつもりだ。飯田は内心で舌打ちしながら答えた。

「無論、あの鮫島、亀山、苺田の三人を疑っていますよ。今のところ学校に共通点があるのはあの三人でしょう？」

『そうだな。警察も似たり寄つたりの考えだ』

「なるほど。一番嫌疑が濃いの苺田ですか？」

『……まあな』

「わかりました。それでは、失礼します」

飯田は電話を切った。

『やっぱり、苺田が全面的に怪しいということになってるわね』

「そうですね。ですが、幾つか疑問が残ります。その中で最も顕著なのは、何故レクイエム『怒りの日』を現場に残していくのかです」

『そうね……犯人は審判者を気取ってるんじゃないのかしら』

「審判者？　つまるところ、神ですか？」

『ええ。神として生贄が必要だった、とか』

「……流石にそれはないでしょう。儀式には様々な方法がありますが、爆弾で一気に吹っ飛ばすなんていくらなんでも乱暴すぎます。それではまるで、テロ行為じゃないですか」

『でも少なくとも犯人は神を気取っているんじゃないかしら？』

「神を気取っている、ですか」

飯田はプリンセスの言葉を繰り返した。ブルーバードのアクセルをさらに踏み込む。追い越し車線に車を移動させる。

『そうよ。自分が審判者だと思い込んでいる異常者。それが今回の事件の犯人なのかもしれないわ』

「仮にそうだとしても、小中学校爆破の件はどう説明します？」

飯田の反論に、プリンセスは黙り込んだ。飯田はやれやれと首を振る。この少女はあてずっぽうに物を言う悪癖があるらしい。十本の矢を的に放てば、一本には突き刺さると思っっているのだろうか。

「まあ、審判者を気取っているという解釈はあながち間違いではないかもしれませんが」

飯田は取ってつけたように呟いた。

「爆発しない爆弾は無意味です。犯人は、何を爆破したかったのでしょうか」

『学校じゃないのか？』

ウェイターが投げやりに口を挟んだ。

「ウェイター。貴方に心理学を学ばせた覚えはありませんよ」

『心配するな。私だってない。唯のあてずっぽうだ』

飯田は盛大にため息をついた。ハンドルから両手を離し、ネクタイの襟元を微調整する。

既に車は急なコーナーに突入しており、飯田は先程ハンドルを切ったばかりだった。ハンドルが左に半回転し、定位置に戻る。当然

のように、タイヤも向きを変えた。ガードレールが目前に迫る。ウェイターが咄嗟に自動操縦に切り替え、ブレーキを踏んだ。車はたちまち急停車する。

『何をやってるんだ、お前は！』

ウェイターの罵声も彼の耳には入っていないのか、飯田は顎に手を当て、じっと考え込んだまま、フロントガラスを睨みつけていた。

「……ウェイター、『怒りの日』を流して下さい。リピートで」

『は？ 何を言ってるんだ？ お前は』

「私は流して下さいと言ってるんです」

飯田は苛立った口調でウェイターに要求した。ウェイターはもう二度と書類の作成を手伝ってやるものか、と思いつつ音楽を再生させた。飯田は顔を右手で包み込むようにして物思いにふけていた。いつもの麻薬中毒者のような姿ではなく、目を閉じて深く、真剣に考え込む姿だった。

音楽が三回目に再生された時、飯田はぽつりと呟いた。

「……犯人が裁きたかった、いや消したかったのは、過去だったのかもしれない。」

『過去？』

「そうです。かつての自分。犯人は、自分が屈辱を感じた場面をそれぞれ鮮明に覚えていて、その自分が未だに学校にいるような気がした。だから、学校を爆破したんです。かつての自分を消し去るために」

飯田浩輔は直感像素質者である。かつて自分が見たことのある光景なら、彼は一瞬で思い出すことができる。それほどまでに、記憶の中の映像は鮮明なのだ。

仮に犯人が飯田ほどでなくても、記憶力のよい人間だったらどうだろうか。

屈辱にまみれた学校生活を鬱々として送っていたとしたら。しかも自分の姿を誰かが笑っていたという被害妄想を抱いていたとしたら。到底耐えられるものではない。

「……ウェイター。急いで滝警部に連絡を。荻田優一が通っていた高校が爆破される可能性が非常に高いです」

『と言うことは、彼が犯人なの？』

「まだそうとは言い切れませんが、私の中では黒に近いです」
飯田はアクセルを踏み込んだ。

2-5 自殺

果たして、飯田の予想は当たった。荻田が通っていた高校が大爆発を起こし、炎上したのである。一階に集中的に爆弾が仕掛けられていたらしく、学校は自重に耐えきれずに倒壊したようだ。話によれば、突如全教室につながっているスピーカーから『怒りの日』が流れだしたらしい。

日曜日だったとはいえ、自習のために学校に来ていた生徒も多く、多数の死者を出す最悪の結果となってしまった。雨が降り続く中、飯田は瓦礫を見つめ立ち尽くした。

「なんで生徒が学校に来ていたんですか！」

救急車の担架に乗せられ、呻きながら運ばれていく生徒を見、激昂した飯田が捜査員の胸倉を掴み、宙に吊り上げた。飯田の二倍ほどの体重はあろうかと思われる捜査員は十センチほど宙に浮き、もがいていた。

「学校側が警察の言葉を笑って受け流したのさ。まったく、どうつもこいつもろくなことしない」

老齢の捜査員が黄色いテープの外に唾を吐き散らしながら言った。飯田は荒い息を吐き出しながら捜査員を下ろした。よろける彼を突き飛ばすと、飯田は携帯電話を手にとった。色は黒で、折り畳み式ではない、最初期に出始めた携帯に似た形をしていた。

「もしもし。滝警部？」

『なんだ、どうした飯田？』

「荻田優一を至急逮捕するように県警に命令して下さい」

『おいおい、そんな権限俺にはないぞ』

「とにかく、これ以上犠牲を出さないためにも、彼を逮捕するしかないでしょう。犯人の目星がついているのに、貴方はみすみす犯人を逃すつもりですか？」

飯田は瓦礫の山を見上げながら言った。瓦礫の山は飯田を見下し、

お前は無力だと嘲っていた。飯田はぎりぎりと唇を噛み締めた。

「もういいです。私が直接彼の家に行って逮捕してきます」

飯田はブルーバードに飛び乗ると、自動操縦モードに切り替え、全速力で車を飛ばした。それでも荻田の家に着くまで三時間はかかった。

荻田の家はしんと静まり返っており、チャイムを鳴らしても応答がなかった。留守のようだ。それでも飯田は、壊れた門を蹴り開けると、ずかずかと庭に侵入した。乱暴にドアの取っ手を掴み、引張る。当然のごとく鍵がかかっていた。

飯田は舌打ちすると、ブルーバードに戻った。ここが住宅街から少し離れていてくれて助かった。おかげで……スペースがある。

『お、おい、飯田？』

「行きますよ、ウェイター」

飯田はアクセルを全開にすると、車で門を突き破り、ドアに体当たりした。凄まじい衝撃が走り、飯田はシートに打ちつけられたが、シートベルトをしていたおかげで大した怪我はなかった。

砂埃が消えると、飯田は車をバックさせた。駐車スペースまで戻し、サイドブレーキを上げて車を停車する。華麗にはいきませんでしたが、と自分で苦笑した。

『よくも笑えたものだな、貴様……』

ウェイターが絞り出したような声で呟いた。飯田はたちまち笑いをおさめた。

「いやその……緊急避難だったというわけで」

『殺す！ 絶対殺す！』

ウェイターはなおも喚いていたが、飯田は無視した。車から降りると、車体を労わるようにポンポンと叩く。新車同然になって帰ってきたブルーバードだったが、またもや修理に出さねばなるまい。ボンネット部分がひどくへしゃげている。飯田はもう一度苦笑いしたが、すぐに気持ちを切り替えた。ドアの残骸をひとつ飛びで乗り越える。

「苺田さん、いるんですか？」

今更ながら、飯田は苺田が既に逃亡しているのではないか、という疑念を抱いていた。仮にそうだとするならば、自分は空き家で何をやっているのだろうか、とも思ったが、首を振ってその考えを否定した。

六畳の和室、整然としたリビングなどを、飯田は両手で拳銃を構えてじりじりと進んで行った。床板が軋む度、飯田は拳銃を無闇に振り回した。

壁に背をつけ、音を立てないように横向きに階段を上る。じりじりと無限にも思える、薄暗い階段を上った先には、壁に備え付きの本棚が置いてあった。そこには、大学で彼が学んだと思われる心理学の本が大多数を占めていた。

飯田は本棚を一瞥すると、突き当たりの閉じられたドアを慎重に開いた。ドアは引き戸になっており、光沢のある木製のドアだった。

「苺田さん……？」

ドアを開いた瞬間、異臭が鼻を突いた。アンモニア臭だ。飯田は左手で咄嗟に鼻と口を覆った。嫌な記憶が逆流し始める。彼は眼を見開き、壁に凭れかかった。

身体の痙攣が止まらない。左手がぶるぶると震え始める。飯田は唇を噛み締めると、右手で左腕を押さえた。

『飯田？』

プリンセスの声に我に返ると、飯田は僅かに開いたドアに両手を引っ掛け、一気に開いた。

苺田優一が、首を吊っていた。天井から吊るされたロープに首を括り、だらりと両手を下げている。顔は意外なほどに安らかで、まるで何かに安堵しているかのような顔つきだった。彼の身体の奥にはベッドと机があり、机の上には何か書かれた紙が載っていた。飯田は拳銃をホルスターに収めた。

「プリンセス。滝警部と県警に連絡を」

『わかったわ』

飯田は荏田に駆け寄ると、ベッドに土足で上がり、彼を何とかして床に下ろそうとした。ベッドはぐっしりと濡れていた。アンモニア臭に顔を顰めながら、抱きつくようにしてまず身体を上を持ち上げる。首がロープから外れた。飯田は慎重に身体を床の上に横たえた。脈をはかる。飯田は首を振った。既に死んでいる。

『どう？ 荏田は……』

「だめです。既に死んでいます」

飯田はベッドの横に移動すると、紙を引っ掴んだ。四百字詰め原稿用紙の右上がダブルクリップで綴じられており、一番上には横文字で『遺書』と大きく書かれている。黒いマジックでくっきりと書かれており、文字に不自然な乱れは見られない。飯田はそれをぱらぱらとめくると、上着の内ポケットに収めた。そしてもう一つ、机の上に置かれている薬の封筒を手にとった。ひっくり返すと、大量の薬が出てきた。飯田はそれもまた、封筒ごとポケットに収めた。飯田は再び荏田の足元に戻ると、死体を見下ろした。滝警部はともかく、県警の到着まではもう少し時間がかかるだろう。何にせよ、現場保存に努めなければ……。

とはいえ、既に死体を下ろし、遺書や薬をポケットに収めた後だが。まあいい。警察に事情を聞かれたら眼鏡に保存してある映像データを進呈するでしょう。飯田が素早く頭を回転させていた、まさにその時だった。

突如、あの忌まわしき音楽、『怒りの日』が階下から鳴り響いた。飯田はぎくりとして身体を強張らせた。

まさか荏田は、死後自分の家を爆弾で破壊するつもりなのでは……？

そんな考えが頭をよぎった瞬間、飯田は走り出していた。階段を半ば飛び降り、玄関から外に飛び出した。『怒りの日』の音楽が鳴り響いてから、三十秒は経っていた。

飯田はブルーバードに寄りかかると、荒い息を整えた。

『大丈夫か？ 飯田？』

ウェイターが心配そうな声をかける。一応心配してくれているらしい。

家の様子を窺うが、一向に爆発する気配を見せない。

では、今のは何だったのだろうか？ 日常生活を送っている中で、突如音楽が鳴り出すもの。そんなもの、あったらどうか？ 飯田は一つだけ思い出し、自分の馬鹿さ加減を思い知らされた。

電話だ。電話の呼び出し音を『怒りの日』にしておけば、突如鳴り出してもなんらおかしいことではない。飯田の中の緊張の糸が途切れ、笑い出したくなった。もう一度現場に戻りましょうか、と飯田はゆっくりと重い腰を上げた。

凄まじい爆発音とともに、炎と煙が家の一階から噴き出した。

窓ガラスが爆発の衝撃に耐えきれずに派手な音を散らして割れる。飯田は耳を押さえ、路面に蹲った。車のガラス越しに家を怖々と見つめるが、再び起こった爆発に飯田はまたも地面に身体を押し付ける羽目になった。

飯田が三度顔を上げた時には家は跡形もなく崩壊していた。後には瓦礫と、炎と、黒い煙だけがもうもうと立ちこめていた。飯田は耳の鼓膜が破れんばかりに響いた爆発音に頭がぼうつとするのを感じながらゆっくり立ち上がった。警察官が到着し、彼の肩に手をかけるまで、飯田は警察が到着したことにすら気付かなかった。

2-6 推理

小中学校連続爆破事件は犯人、荻田優一の自殺によって幕を下ろした。連日マスコミは荻田のことを頭のいかれた狂人であったと報道し、そのように喚き立てていた。

「でも、その様子じゃ貴方は納得していないようね、飯田浩輔」

「ええ……」

飯田は自分の部屋、リビングを行ったり来たりしながら、荻田の遺書を片手に考え込んでいた。本来ならば警察が保管しなければならぬはずの重要な証拠なのだが、飯田が特別権限を使って無理やり徴発したのである。

「この遺書は、確かに荻田の手によって書かれています。文字に不自然な乱れはなく、脅されて書いたという可能性も低い。ですが……ね」

飯田は手で原稿用紙を軽く弾きながら言った。

「ちょっと読んでみましょうか。『私、荻田優一は小中、高等学校爆破の罪で死んでいきます。様々な方々に迷惑をかけ、大変申し訳ないと思っています。』

私が学校を爆破したのは、恐らく自分の恥である過去を清算したかったためではないかと思っています。実際のところ、犯人である私にもよくわかりません。しかし、動機なんて必要なのでしょうか。私は多分学校を爆破したかった。ただそれだけです』……どうです。何か違和感を覚えませんか？」

「そうね……なんて言うか、淡々としていると言えはいいのかしら？」

「その通りです。自分のことをまるで第三者的な目線で観察しているんですよ。」

さらに、彼が開設していたブログを見てみましたが、周囲に攻撃的なことを書いています。それは裏返せば、被害妄想に囚われていた、

ということの証明にはなりませんか？」

「なるほどね」

「そして、彼が通院していたクリニックに行って、医師から話を聞いてきました。医師の診断では、彼は統合失調症だったそうです」

「統合失調症……」

「とはいえ、医師の診たところそこまで重度のものではなかったそうで、被害妄想、幻覚や幻聴が少しあった程度らしいです」

ですが、と飯田は右手の人差し指を掲げた。

「既に苧田が重度の疑心暗鬼に囚われており、その医師を信用していなかったとしたらどうでしょうか。苧田はその医師にかかる前も、何度も他の心療内科を転々としています。自分はもっと重い状態であると思い込んでいたとしたら。自分とはまた違った人格が現れるのではないかという恐怖に慄いていたとしたら。」

そんな中、探偵を名乗る男が貴方は連続爆弾魔の被疑者だ、なんて告げた時、苧田の恐怖はどれほどのものだったでしょうね？」

「つまり……貴方も苧田を追い詰めた要因の一つだった、と言いたいのかしら？」

「そういうことです」

プリンセスも形のよい顎に手を当てて考え始めた。

「じゃあ……貴方は苧田以外の人間、いや人格が犯人だったと思っているの？」

「いえ……まだ断言はできませんが。一つだけわかっているとすれば、こんなが詩が残されていることだけです」

飯田は原稿用紙の最後のページをめくると、朗々とした声で語り始めた。

2-7 救世主

未だメシヤは現れず
彷徨い來たる 現世の亡霊
夢を背負いて 常に急かされ
意味も無く時を 切り刻み
常に追いつき 追い越され
気づかぬ内に 死に急ぐ者は
常に彼らの 餌食なり
希望を与え 夢を創らせ
威光を持って 従わせた後
千里の谷へと 突き落とす
黄昏に染まり 羽を光らす機械の神は
波乱万丈な 舞台を造る
仕組まれた毎日
報われぬ努力
名ばかりの自由

未だメシヤは現れず
斜陽を見つめて走る男
彼の望みは 叶えられず
足取り重く 明日へ旅する
彼の望みは 何なのか
この穢れた世界からの解放
この世界の 秩序の破壊
そのあまりに高く
あまりに無邪気な望み
叶えられるのは 何時の日か
男は願う 最後の審判

男は待ち焦れる 怒りの日
男は待ち侘び 絶望する
未だにメシヤは現れず

2-8 違和感

「……苺田には、世界がどのように見えていたのかしらね」

プリンセスはぽつりと呟いた。意味もなく身震いすると、ツインテールが力なく揺れた。

「この詩からわかるのは、苺田はあまり世間に対しよい印象を抱いていなかった、ということでしょうかね？」

飯田は目を瞑り、苺田の最期の姿を瞼の裏に描き出していた。床から三十センチほどの宙を虚しく蹴りながらぶらりぶらりと揺れていた。この間のように白衣を羽織り、ワイシャツを着て、スラックスも履いていた。

飯田はそこで、違和感を覚えた。何かが欠けている。苺田の死体には、何か重要なものが欠けている。

答えはすぐにわかった。ベルトだ。苺田の死体はベルトをちゃんと締めていなかったのだ。余ったベルトを通す穴は空で、先端もまたぶらぶらと宙を彷徨っていた。飯田は自分の記憶に頷いた。

違和感の答えは分かった。では、次の問題だ。

何故、苺田の死体はベルトをちゃんと締めて、いや入っていないのか。飯田はもう一度苺田の部屋を自分を中心に再現した。セピア色の苺田の部屋が出現する。

ごく一般的な寝室だ。ベッドと、簡易な机の他に何もない。クロゼットは閉まっていたが、多分替えの白衣やスラックスが入っているただけだろう。

「……ミス・ヴェルヴェチカ」

飯田は視界に映らない、プリンセスに向かって呼びかけた。

「貴女が自殺するとしたら、やっぱりそのドレスは着たままですかね？」

返答は言葉ではなく、行動だった。頬に鋭い痛みが走る。飯田の意識は一瞬で現実世界に浮上した。飯田がゆっくりと目を開ける

と、プリンセスはこちらをきつと睨みつけていた。

「突然黙り込んだと思ったら、何を訊いているのかしら、貴方は？
人に訊いていい質問と訊いてはいけない質問があることぐらい貴
方も知っているはずだけど」

「事件解決のために必要なですよ。さ、答えて下さい。貴女が自
殺するとしたら、やはりドレスは着たままですか？」

プリンセスは暫く飯田を睨みつけていたが、やがて乱暴な口調で
答えを吐き出した。

「ええ。やっぱり死ぬ時ぐらい、おめかししておきたいじゃない」
「いつもつけているバニラエッセンスも？」

「バニラエッセンスじゃなくて立派な香水なんだけど」

「なるほど。となると、やはりあれはおかしいですね……」

「何のこと？」

飯田はプリンセスにベルトの件を話した。プリンセスは眉を顰め
たが、頷いた。

「苧田が普段からそうしないというならば、確におかしいわね。
自殺する時にベルトをしつかりと穴に通さないなんて」

「そうですね。私だって自殺する時ぐらい、タキシードに身を包
んで、きっちりズボンの穴にベルトを通して死にたいものです」

貴方はいつだって高級スーツを着込むスノッブでしようが、とプ
リンセスは憎たらしい飯田に向かって言ってやろうかと思ったが、
声には出さなかった。

「となると、苧田は服を着ていたんじゃないくて、着せられたんでし
ようかね。何者かの手によって。無理やりに」

プリンセスははっとしたように飯田の顔を見上げた。

「貴方、まさかそれ……」

飯田はゆっくりと頷いた。澄まし顔で髪を掻き上げるその姿が様
になっていて、憎たらしい。

「そうです。苧田優一もまた被害者であるという可能性ですよ」

飯田は再び目を閉じた。セピア色の世界で一回、指を鳴らす。事

件の再検証を始めた。

苧田優一は睡眠薬を服用していた。効果のほどは服用している薬にもよるが、苧田は犯人が家にやってくるまで寝ていたと仮定しよう。

犯人は飯田が来る前に苧田家を訪れていた。そして、家の中に侵入した。どのように侵入したのかは謎だが、苧田家には裏口もあるはずだ。飯田ほどではなかったとしても乱暴な手段で裏口を破壊して入ってきたとも考えられる。

それはさておき、犯人は苧田に対し明確な殺意を持ってやってきたに違いない。爆弾や首吊り用のロープまで用意しているのだから、犯人は寝室に向かうと、まだ寝ている苧田の首にロープを巻き付け、一気に締め上げた。ベッドが濡れていたのはそれが理由だ。人間は死ぬと失禁するからだ。氣道をロープで圧迫され、流石に苧田は目を覚ました。本能的にロープを掴み、外そうとする。

だがそこで、苧田は抵抗をやめる。何故か？ 相手が見知った人間であることに気づいたのと、自分が小中学校を爆破したと思い込んでいたから。もうこれ以上何にも悩まされることなく逝ける。だから苧田のあの顔は安堵するかのような笑みを浮かべていたのだ。彼に強固な自殺願望があったというのは、かかりつけ医から既に聞いている。

苧田を殺すと犯人は、苧田の服を着替えさせた。ベルトが椅子にかかっていたということは、椅子の上に前もって苧田が着替え一式を置いていた可能性がある。ベルトの先端を通すことを忘れてしまった理由は急いでいたから、なのだろうか。まあいい。

犯人はそれを取って苧田に着せた。脱がしたものは洗濯機にでも叩きこんでおけば、あとは爆弾が始末してくれる。苧田を天井から吊るすと、犯人は家を出て、飯田が来るのを待ち伏せていた。使用された爆弾は音に反応してスイッチが入り、音が途切れると爆発する代物だろう。中々爆発しなかったのはそれが理由だ。

だが、飯田を殺すことはできなかった。飯田に爆弾の存在を気づ

かれたからだ。爆発炎上する苧田の家を尻目に、真の被疑者は逃亡した。そんなところだろう。

「おかしいじゃない。それだったら、貴方が家に入った瞬間、スイッチ一つで爆発する爆弾で貴方もろとも吹き飛ばすという手も取れたはずよ？」

「ええ。ですがその場合、『苧田優一が死んでいること』を目撃する人間がいなくなります。苧田優一を目撃した後に死んでもらわないと真の被疑者にとっては困るんですよ。被疑者は苧田優一その人だったのですから。最も、貴方の言ったとおり苧田優一が逃亡したとみせかけた方が、案外よかったかもしれませんかね」

プリンセスはなるほどね、と言いたげに頷いた。

「何にせよ、他に被疑者がいるはずですよ。その人間を逮捕しない限り、この事件は終わったとは言えません。三件の事件のどこかに、真の被疑者につながる証拠があるはずですよ」

そこへ、滝から電話が入った。ウェイターが応答する。

『はいもしもし、飯田浩輔ですが』

『飯田か？ ニュースを見ろ。今すぐに』

飯田は滝に促されるままにテレビをつけた。画面一杯に炎上する小学校が映っていた。飯田とプリンセスは啞然として画面を食い入るように見つめた。

『臨時ニュースをお伝えします。都内の小学校がまたも爆発しました。使用された音楽はヴェルディのレクイエム『怒りの日』で、警察は苧田優一の模倣犯だと考えて捜査を開始しています』

『……滝さん。まさか警察は……』

『そうだ。レクイエムが使用されていたことをマスコミに話している』

「なんでそんなことを……！」

我に返ったプリンセスが唇を尖らせる。滝は苦々しげに言った。

『包み隠さずマスコミに本件を伝えろと上からの命令があつてな。言ったらこの有様だ』

飯田は仕方なく、滝に自分の推理を話した。ウェイターが常時回線を監視しているため、盗聴される心配はない。

『本当か？ それなら、警察が取った行動は……』

「ええ。最悪なことになりそうです」

飯田は苦々しく言った。滝は沈黙したまま、電話を切った。部屋の空気は重苦しいものへと変貌していた。

荻田優一が死亡した後、逆に警察はこれまでに忙しくなった。『ディエス・イレ』が鳴り響く中、警察は模倣犯を次々と逮捕していった。多くは愉快犯で、ろくに爆弾を作ることできない人間ばかりだった。真の被疑者もそれを面白がって見守っていることだろう。飯田は己の無力さに打ちひしがれていた。

プリンセスは半ば自暴自棄になって珈琲を一日五、六杯飲み干す飯田に付き添ってヨークシャーピングを口に運んでいた。

「珈琲もほどほどにしておきなさいよ、飯田浩輔。カフェインの過剰摂取は身体によくないわ」

「一升酒を飲み干すよりはましだと思いますがね」

飯田はカップチーノのクリームを珈琲に溶かしこみながら言った。プリンセスは小脇に抱えたモバイルPCを飯田の前に置いた。探偵同盟のプログラムに接続されており、ナイトとプログラムが繋がっていた。

『もしもし、プリンセスか？』

「ブー、バトラーでした」

飯田は退屈そうに頬杖をついて呟いた。

『……バトラー。何を悩んでいる？』

「何も悩んでませんよ。別に、警察がへまをやらかしてくれたおかげで、事件解決が難しくなったとか、そんなのじゃないですから」
『たまには頭で考えてみる。バトラー。体当たりもほどほどにな』
「はいはい、わかりました」

飯田はキーボードのショートカットキーで接続を切った。プリンセスはため息をつき、飯田からモバイルPCを取り上げた。

「ナイトもああ言っているんだし、貴方も頭で考えた方がいいんじゃないの？」

「そうはいいますがね、ミス・ヴェルヴェチカ。私は何時だって物

事を計算してやりくりしていますよ」

「書類一枚提出できないくせに、よく言うわね」

飯田は押し黙った。プリンセスもまた黙りこみ、重苦しい空気が場を支配した。

「そんなに拗ねてないで、現場に行ってきたらどうですか。飯田」
プリンセスは突然耳元から響いてきた声に肩をびくりと痙攣させた。振り返ると、十六夜がプリンセスと飯田を引きはがすように後ろから現れた。

「そうはいいますがねえ……というか、私は別に拗ねてません」
「思いつきり拗ねているじゃないですか」

なにも載っていないお盆を両手で抱え、いつものようにとってつけたような無表情さで、十六夜は指摘した。核心を突かれた飯田はだるそうに立ち上がった。

「わかりました。そこまで言うんなら、ちょっとドライブしてきますよ。別に現場に行くとかそんなんじゃないですからね。誤解しないでくださいよ」

「はいはい、行ってらっしゃい」

十六夜は僅かに笑みを見せると、飯田を見送った。飯田の後ろ姿が見えなくなると、再び表情を急変させ、無表情になった。

「ミス・ヴェルヴェチカ。貴方はどうしますか？」

「え？ 私？」

「はい。そのお皿を下げてよろしいでしょうか？」

「へ？ あ、ああ……構わないわ」

プリンセスは十六夜に後のことを任せると、部屋に戻った。カードを通し、ドアを開く。ニッポンの旅館というものもよかったが、やはり母国風の部屋の方が落ち着く。

深呼吸して、気持ちを切り替える。プリンセスはもう一度荻田優一たちの過去を洗い直そうと決意した。どんな犯行動機も、全ては過去にある。それがプリンセスの持論だった。プリンセスはモバイルPCを開くと、飯田と共有していたフォルダに入っている、彼が

調べ上げた苧田たちの過去を時系列順に箇条書きにしたものを開いた。

「苧田優一、三十二歳……幼稚園、小学校、中学校ではムードメーカーとして周囲を盛り上げるが、高校からは集団に属せず、主に単独で行動していた……」

プリンスはその記述に眉を顰めた。違和感を覚えるのだ。

普通人が性格を変えようとするのは容易なことではない。

ムードメーカーというのは大抵人を盛り上げるために自ら目立とうとする。つまり、自己顕示欲の強い者が多い。少なくともそのようにプリンスは解釈している。

しかし苧田の場合、それが当てはまらない。高校生に入って突然人が嫌いになったとは思えない。最も高い可能性は、苧田は最初から人が嫌いだった、というものだ。

苧田優一は自己顕示欲が強い男である。なおかつ、人が嫌いな男である。この命題はありえるだろうか？ あってもおかしくはない。だが、人が嫌いだと仮定した場合、重大な問題が発生する。

彼の自己顕示欲を満たしてくれるのもまた彼自身が嫌いである他人に他ならないのだ。自分を自分で評価できる人間はそう多くない。割り切ることができればよいが、人間そう割り切って物事を考えることは難しい。

となると、常に一定の評価、しかも、できるだけ高い評価を与えてくれる人間が周囲にいないなければならない。苧田の場合、それが中学校時代の文芸部の仲間だったのだろう。自分の引き立て役として、文芸部という存在は大きかったに違いない。

そして、どんなに人間不信に陥っている人間でも、人とのつながりを欲する。孤独という言葉は、人のぬくもりを知っている人間のみが味わうことができるのだ。苧田が独りで生きられるほど強い男だったとは思えない。

つまり、交友関係があまりにも少なく、自尊心が高く、なおかつ自己顕示欲の強い苧田は、その中学校文芸部という狭い交友関係に

依存していたのではないだろうか……？

犯人は、苧田のことをよく知っている。苧田が統合失調症だったことも。

そこまで考えて、プリンススははっとした。もう一度苧田優一たちの過去を調べ上げる。

苧田優一を小学校時代から知っており、親友だと称した男。

間違いない。亀山俊夫こそが、この事件の犯人だ。プリンススはそれを確信した。

だが、証拠がない。小中、高校に爆弾を仕掛け、苧田に苧田の別の人格が存在すると囁きかけ、苧田を殺めたという証拠がない。

それでもプリンススは、自分の気付いたことを飯田に告げようと部屋を飛び出した。飯田の部屋のドアをカードで開き、ウェイターを叩き起こす。

「今すぐ飯田につなげて頂戴。彼に伝えたいことがあるの」

『犯人につながる情報ですか？』

「ええ」

少しお待ちください、と敬語でウェイターは応対した。数秒後、憎たらしいほど落ち着いた飯田の声がスピーカーから漏れた。

『はい、飯田浩輔ですが』

「飯田。犯人は亀山よ」

『……ほう、そうですか』

飯田は大して驚いた様子でもなく、プリンススに言葉を投げ返した。まあ彼も彼なりの手段で推理したのだろうとプリンススは思った。

「でも証拠がないの。なんとかして亀山を逮捕できないかしら？」
『……やってみますよ。まあ、ヨークシャープティングでも食べながら待っていてください』

飯田は電話を切った。プリンススは飯田のそつない態度に憤然としたが、やがて自分の態度が大人気なかったのに気づき、ため息をついた。

2-10 闘い

飯田はブルーバードから降りると、最初に爆破された小学校のグラウンドを踏みつけた。私立の小学校とは違い、人工芝で覆われておらず、少しの風で砂埃が舞う。飯田は顔を顰めた。せつかく磨いた革靴が砂で汚れてしまうじゃありませんか。

校門の脇のベンチに、亀山俊夫が座っていた。ジャンパーにジャケットにTシャツ、ジーパン、バックパックというおかしな姿だが、まるでリストラされたサラリーマンのように虚ろな目をしている。飯田はその隣に腰掛けた。

「わざわざここに呼び出してしまってますね。亀山さん」

「……俺に何の用ですか」

「いえ、大した用ではないんですけどね。もう一度、荻田さんのことについて教えてくれませんか？」

亀山は遠い目をしてぼつりと呟いた。

「あいつは……あいつが爆弾魔だったなんて、俺には信じられませんが」

「私にも信じられませんか。自分の学校を恨んでいたからって警戒されている中、高校を吹き飛ばすなんてあまりにも馬鹿らし過ぎるではないですか」

「じゃあ、貴方は他に犯人がいると考えているんですか？」

「ええ。勿論です」

「誰なんですか、それは？」

「被疑者ですか？ 貴方です」

亀山は黙り込んだ。ジーパンに突っ込んだ左腕が痙攣する。

「何故、俺だと？」

「まず第一に疑問に思ったんですよ。何故、貴方が荻田さんの作品を保存していたんです？」

「それは……俺のことを親友だと思っていてくれたからじゃないん

ですか？」

「ありえなくはないですが、違いますね。苅田さんはインターネット上に自分の作品を公開しています。どれもコテハンでね。

電腦空間にいくらでも小説をアップロードする人間が、どうして貴方に作品を預けなきゃいけないんです？」

「……俺だけのために書いてくれた小説だった、という可能性は？」

「……まあいいでしょう。そして、もうひとつ。苅田さんの書いていた遺言の中にあつた詩ですが……」

飯田は上着のポケットから遺書を取り出し、続けた。

「これは、貴方の作品なんじゃないですか？」

「どうしてそう思うんです？」

「苅田さんの小説、全て読破したんですよ。こう見えても私、速読だけが特技なので。

話を戻しますが、その小説の中に、救世主が出てくるんです。メサイア、とね」

「……それがどうしましたか？ メシヤはメシヤじゃないですか」

「違いますね。何故同じ人物が書いたのに、救世主の呼び方が二種類あるんです？ 普通、こういう書き方は統一するはずでしょう？」

「……でも、俺が書いたという可能性はないじゃないですか」

「まあ、確かにそうです」

「結局、あんたの推理は全部蓋然的だ。もっと決定的な推理の一つもできないんですか？」

亀山が荒い息とともに吐き出す。飯田はもう一度確かにそうです、と呟き、ベンチから立ち上がった。

「ですが、導き出される答えが合っていればいいんです。貴方が小中高校を爆破した被疑者ですね」

飯田はコルト・ディテクティブ・スペシャルを亀山の額に突きつけた。亀山がハッと息を呑む。

「もう逃げられませんかよ。亀山さん」

「……俺は無実だ」

「嘘は通用しません」

飯田はぐりぐりと額に冷たい銃口を押しつけながら、亀山の前に回り込んだ。俯こうとする彼の顔を押し上げるように銃に力を込める。撃鉄を起こすと、亀山の顔色が急変した。

「小中高校を爆破する際に何故『怒りの日』を使用したのか？ それは単に、貴方を救ってくれるはずの救世主が現れなかったからです。」

現れないのなら、無理にでも現れてもらえばいい。そう思った貴方はあの音楽を使い、次々と学校を爆破したんです。怒りの日が来るのを信じて。全ての秩序が崩壊されることを信じて、ね」

「そうか……あんたはどうしても俺を犯人にしたいんだな？」

「ええ。だって貴方が、真の被疑者ですから」

「じゃあ……これでも喰らえ！」

亀山が素早く左腕を動かした。ピン、と何かが外れる、場違いなほど涼しげな音が響いた。飯田は咄嗟に亀山から離れると、彼に背を向け、地面に身体を投げ出した。耳に指を突っ込み、両の瞼を閉じる。飯田には、今の音に関して聞き覚えがあった。手榴弾のピンが外される時の音だ。

轟音と閃光が辺りを包み込んだ。飯田の閉じられた瞼の裏は一瞬で白に染まった。音の衝撃は大きな波となって飯田の鼓膜を破らるばかりに響いた。指を耳に突っ込んだおかげか、響いてきた音は大分小さく、飯田は気絶することはなかった。亀山が使用したのは閃光手榴弾だったらしい。今のをウェイターが中継しているとすれば、確実にスピーカーは壊れたでしょうね、と飯田はあまりに場違いなことを考えていた。

ぼやけた視界が徐々に鮮明になっていく。飯田は身体を起こすと、亀山の方を振り向いた。亀山はコルト・ディテクティブ・スペシャルに飛びついていて。先ほど飯田が投げ出してしまったやつだ。拳銃は暴発し、弾が発射されたようだった。だが、まだ何発か残っている。飯田は舌打ちし、背広の背中に左手を回し、隠しポケットか

らS&WのM60を抜き出した。撃鉄を起こし、ふらつく頭を押さえながら発砲しようとする。

亀山の方が速かった。亀山は予想以上に重い引き金をなんとか引き絞った。発射された弾丸は飯田の右肩をぶち抜いた。飯田はがくりと膝を地面につけてしまった。亀山がバックパックに手をつ込み、新たな手榴弾を取り出す。ピンを口で咥えて引き抜き、こちらに向かって投げつける。足元に転がってきたそれを、飯田は遠くへ蹴り飛ばした。

手榴弾が爆発した。今度の手榴弾は破片手榴弾だったらしく、何百もの破片が半径五メートル辺りに飛び散った。飯田は背広を翻すと、背中で爆発を受け止めた。

次は飯田が発砲した。飯田の射撃は正確で、逃げ回る亀山の右脚を正確に撃ち抜いていた。亀山が転倒する。倒れた衝撃で再び引き金を絞り、拳銃から弾が発射される。綺麗な線条痕の付いたそれはグラウンドの土に斜めから突き刺さった。

飯田が亀山に駆け寄る。歯を食いしばり、必死の形相をした亀山は自分の蟬谷に銃口を突きつけ、引き金を絞ろうと右腕に力を込めた。飯田がそれを阻止するために再び発砲する。亀山がリボルバーを取り落とした。

「貴方の負けです」

飯田が銃を突きつけながら言った。

師走の冷たい風がグラウンドに吹き付け、砂埃が舞った。

2-11 解決

飯田とプリンセスの推理は正しかった。小中高校を爆破したのは、亀山俊夫その人だった。

亀山は飯田が手錠をかけた後も、頑としてその事実を認めようとしなかったが、飯田の指示で自宅が搜索されると、大量の爆弾が見つかった。その事実を突きつけられると、亀山は観念したのか全てを自白した。

幼い頃から苅田のことを見てきた亀山は、いつしか彼に対して劣等感を抱くようになり始めた。その劣等感はいくつの日、とうとう爆発してしまったというわけだ。飯田はそれを、

「感情という名の時限爆弾」

と喩えたが、それが一番正しいだろう。亀山は後々まで、

「救世主が現れなかったから」

「奴はメシヤじゃなかった」

と主張していたが、何にせよ、それらは些細なことだ。

大きな恥ずべき事実と言えば、日本警察はまたも、飯田浩輔に大きな貸しができたということだ。

問題の飯田と言えば、ウェ이터に説教されていた。プリンセスを空港まで送り届けるという話だったのだが、いつの間にか今回の事件の回想タイムになり、ウェ이터のお説教タイムへと変貌するのにな、そう時間はかからなかった。

『だからだな、飯田。もっと穏便に物事を解決することが……おい、聞いているのか?』

「ええ。八幡大菩薩は阿弥陀如来なんですよね。知ってます」

飯田は左耳を左手の人差し指でほじりながら言った。ウェ이터が怒鳴るたび、カーナビの画面が震えた。

『全然聞いていないじゃねえか! この間抜け!』

「間抜けとはなんですか。本地と垂迹の関係は覚えるのが大変なん

ですよ。それを貴方は……」

『誰も話せと言っていない!』

「飯田浩輔……貴方、自分の造ったAIをからかって、何が楽しいの?」

プリンセスが後部座席から、退屈そうにジト目で飯田とウェイターのやり取りを見つめる。芸人のようなやりとりだ。それが面白いかどうかは別だが。

「そうですねえ……ロボット三原則に従って行動しているはずのAIなんですが、どうやらプログラムに致命的な欠陥があったようですね。御覧の通り、性格は悪いわ、創造主を侮蔑するわで、最悪のAIです」

『創造主の顔を見てみたいもんだね』

飯田の文句を鼻で笑って受け流し、ウェイターはプリンセスに別れの言葉を述べた。既にブルーバードは空港に到着していた。飯田は運転席を降りると、さっとプリンセスが降りられるようシートを倒した。二ドアなので、いちいちシートを倒さなければならぬのがやや不便だ。ちなみに飯田の所有しているブルーバードは助手席側に運転席がある。日本製ではない。

プリンセスは飯田に礼を言うと、トランクを身体の前で抱え、しっかりとアスファルトをハイヒールで踏みしめた。銀色に光る重そうなトランクを軽々と持ち、彼女は飯田に手を引かれて空港へと入った。報道陣はウォール財団前で既に撒いている。

しかし、彼の顔写真を撮ろうとする者は多いので、飯田は茶のサン・グラスをかけていた。

人込みの中を足早に駆け抜けながら、飯田とプリンセスは言葉を交わした。

「結局、日本には何日滞在したんです?」

「三週間とちょっとかしら。なかなか楽しかったわよ。やっぱり、神秘的な国ね」

「そうですね?」

私には何とも言えませんが……それより、本当

に普通のジャンボ機に乗って帰るつもりですか？」

「まさか専用機があるとは思っているの？ あったとしても、そんなのに乗ってちゃ、旅行の楽しみというものは味わえないわよ」

「なるほどですね……」

ところで、とプリンスは首を傾げた。

「次来る時は一度死んだ方がいいかしら？」

「……ミス・ヴェルヴェチカ。貴方、大英帝国出身でしょう？」

「……やっぱりわかった？」

舌を出し、軽く頭を握りこぶしで叩く。子供っぽい仕草で、普段の歳不相応な落着きとは正反対だ。だが、飯田は冷ややかに彼女に告げた。

「そういうの、似合う人と似合わない人がいますよ」

「……そうね。自分でも似合っていないと思ったもの」

プリンスは一瞬で表情を元に戻した。飯田は何も言わずに頷いた。二人は雑踏の中、二人だけに用意されたステージの中で立ち止まった。まるでバリアでも張られているかのように、周囲の人々は彼らを避けて歩いていく。飯田は一度プリンスとの手を離すと、サン・グラスを外し、プリンスに向かって手を差し出した。彼女は迷うことなくその手を掴んだ。一瞬交わされた握手はすぐに離れた。お互いのぬくもりを掌に残しながら。

「さよなら、飯田浩輔」

「さよなら、ミス・ヴェルヴェチカ」

二人はお互いにゆっくりと背を向け、歩き出した。一度も振り返らなかった。

『おい、どうした？ 早く乗れよ』

ウェイターにせかされても、飯田は返答しなかった。車に寄りかかる飯田の顔は、ひどく真剣だった。眉間に皺をよせ、左手を口元にあてて考え込んでいる。

やがて飯田は、ぽつりと言った。

「……私も、暫く休暇をとります」

『お前がか？ 一体どうしたんだ？』

「いえ……少しね。これから、忙しくなる気がするんです」

『それは推理か？ 勘か？』

「勘ですよ。探偵としての」

『まさか、これ以上仕事が来るわけないだろ……』

ウェイターは自嘲するように呟いたが、飯田は聞いていなかった。車に寄せていた身体を、反動をつけて一気に動かし、車から離れた。その瞬間、彼の上空を一機の飛行機が西の空へと飛んで行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6428w/>

慇懃無礼な過激派探偵

2011年10月22日07時02分発行